

庫文説小本

特263

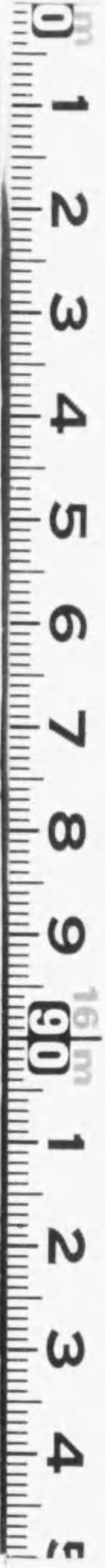
26

那 支

郎一廣河田前



堂 陽 春



始



624

特263
26



那 支

郎一廣河田前

堂陽春



支
那



コックの李刀達にとつて、この世の中で何が一番楽しみかと云へば、他人を——わけても西洋人を食べ物の上で騙すことを指してはほかになかつたのである。

實のところ、支那人に騙されまいとして、碧い眼を猜疑心にひからしてゐる西洋人ほど、騙して騙しやすい人種といふものはなかつた。

巧妙な切開手術のやうに、李刀達に騙された唯一の證據は、騙された當の人間が、すこしもそれと氣のつかなくかつたことである。従つて、それが途中で發覺した場合には、騙す方が失敗してゐたといふことになつたのである。

さういふわけで、曾て、香港の生絲取引所のバツクスター家で、スープやローストの調味料として用ゐてゐた蛇の骨を、偶然な機會から、不用意にも犬にさらはれたことは、彼にも似げない不覺であつた。尤も、この場合、それまで、三ヶ月あまりも同家の厨房を主宰してゐたところから、彼が解雇されて間もなく、バツクスター夫人が氣が狂つて、本國へ歸つたといふ噂が立つほどまでに、黒蛇や縞蛇の燻煮を同家の家族や客人に食はせることは出来たといふ事實を認めねばならない。

このときの失敗は、その後の彼を、ますます巧妙に秘密主義にした。

そして、すべての秘密のうちで、最も安全な秘密は、公開された秘密であるところから、彼れの話詐

術も一段と大膽に勇敢になり、たぎつてゐるスープ鍋に源五郎蟲や沙蠶のやうな昆蟲が這入つてゐようと、濃厚なミンツ・パイの中に多少の臭味のある怪しげな肉がまじつてゐるやうが、グース・リヴァ・パイに鼠の肝臓らしい物を混じた疑はあつても、それらを、ややそれらに近い物として食はせるほどの牙えた割烹上の手腕を、彼は會得してゐたのであつた。

海狗魚と稱して廣東では珍重がられる山椒魚を、その外見だけから迫害する西洋人に、多少の龜の肉とまじへて、豌豆のスープに浮かべながら、タートル・スープとして勧めるときの李刀達の満悦した顔の表情は、強ち、値段のひらきから来る小額のコムミツシヨンにだけ満足しての笑顔ではないのである。それには、嫌な人間には唾を吐きかけた食物を恭々しく持つて行く料理人だけの知つてゐる深い、内屈した、陰險な幸福感が漲つてゐるのだ。これは、李刀達の現在まで成し得た、一つの種類の復讐であつたのである。かうして、三年前に、船のコックをやめてから、李刀達の非凡な料理に、舌鼓を打つて来た西洋人の家庭は、優に一ダース以上はあつた。そして、その十二三軒目に相當するのは、現在の彼れの勤め先である、沙面の英國總領事館詰副領事、ジイ・エム・ハムマーストン氏の家庭であつた。李刀達の排外思想は、べつに孫中山の三民主義思想の體系といふやうなやかましいものから出發したのではなかつたが、彼と孫中山先生とは偶然にも郷里を同じうしてゐたといふ事がある。孫中山先生の故郷は香山縣の翠亨村であつたが、李刀達のそれは芙蓉村であつた。この僅かの距離の差は、茫漠とした支那大陸に於ては、實に同じ村も同様なことであつて、その點、あらゆる偉人が、必ず何かの特長か

ら、時々は、その缺點から、他人を感化する力を持つやうに、孫中山は、李刀達を地理的關係から感化したとも云へる。それが、又、同じ廣東州に生れたと云ふだけでも、無数の後輩の思想を刺戟せずに置かなかつた、孫中山のことなのである。

李刀達は、ハムマーストン家の、いつも外國軍艦の饅頭のやうな船體の見える窓から、複雑な希望をもつて、珠江を中心とした世界を眺めてゐたのであつた。——
第一に、彼は、世の中が騒がしくなつて行くことに興味を抱いてゐた。いろいろの軍隊が、方々から廣東地方へ雪崩れ込んで、四五十人づつの死んだ兵隊を、河の中や丘の上へ残して運げて行つた。その都度、鼠色の中山服を着て、赤地にちよつと青い縁を取つたネクタイをつけた國民軍が、いろいろなことをやりはじめたのである。彼等は、隊伍を組んでは、町へポスターを張つた。突然と黄埔の方から軍用自動車でやつて来て、市内を赤い傳單で埋めてしまつた。それから、軍人とも學生ともつかぬ、若い眼鏡を掛けた男が、をりをり街角へ立つてははげしく、珠江の軍艦の方へ手を揮つて演説をし出した。かうしたことは、雑賭をはやらせたり、阿片ばかり吸つてゐたもとの軍隊のゐたときにはあまりなかつたことである。尋ね人や小泥棒や殺人事件などは、五千人、六千人といふ労働者のストライキに打消されてしまつて、警察でも、殆ど振り向きもしなくなつた。廣東は、碼頭の苦力や黄包夫からはじまつて、軍政府の番兵にいたるまで、いまに何か起るぞ！と、眼と眼を見交してゐる風だつた。
李刀達には、よくその理由がわかつてゐた。黽くとも、わかつてゐたと信すべき理由を、彼は持つて

ゐたのである。彼れの知つてゐる範圍では、最近、急に市内の役所にロシア人が殖えはじめて、盛んに男女の學生を集めては、講義をしたり、行列をさせたりしてゐるのである。そして、さういふ不思議な教授をうけた若い者は、どれもこれも同じやうに理窟つぽくなつた上に、妙に鳥打を横つちよに被つて、一つ籠のもやしみたやうに皆同じ人間になつてしまふのであつた。これらは一見して、ロシア人の眞似をしてゐることはわかつた。そして、廣東クラブや商業會議所にゐる英國人は、何故かしら、このロシア人をひどく嫌つてゐたのである。況んや、彼れの主人であるハムマーストン氏夫妻は、朝から晩まで、窓から顔を出すごとに、ロシア人を罵り、孫中山先生を攻撃してゐたのであつた。ロシア人は、既うの昔に共和國を作つてゐた。

さういふ場合の李刀達は、平素よりもつとにこにこしてゐて萬事に遺漏のない仕事振りを示しながら、蔭では手鼻をかんだ手でアスパラガスを弄り、ステユウの中へベツと唾を吐いては匙で捏ね廻はして、恭々しく主人夫妻の食卓へ持ち運んだ。

「あのロシアの乞食どもが！ いまに眼に物を見せてやるから——彼奴等は、何も知らない支那人を煽動して、例の陰險な赤化運動を、香港に、廣東に、支那全國へ企らまうと思つてるのだよ！」

かういふ副領事閣下の、ややブランドリーの利きはじめた舌のもつれた氣焰を黙つて聴いて、厨房へ卻いた李刀達は、わざとチエーズの二三片を、ぬるぬるした水の溜つてゐる流し下へ墜して、ろくに拭きもせず、幸福な笑顔を見せながら、夫人の腕輪と主人の指輪とが、電燈の下で胸し合つてゐるほどの

距離へ据ゑるのであつた。

「へん、これで月給になるんだからな、西洋人といふ奴はお目出たく出来てるものさ。——だからよ、だから、俺は忠告するんだが、決して支那人のコツクなんて儲ふもんぢやないよ！」

主人夫妻が、食事を済ましてから、ひとりて上等の肉を厨房で頬張りながら、李刀達はよくこんな獨り言を云つては、誰も對手のないのに、けらくと笑ひ興じてゐることもあつた。

もし、その際、誤つてアマの芳春嬢でもが食堂からはいつて来て、何をひとりて笑つてるのだよ、この若い者は、とても訊ねようものなら李刀達は、言下に、

「いまに、孫中山先生の遺志が實現するだらうよ。廣東人としてこんな嬉しいことはないぢやないか？」

「俺はな、かう見えても、孫中山先生とは同郷人なんだぜ！」

と、役者のやうに拇指を動かして大聲になるのであつた。

芳春嬢は、廣西人で根が百姓上がりで寡婦なので、主婦のいふことさへ頭を下げ聴いてゐれば動まるものと思つてゐる婦であつたが、これも争はれないもので、時代は彼女をして、現に李刀達も委員の一人である「沙面中國人組合」といふ沙面だけの勞働組合に加入せしめてゐたのである。

「なんでもいふ、わたしは戦争さへなければそれで結構さ。どうせ、戦争で誰が勝たうが、わたし達には何のこともありませんのだよ。——」

かう云ふのも、いつもの彼女らしい口吻である。

しばらく世の中に、平和がつよく風だつた。地下室の、衛生といふ西洋思想を意識的に拒否した李刀達の部屋からは、小さなベッドに立つて見ると、額のすぐ上のところ、外國の軍艦の大砲がもの凄いい砲孔を見せてゐたし、厨房の一つの窓からは英國旗の下で、贅澤な服を着て金目の掛かりそうな武器を帯びた外國の軍人が、へんな腰付で自分達が闘はないために印度人の兵隊を訓練してゐた。李刀達の變態的な話術の犠牲者であるハムマーソン氏夫妻も、べつに悪食や不潔のために下痢を催した風もなく、また、堀一つ越した沙基から黄埔軍官學校へかけての、髯むくぢやらなロシア人達も、急に沙面へ押し掛けて来る模様も見えなかつた。ときをり、李刀達の組合仲間では、これも廣東の現在の流行の一つとして、いやに四角張つて議論をするものが出て来て、集會の席上で、支那の列國資本主義の侵略史などといふものを講義する人間が殖えて来たぐらゐが、どうやら沙面の生活の單調を破る出來事の一つであつた。

さういふ新しい敵意を論理的に組立てることを習つた連中の話に耳を傾けてゐることも、大して學問らしい學問をしない彼には、可なりの参考になつた。彼等は云ふ——李刀達の備はれてゐる英國副領事の官舎のある沙面といふ場所は、同じ廣東の市に屬してゐても、そこだけ、廣東市の主體から一幅の溝で分離されてあるのである。ここは警へて云へば、マストのない大きい軍艦のやうなもので、その軍艦に、西洋人の散歩場や避暑、防風林などの目的にやたらに樹木を植ゑ込み、密閉した櫓のやうなビルディングを建てて、永遠に廣東市の鼻先へ繋留したままにしてあるものと思へばまちがひがない。しか

し、もうすこし精密に支那の歴史を研究すれば、一八五九年の天津條約で、この廣東市の尖端の、珠江の沖積層である四十四エーカーの地面へ、英國とフランスとが、三十二萬弗の埋立工事を起して、その全面積東西八町南北二町半の五分四を英國が租界として占領し、五分の一はフランスが取つた——といふ事實が、沙面の至るところに悲惨な史蹟として残つてゐる。かうした沙面といふ土地は、支那の河の中に浮かんだ、一つの外國である。ここと支那とは、東と西と二つの鐵門を持つた鐵橋で遮斷され、夜十時過ぎからは、武装した西洋人や印度人の巡査がゐる絶對に支那人の通過をゆるさない。それから、この動かない軍艦である島の背後には、いつも英國やフランスやポルトガルや日本の動く軍艦が出はひりしてゐて、無数の廣東の水上生活者のジャンクを巨大な鼻面で掻きわけながら、支那人が指一本沙面に向つて振り上げて、それが一八五八年までは支那のものであつたと主張するのを待つて、廣東城内に大砲を打ち放つ準備をしてゐたのである。——謂はば、この沙面は、香港の小さな模倣みたいな場所である。西洋の出店であるこの小さな香港の模倣が、廣東の支那街といろいろな生活形態を別にしてゐることは争はれない。第一、ここにはすべて西洋風な建物だけが列んでゐる。それから、そのサイドウオークは、完全な大きい舗石で敷きつめられてゐる。次には、軍艦で守護された小さな居留地は、下水と水道の設備を有ち、綺麗な花園に贅澤なうす着をした西洋の女や子供達を遊ばせて置く。島の周圍に散らばつてゐる、小さな埠頭や荷物揚場は、夜になるとピストルを持つた西洋人が出て、支那人の篷船を一つ残らず追ひ拂ふ。最後に、ここに居住することを許される支那人は、わづかに西洋人の家庭や店

て使はれてゐるコックやアマボーイの二千人だけに限られてゐるのである。……
かういふ話にも、たしかに、堀一つ越した役所のロシア人の影響はあつたのである。
なかには、誰も何も云はないのに、突然立ちあがつて、學生の辻演説の眞似みたいに、『孫中山先生
は、聯俄容共を説かれた。然るに、我々は、何を躊躇して、今日もなほアングロ・サクソンの帝國主義
支配下に半植民地化された支那を、このままに放置するのであるか。——速かに、ストライキを！』
などと絶叫するものもあつた。

勿論、さういふ手合は、新加坡の平會員に多く、圓熟した排外思想の持主である李刀達のやうな、計
畫的な頭腦を持つた人間にはあまりなかつたのである。

彼は、委員の一人として、已むを得ず何か云はねばならないときには、

『まあまあ待つとれよ。今に機會が来る。諸君は、人間のもつとも肝要とする胃腑の番人ではないか、
昔から支那に起つた騒動で、胃腑から解決のつかぬのがいくつあつたと思ふか！』

といふやうな、ぼんやりしたことを述べるに過ぎなかつた。

李刀達が、副領事の家で、どんな料理をどういふ消極的な反抗思想で提供してゐるかを知らぬ者と
もは、ひそかにこの言葉をもつて一般的な社會主義思想を陳述したに過ぎないとして、嗤つてゐた。

8 廣東の春は、だんだんに南の方から濕つた蒸氣のやうな風を誘つて、税關のシグナルに三號や四號の
信號が掲げられることが多くなつた。——このまま、洗濯屋の洗ひ場みたやうな熱暑の來る前に、年中

行事の消毒や蟲退治を過ぎせば、また、例年のやうな夏が來て、沙面一帯がトルコ風呂のやうに息塞ら
しくなるものと思はれた或る日、二千人の支那人を驚かした重大事件が突發したのである。

李刀達も、この日は、怪しげな山猫の皮を剥ぎかけた手を留め、總領事館邸の芝生を超えて、沙基馬
路から、税關、大新公司の方の海岸通へかけて、驚きの眼を睜つたのであつた。

——それは、支那に於ける概ねの突發事のやうに、やはり、戦争であつた。

しかも、この日の戦争は、猛烈な市街戦であつて、あまりポスターの前觸れもなしに行はれた。逃げ
去つた軍隊の一部が、もとの城内を通過したらしく、軍官學校から幾臺となくやつて來る軍用自動車
は、太平路あたりで右に折れてしまふと、二分間も過ぎた頃の距離で鐵砲の打ち合ひがはじまつた。だ
が、これは、謂はば對岸の火事みたいなもので、さほど戦争に慣れきつた誰をも驚かせるほどがものは
なかつたが、全く意外だつたのは、沙面の警備軍が何を考へちがへたか、どしどし堀と河にむかつて鐵
條網を張りはじめたことであつた。

『おい、こりや、戦争になるぞ！』

『妙だな、沙面と廣東政府とが戦争でもするといふのかい？』

『ひよつとしたらするのかも知れないよ。英國の軍人奴、いやに俺達につんけんしてやがるぜ。』

三四人集まつたボーイ達は、こんな噂をした。

「ともかく、對策を一つ講じて置かないといかん。——今夜、委員會を開かうぢやないか？」

張定圭といふ組合の書記が、放心して眺めてゐた李刀達の肩を敲いた。

その晩の會合は、ひそかに、西關の汚い茶館の奥の中二階で催された。緊張した會であつた。俄に降り出した雨が、機關銃のやうに、茶館の建物を包圍した。

總領事のダナヒユウ氏の邸に、コツクの下働きをしてゐる伍頼信といふ青年は、正式なスパイといふわけではなかつたが、何くれとなく總領事の言動を監視する役目に廻はつてゐたところから、一座での重要な報告者となつた。

「諸君、僕は今日總領事がゾランダで、秘書官に「ブラウダ」を翻譯させて聴いてるのを見た。それで何かしきりに、ブハーリン、ジノウイフと云つては、例のとほり口を失らして怒つてるのを聴いたが。——あれでもつて察すると、政府へ來てゐるロシア人と一戦争するのぢやあるまいかとも思はれるな。何にせよ、委員諸君も見られるとほり、沙面はすつかり鐵條網で封鎖するつもりらしいから。それには、今日遁走した雲南軍の殘黨や商軍の一隊だけを警戒するのでないことは明かだ。諸君、この前の陳炯明軍の撃退のときでも、俺達は沙面に鐵條網が張廻されたことを知らんではないか！——これは、或るひは、俺達にとつては、想像以上に大きい戦争への出發ではないかとも思はれる。——大きい次の戦争とは何か？ 支那民族の弱小民族としての資本帝國主義國へ挑む、國民的階級闘争でなければ

ならない！」

伍頼信のこの短いスピーチは、二十五人の委員や書記の間に、迅速な態度決定の決議を促進せしむべき十分の力があつた。誰しも、最近ぞくぞくとして黄埔港やその邊の碼頭に、多數のロシア人が來たことを知つてゐるし、更らにより多數の小銃や武器が輸送されてゐることも知つてゐたのである。

「よし、我々の決議はストライキだ！」

誰かがかう叫ぶと、議長は、しづかにその聲を制して、各種の情報を分析し、その上に、沙面中國人組合の採るべき態度を決定するための三つの條項を掲げた。

「我々は徹底的に孫中山先生の廣東政府を支持すること、孫中山先生の三民主義による帝國主義の排除を斷行すること、その實行のために沙面中國人組合は最初の戰術的な時期に於てストライキを舉行すること。」

これは満場一致で可決された。そして情報委員として、十二人の委員が擧げられ、他の十二人は調査委員と密接な聯絡を取つて直ちに活動を開始する遊説委員となることとなつた。李刀達は、前者の一人に選ばれた。彼が英語が話せるといふことは或る意味で、このグループの間に重きをなした所以でもあつた。

彼等は一人一人、沙面の西橋を歸つた。或る者は、殊にその晩は貧民街の私娼窟へ泊つた。ここまで來て、私達は、すこし李刀達の排外思想の生長について知りたい。

彼がコックとして、殊の外昆蟲や爬虫類の調理法に興味を持つた半面には、その料理品を提供する當の西洋人に對する憎悪が潜んでゐたことは勿論の話である。その憎悪がどういふところから來てゐるかについて、私達は、ただ少年時代に彼れが置かれた環境を物語ればよいのである。

彼れの一家は、ごく貧しいデルタ地方の百姓であつたが、李刀達の知らない理由から、彼れの父親は廣東政府に反對の側の軍隊に志願して、どこでどういふ風に殺されたか、煙のやうにこの世の中から消え去つたのであつた。打續く戦争のために、母親と祖母とは、税金を搾り取られることに堪へきれず、たうとう廣東の珠江に一艘の沙艇を出すことにして、それでどうやら母子三人の水上生活を始めたのであつた。しかし、私達は、この廣東の平時にはのろろして濁り激んでゐる河も、秋口の狂暴風雨には、どんな船でも、一と堪りもなく呑んでしまふ氣狂ひじみた流れであることを知らねばならない。李一家の、浅い箱船のやうな渡船は、李刀達が十三歳の年に、木つ葉微塵に打碎かれて、祖母と母親とは溺死し、彼れだけが漸く通りすがりの蒸汽船に救はれたのであつた。救つてくれた蒸汽船は、香港通ひの船であつたが、彼れが蘇生すると間もなく、船の老コックは、裏の皮剥きや皿の掃除に使つたのである。かうして、自然と習ひ覺えた料理の方法を、彼れはしばしば船を變更することによつて、應用の範圍を弘めて行つた。香港、粵漢、汕頭、上海は云ふまでもなく、時には歐洲航路の地獄のやうな運送船にも備はれて、船から船へとごろついてゐるうちに、いつの間にかコックとしての腕前が出来上がつてゐたと同時に、きれきれに見た外國の事情や、毎日のやうに眼の前で反覆される西洋人の暴虐によつ

て、李刀達は、自分の心のうちに愛國思想といふもののあつたのを發見した。

仕事にあふれて、香港の支那街にころころしてゐた頃、彼は、毎日々々大勢の支那人が、香港の屋上庭園とも云はるべきピークへ、石や木材や鐵やセメントなどを、動物のやうな悲鳴をあげて運んで行くのを目撃した。山は登りがかなりの勾配になつてゐるので、苦力の一人一人は、一つの荷を運ぶにも一日がかりであつた。電車や自動車道があつても、それは支那人の勞働とは絶對に關係のないものだつた。見てゐると、びりびりと皮膚の焦げつく炎天の下に、無數の蟻のやうに、半裸體の苦力や婦の運搬人が、高價な西洋人の家を建てる材料を運ぶのである。さういふ苦力達を、請負の親方が、遠慮なく叱り飛ばしながら、眼が眩まうが、暑さで氣絶しようが、足の爪が剥げようが構はずに追ひこくつた。これらの家が出來上がり、涼しい蔭をつくる無數の樹木を植ゑた公園が設けられると、ピークからは一切の支那人が追ひ落とされて、一人もその邊に住むは愚か、立停まつて居ることさへ許されなかつた。多數の苦力は、谷底の支那街へ來て、狭い小便臭い街の兩側に、石を枕にして、素裸になつて夜は眠つた。しかし、何千となく大道へ寝てゐる勞働者の群を俯瞰して、女皇ヴィクトリアの像と、細長い軍艦の大砲が、しづかに更けて行く西洋人紳士淑女達の眠りを守護してゐるのである。

李刀達は、實際憤慨した。もう二度と再び故國の支那へは歸るまい。南洋の華僑にでもなつて、と思つてボルネオ附近まで逃げのびたのが二十歳のときであつたが、一旦萌した愛國心は、どこへ行つても、自分の兄弟達が白哲人種にいちめ抜かれてゐる事實から眼を蔽はせるものではなかつた。いろいろ

な同國人と話してゐるうちに、彼は、支那といふ國がどうして阿片といふ毒薬を買はなかつたがため、或ひはそれを買つたがために、西洋人から國土を奪ひ取られたか、支那人の貿易から上がる利益の大部分が、どうしてビストルの筒先を向けられることによつて彼等にせしめられねばならなかつたか、その西洋人が支那の内政にまで餘計な世話を焼き、治外法權といふものを定めたり、又、ときには支那の獨立を計らうとする軍隊に對して、金で買はれる軍閥といふ盜賊どもを狩り立てて戦争させたか、支那の政治家が西洋人の賄賂に眼がくれてどんな惡辣な賣國奴となつてゐたか……さういふ數々の聽いても冷汗の出るやうな事柄を知つたのであつた。

再び支那へかへつた彼は、眼を開いて見れば見るほど、支那人の貧乏なことがわかつた。白哲人種の棲むどんな國でも、香港や廣東の街で見受けるやうな貧乏人はゐなかつた。しかも香港や廣東にゐる西洋人は、頭だけ利巧な惡鬼のやうに、支那人の考へつかぬやうな突飛な方法で、貧乏な支那人から最後の一滴の血までも絞り取らうとして、新聞や電話や、水道や、自動車や、船や、軍艦や、軍人などを本國から運んで来て、勝手氣儘に振舞つてゐたのである。

李刀達の排外思想は、こんな具合に、すこぶる消極的で陰性な、自然發生的なものであつた。それはあらゆる反抗意識の原始態形のやうに、この意識を間斷なき刺戟をもつて激成させ合理化させるまでは、取り留めもない、漫然とした憎惡の感情的發作に過ぎなかつた。彼れの場合に於て、それを激成させたものはたしかに、沙面といふ場所の奉公から來た體驗であつた。

沙面——こゝに存在するものは、良く刈り込んだ芝生、低い紳士的な境界線を示す壁、恐ろしく遠い通信力を暗示する電柱の列、處々にある英語の掲示板、ここだけに繁茂した樹木、高い城のやうなビルディング、それらのすべてを通じて、支那の勞働者を壓迫するための大小の道具としか思はれなかつた物だけが揃つてゐた。悉く四角に、けばけばしく、幾何學的に、横の物はいつも横になり、まっすぐなものも永久にまっすぐな姿勢を維持してゐて、そこに出はりする人間と雖も、額が高く、鼻が大きく、額は四角で、肩は垂木のやうに均衡を取り、脚は何かのポストのやうに長かつた。——全然、ここには、赤煉瓦と汚水と騒音と惡食などの、幾千年となく支那人が慣れて來た、貧乏の雰圍氣に共通した何物も見出し得なかつたのである。手鼻や小便で濡れた横丁や穢物の氾濫や病人や銅貨の響きがここになかつたとすれば、その代りに、資産と月給と階級とに依つて築き上げられた、白哲人種の複雑な立體的組織があつたのである。それらの上部建築の土臺石のやうに、歪みひしげた顔をして、手足の大きい、汚い皮膚の支那人が無數に立働いてゐたのである。

李刀達の直接に日夕目撃した沙面は、かういふ侵略された支那の縮圖みたやうなものであつた。——この沙面へ、今、何の相談もなく英佛の官憲は鐵條網を張りめぐらし、彼れの屬する組合はそれらに對してストライキを聲明しようとし、そして、彼れ自身が調査委員の一人として活躍することになつたのである。彼れは不思議な昂奮に驅られながら、夜遅くまで山猫のステチュウの鍋の前で、安煙草をくゆらせながら、今後の策戦について考へた。

「……もつと大きく奴等を騙かしてやるんだ！」

情報委員の一人が、政府の農工部へ出頭して聴いて来た事柄は、沙面の支那人を、その日からでも罷工させるに足るほどの屈辱的な惨案であつた。それは、弘く五卅事件として知られる、支那人學生の英國巡査によつての射殺事件であつた。その抑々の出發點は、上海に於ける一日本人紡績會社からであつた。二十四人の委員と書記とは、極度に憤激した。彼等は、それがほかの沙面のボーイ達やアマの群れの耳にはいつた場合を考へて、互に蒼白くなつた顔を無言で眺め合つた。

「しかし、諸君、情報をもたらしした伍頼信は聲をひそめた。僕は、もつと秘密な命令を廖仲愷氏から受けてゐる。——それは、黨では、この惨案の記念日を、全国的に二十三日に舉行するから、沙面のストライキをやるなら、その前日か、前々日あたりがよからうといふ、彼れの言だ。二十三日と云へば、まだ十日ほど間があるのだが、その間、我々委員だけは極力罷工の準備をしてゐても、ほかの會員達には罷工直前にしか知らせない方が良くと思ふがどうだらう。」

この提議は一同によつて妥當な方法だと思はれた。もし農工部長の廖仲愷のやうな有力な人が、沙面のストライキを後援するなら、そこに關ひはもう半分以上の勝味を示してゐるも同然である。

それから、一同の間に、再びピラや聲明書の起草委員が選ばれ、密々のうちに戦闘準備をして置く手

筈が定まつた。

その翌日、こつそり李刀達のところへ訪れて来た張定奎は、上衣のポケットから、一片の便所の落し紙へ書いた傳單を取り出して見せた。

「これは、上海から来た同志が持ちこんだ傳單のうちの一枚だ。」

その汚い紙片には、赤インキで、

「血心救國。」

と書いてあつて、文字の上には血の浸んだやうな、インキのぼやけた心臓の畫が描いてあつた。

「これはいいな。——傳單なんてものは、あんまり綺麗なもの効果かうすいよ。」

李刀達には、そのうす汚い紙の質から、縦六寸、横四寸ぐらゐの大きさから、何かの動物の血でもあ

るやうに紙質に浸んだインキの色が殊に氣に入つたのであつた。

「氣に入つたかね? ——上海では、資金に困るかして、こんなのを盛んにやつてるやうだ。僕等もかう

いふ奴を拵へようか? 廣東中に便所の紙を散らすのもよからうぜ。どうせ、廣東の紙は便所の紙ぐら

ゐのところなんだから。」

書記は笑つてかう云つた。

「よし、俺が引受けてやる。俺はピラの方の係りぢやないが、こんなのなら暇にまかせて幾らでも作つて見せる。」

約束をした李刀達は、その晩から、早速塵紙と赤インキを買ひ込んで、同じやうなピラの製作にとりかかった。驚くべき根氣で三晩のうちに三千枚からの「血心救國」を書き上げた。

この忙しい三晩を通じて、李刀達の心は、ぼそぼそした紙質に吸収されて、見る見る紙面に散らばつて行く赤インキの色に魅せられたやうに、いろいろ奇怪な幻想に曳かれて行くのであつた。

彼れは、人から聞いたロシアの十月革命のことを考へた。次には、大概の生物の血管を流れてゐる血といふものを考へた。その血液を盛る器であるところの、彼れが筆の尖端で塗りこくつてゐる心臓といふ機關を想像した。そして、それから、それへと廣東の革命のことにまで思ひ耽つてゐて、いつの間にか——どこから廻つたのか、自分の部屋のドアの中に、主人のハムマーston氏が立つて見てゐるのにも氣がつかなくなつたのであつた。

「おい、お前、何をしてゐるか？」

李刀達は、聲に驚いて、自分の口に手をあてて立ちあがつた。

主人はつかつかと歩み寄つて、卓子の上の塵紙の一枚を手に取り握り取つて、喫煙用のジヤケツを着て、そのポケットにも重さうなピストルらしいものゝたるみを見せてゐた。

「ふむ——トム、貴様、ボルシエウイキだな？ このピラは何のために使ふんだ？」

ハムマーston氏は、銀行家が證券をでも取扱ふやうに、大切に塵紙を掌の上へ載せて、それに片方の手をひろげて、がわりと打重ねた。

「——これですか？ これは、沙面から、貴方がた外國人を追放するデモンストレーションに撒くピラですよ。」

李刀達は、最初のシヨツクから立ち直ると、にやにやしながら考へた。

「なに——？ 俺は、ほんとに聞いたかしら？」ハムマーston氏は、片手を引くと、別な掌の上に残つてゐた紙片を、拳を堅めてくしやくしやに握つてほいと床の上へ投げ出した。「もう一度云つて見い。はつきりと云つて見ろ！」

李刀達は、主人の豚の亂毛のやうな毛の生えた手が、重くたるんだ方のポケットに突込まれるのを見て取つた。

「御主人、御急ぎ無用です。——」李刀達は、得意の笑みを満面に湛へて見せた。「私は、わざと貴方が御出になるかも知れぬと思つて、ドアに錠をおろさないでゐたのです。ドアに錠をおろさずに、秘密な宣傳ピラを拵へるものは馬鹿です。トムは馬鹿ではないのです。——このピラを拵へる任務を帯びるほど、私は國民黨の信用が厚いのです。おわかりになりませんか？」

ハムマーston氏は、金のはりがねを植あつたやうな眉毛の下に、底知れぬほど碧い瞳をくるくると廻はした。心では嘲けりながらも、かう二人で立ち向つて見ると、西洋人といふものの體格に威壓されぬわけには行かなかつたのである。李刀達は、勇氣を鼓して、一歩進み出た。

「貴方、貴方がたの生命財産領土に關係のある、重大な或る決議が其所で成されたことを御聴きになり

支 那

「たくありませんか、あります——？」

「トム、お前は俺の家に何ヶ月奉公してゐたつげな。」

「ハムマーソン氏の問ひはもつと抽象的であつた。」

「アイヤ！ トムは、ハムマーソン閣下にまる七ヶ月働はれてゐます。常にハムマーソン氏と御主人に忠實なトムでした。」

「七ヶ月、よし、善良な下僕だ、いや、なくてならぬ料理人だ。——では、新しい雇傭関係を造りたいと云ふのか？ 値段を云つて見い。」

「ハムマーソン氏は、重そうにたるんだポケットから、李刀達がピストルだと誤認したパイプと煙草入れを取り出して、室の中のただ一脚の椅子へ大股に跨つた。」

「秘密——高いですよ。しかし、安い。その代り、これはトムしか知らない。トムしか裏切らない。トム、ロシア人大嫌ひ、ボルシエウイキ世界の賊です。」

「料理人トム・リー、お前中々巧者だな。そんなことで、この俺が欺けると思つてゐるのか？——それで、ピラをそんなに書いて撒くばかりにしてゐる御前が「赤い手」をして捕まつたのを云ひ通れるつもりか？ 馬鹿奴！」

「御主人、トム馬鹿ではありません！ その證據——この沙面にストライキ起こります。國民黨幹部支持します。貴方がた眠つてゐる。その朝、もう支那ボーイ、支那人アマ、コック皆ゐない。——それか

20

21

ら、もつとある、もつと重大なことがある……」

「パイプにマツチを繋ぎしてゐたハムマーソン氏は、マツチをうるさそうに振り捨てると、何も云はずに、李刀達の上衣の裾を曳いて、ぐつと手元に小柄な支那人を引寄せ、娘の子が玩具のキユウビイを捻るよりも易々と片手を伸べて、彼れの頸を力強く締めつけた。」

「ほんとのことを云へ！ おとなしく云ふんだ！ 云はぬと死んだ支那人が一人出来るぞ！」

「李刀達は、忙しくけつて咳を二つ三つして、手巾のやうに揉みくちやになつた顔から、やつとこれだけを云つた。」

「——一萬弗……一萬弗！」

「剛情な料理人だな。……よし、そんなに金が欲しいのなら、満更嘘でもあるまい。話によつては、小切手はいつでも書いてやる。さア云つて見ろ！」

「かう云ひ捨て、彼は、どしんと李刀達を卓子へ突きかへすと、土を弄つたあとのやうに掌を拂つて、パイプを取りなほした。」

支 那

「ハムマーソン閣下、この李は、一切の事情を御報告します。先づ、この沙面のストライキのあることは知つてゐて下さい。次には、國民黨指導の下に上海慘殺事件の大デモンストレーションが行はれます。——御存知ですか？ 御存知でないでせう。よろしい、一切の報知を、一萬弗でお賣りします。そして、私は、やはりストライキに加はりながら、貴方がたに一部始終の仲間の動きを御報告いた

しませう。——ロシア人が現在何人この廣東に来てゐるか御存知ないでせう？ 武器の數？ どういふ陰謀をもつてこの香港と廣東から英國人である貴方がたを追ひ退けようとしてゐるかも？——李刀達は七ヶ月御奉公してゐたのです。

李刀達の顔は、眞にも悲しげであつた。

しばらくハムマーソン氏のパイプを吸ふ音がじわじわと聞えた。李刀達は床を蹴つて、ドアの方へ歩み寄つた。

「——それでなければ、明日から私がストライキを起こして見せるだけです。」

ハムマーソン氏は、ちつと眼だけを動かしたが、やはり無言をつゞけた。

「御主人、國民黨要人の色彩を御存知ですか？ 左傾派と右翼との？——共產派の？」

この最後の言葉は、西洋人の耳元で囁かれた。それは、二人の男の間の會話としては餘りに媚の籠つた、むしろ情人同志の睦言のやうな二人稱を帯びた言葉であつた。ハムマーソン氏は、心からこの憎むべきスパイに嫌悪を感じたらしく、酸っぱい物を口いつばいに頬張つたときのやうな表情をして立ちあがつた。

「生命が危ないぞ、それでもいいか？」

「生命より金。」

「よし、人名簿だ、それから日取りと、場所と。報酬は、全部揃つたら——」

李刀達は、瀬戸物の布袋さまのやうな微笑をいつまでも泛べてゐた。まるで、荒々しい英國人の言葉にすつかり聽惚れてどもゐるかのやうに。

「御主人、お休み下さい！」

その日、青天のまん中から、すこし南へ寄つて、太陽がまつ白に輝いてゐた。

その太陽の下に、一晩でポスターや、傳單で埋まつてしまつた廣東の市街が、まるで新しく開かれた不思議な都會でもあるかのやうに、物音一つ立てずに横はつてゐた。

塀、壁、柱、ウインドウ、電柱、樹木、扉のすべてに、殆どあまた空隙のないほどに貼られた大小の紙の上には、いろ／＼な象形文字が繪畫的な力を見せて、靜かに躍つてゐた。

人間は、これらの文字の羅列の下に、何かの祟りを惧れるやうに、小さくなつて眼ばかり動かしながら歩いた。彼等の足下にも、撒き散らされた傳單が、變色した木の葉のやうに落ちてゐた。

李刀達は、懷をふくらましながら、熱着て履物に溶けた道路が粘りつきそうな大通から、急いで海岸通りへ出ると、ヘルメツトの縁越しに税關の時計を瞻あげた。時はまだあつた、彼れは、はげしい河の表面の照り返しに、眼を細めながら沙面の方へ急いだ。

李刀達の左の腕には、黒いバンドがあつた。彼れと擦れちがふ通行人の大部分も、同じやうな腕章を

帯びてゐた。
「援助上海惨殺案！」

ポスターの文字は、いたるところから讀まれた。廣東全市を擧げて、上海の五卅事件に哀悼の意を表する六月二十三日が、今日なのである。

「よう、君は、警備隊の方ぢやなかつたのか？」

突然横合から、書記の張定奎が、黒い眼鏡を掛けた顔を見せた。

「俺か、俺は——今、胡漢民先生の許可を得て、沙面の状況を探りに行くところだよ。悪くしたら、今日は——衝突免れ難いかも知れないぜ。あの沙面の八臺の機關銃がたゞは遊行隊を通すまい。」

李刀達は、なるべく相手の顔を見ぬやうにして答へた。一群の女學生が、テニスのトーナメントにて

も行くやうな姿をして横丁へ揃つて這入つて行つた。軍艦を密集してやるだぜ。その邊の偵察をよろしく頼むぜ。でも、大丈夫かね——沙面の方は？

「まぢがつて一發やらられてもしたら、それこそ大變だよ。」

「そのときは、君、それこそ花々しい最初の救國者となるわけぢやないか！ 大丈夫とも、俺の働いてゐた副領事には、俺は國民黨から追放された風に云つてあるんだから。どうせ出鱈目を云つて、見るだけ見たら、さつさと東較場へ引上げるよ。」

二人は別れた。



李刀達は、わく／＼躍りあがる心を押へて、急に自分が、この晴れた日の午後に襲來するであらう大きいドラマの筋書の作者になつたやうな氣持を考へて見た。

事がこゝまで運んで來ては、もうどうにも退くわけには行かなかつた。彼は、これから、國民黨と英佛軍人との間に自分が生きた材料を使つて、世の中の新しい組み立てに進むやうな最初のきつかけをつける役目に當たらねばならなかつたのである。——胡漢民一派の穩健派は、暴力的な正面衝突を極力避けようとする意志を持つてゐた。また、英佛側でも、昨日英國總領事が伍朝樞氏へ手紙をよこしたやうになるべくは積極的行動を避けたいやうな口吻がある。その武装状態と云つても、まだ機關銃に彈丸が填充してゐないこともわかつてたし、領事館への海軍側からの報告にも空砲を放つといふだけのこと

送つた。

副領事は、葉巻の端を苦そうに噛みながら、もう一人の役人に話しかけた。

「バンク・インダストリエのコンプラドールが、襲撃があると云つて寄越したといふのは本當かね？」

「勿論です。それは、閣下、この三月の「ブラウダ」でジイノヴィフが煽動してから以來天下周知の事なのですよ。」

その紳士はフランス語訛りの強い言葉で答へた。

副領事は、わざと聞えよがしに云つたといふやうに聲を張り上げた。

「それから、あのポローデンが賄賂をやると約束したといふレット系のロシア人はどうなつたかね、ジエームス？」

「さあ、あれは、住所不定の浮浪人としてな、とうに上海あたりへ影を潜めたらしいですよ。」

かうした政治的な無駄話らしく思はれる會話の間に、遙かに沙基馬路の方に當つて、大勢の人間がわーつと歡呼の聲を擧げるのが響いた。

室内の四人は、一齊に首をあげて窓から向うの方へ眼を遣つた。

濃密な緑素の、はげしく日光を吸つた樹木の間、白い沙基街の一端が見えて、そこには今過ぎたばかりの自動車のガソリンらしい煙がほんのり漂つてゐる中に、赤いピラが、何かの花舞でもあるかのやうにひらひらと舞ひ狂うてゐるのが、はつきりと見えた。

仔犬のやうにはしつこい子供達が、ピラを追ひ驅けて、街の鋪道に鮮かな陰影を躍らした。

「これですよ、このピラです。今朝から、士官候補生の連中が、市中を自動車で撒いて歩いてゐるのです。」

李刀達は、一枚の赤いピラを選び出して、副領事の前へ置いた。それには、かなり辛辣な辭句で英國の帝國主義打倒の意味が記されてあつた。

しかし、ガラスの海のやうな光波の中に、都會そのものが全體で破壊を伴はない地震にでも襲はれてゐるときのやうに揺れて見える、海岸から白雲山の向うまでを、ぼんやりその碧い底知れぬ瞳に取り入れてゐたハムマーストン氏には、そのピラを取り上げて見る氣が起らぬかして、卓上の上に置かれたままになつてゐると、自轉作用ではげしく吹き立てた扇風機がくるくとそれを宙に凌つて行つて、むかしの書類のケースへ擲きつけようとしたが、途中で氣を變へたやうに空間に投つたらかしてしまつた。

それが、李刀達には、いかにも、英國總領事館内の副領事閣下の室内に、わざと誰かが、打倒帝國主義の宣傳ピラを一枚だけ撒いて行つたやうに思はれたのであつた。

ハムマーストン氏は、右手の拊指と中指とをかち合はして、竹で造つた樂器のやうな物音を出した。

であつた。——しかし一躍してコックからスパイになつた李刀達には、そんな外交文書の上の戦争は嫌らなかつた。

「おい、何處へ行く？」

鐵門の印度巡查は銃を擬して、近よつて李刀達を誰何した。

「ハムマーston閣下のトム・リーです。ちよつと閣下へ傳へて下さい。急用なんだ。」

疑り深そうに鐵柵のむかうから彼れを睨め廻してゐた英國の陸戦隊が、

「何の用だね、御前達はもうこの町には用はない筈ぢやないか！」

と詰問した。

「それが、私だけは特別なんですよ。何なら、副領事さんの私に下すつたパスがありますからお目にか

けませう。」

李刀達は、にやにやしながら、柵の前に總領事館のレッター・ヘッドに書かれた通行許可證を振り翳

して見せた。

「この男よろしい、這入れ！」

印度人の方はわかりが早かつた。

婦人や子供を全部珠江の軍艦に避難させてしまつた沙面のセントラル・アゼニューは、まるで雜貨の

なくなつた勸工場のやうだつた。たゞ、その間をいろいろな道具を擔いだり。砂嚢を積んだり、箱を重

ねたりしながら、陸戦隊の兵士だけが動いてゐた。不思議とこゝ々だけには、一枚のピラもポスターも貼つてない。領事館の建物には緊張した面持ちの役人達が、緊張した風を見せまいとして、やたらに煙草をふかしながら歩き廻つてゐた。副領事の部屋では、煽風機の前で、三人の紳士達が、窓の方を覗いては、低聲で話し合つてゐた。李刀達がノックして這入つて行くと、まつ先にハムマーston氏が緒ら顔を向けて、掴みかゝるやうに歩いて來た。

「どうした？——式は始まつたか？」

李刀達は、先づ懷中から蒐集したポスターやピラの束を取り出して、靜かに卓子の上に載せた。

「——まだです。十二時に譚平山が司會者として開會することになつてゐます。しかし、もう大部分人間は集まつて居ります。御用心なさい、軍官學校の生徒は極力民衆を煽動して居ります。それに、軍隊は全部實弾を籠めて、その或る者はつけ劍て行列することになります。先頭は騎馬の士官と警官隊、それから各労働團體、農民組合、學生。この學生の一部は夜前決死隊を選抜しまして、英國が武力で我がのデモストレーションを壓服する心算なら潔よくその犠牲にならうと、廣東大學生がくじ引で當選してゐます。何をやり出すか判りませんよ。それから赤旗も出ます。あのロシアの赤旗です。ロシアの武官が、客軍や軍官學校の生徒達を引率することにしています。——そして、行列の筋路は大體この通りです。ここへ到着するのは遅くも二時半頃までにはなるでせう。」

云ひ終つた李刀達は、鉛筆で描いた街路面のスケッチを出して、自分の新調のヘルメットで顔へ風を

送つた。

副領事は、葉巻の端を苦そうに噛みながら、もう一人の役人に話しかけた。

「バンク・インダストリエのコンプラドールが、襲撃があると云つて寄越したといふのは本當かね？」
「勿論です。それは、閣下、この三月の「ブラウダ」でジイノヴィフが煽動してから以來天下周知の事なのですよ。」

その紳士はフランス語訛りの強い言葉で答へた。

副領事は、わざと聞えよがしに云つたといふやうに聲を張り上げた。

「それから、あのポローチンが賄賂をやると約束したといふレット系のロシア人はどうなつたかね、ジエームス？」

「さあ、あれは、住所不定の浮浪人としてな、とうに上海あたりへ影を潜めたらしいですよ。」

かうした政治的な無駄話らしく思はれる會話の間に、遙かに沙基馬路の方に當つて、大勢の人間がわーつと歡呼の聲を擧げるのが響いた。

室内の四人は、一齊に首をあげて窓から向うの方へ眼を遣つた。

濃密な緑色の、はげしく日光を吸つた樹木の間に、白い沙基街の一端が見えて、そこには今過ぎたばかりの自動車のガソリンらしい煙がほんのり漂つてゐる中に、赤いピラが、何かの花舞でもあるかのやうにひらひらと舞ひ狂うてゐるのが、はつきりと見えた。

仔犬のやうにはしつこい子供達が、ピラを追ひ驅けて、街の舗道に鮮かな陰影を躍らした。

「これですよ、このピラです。今朝から、士官候補生の連中が、市中を自動車で撒いて歩いてゐるのです。」

李刀達は、一枚の赤いピラを選び出して、副領事の前へ置いた。それには、かなり辛辣な辭句で英國の帝國主義打倒の意味が記されてあつた。

しかし、ガラスの海のやうな光波の中に、都會そのものが全體で破壊を伴はない地震にでも襲はれてゐるときのやうに揺れて見える、海岸から白雲山の向うまでを、ぼんやりその碧い底知れぬ腫に取り入れてゐたハムマーston氏には、そのピラを取り上げて見る氣が起らぬかして、卓上の上に置かれたままになつてゐると、自轉作用ではげしく吹き立てた煽風機がくるくとそれを宙に凌つて行つて、むかうの書類のケースへ懸きつけようとしながら、途中で氣を變へたやうに空間に投つたらかしてしまつた。それが、李刀達には、いかにも、英國總領事館内の副領事閣下の室内に、わざと誰かが、打倒帝國主義の宣傳ピラを一枚だけ撒いて行つたやうに思はれたのであつた。

窓の下では、英國士官が、喉に絡んだやうな聲でしきりに兵隊へ號令を掛けてゐた。

ハムマーston氏は、右手の拇指と中指とをかち合はして、竹で造つた樂器のやうな物音を出した。

これは、西洋人が、骰子を起こしたり、競馬馬を聲援したり、手飼の犬を呼んだりするときの不思議な習慣である。

「テケツ、テケツ、テケツ——」
どこにも、犬の姿は見えない。

しかし、すぐと李刀達は眼で理解した。副領事は、柔かい豚の亂毛のやうな毛の生えた右手で樂器のやうな音を出しながら、たくみにその人差し指を翻へして、床の上の赤い傳單を差し示してゐたのである。つまり、「それを拾へ！」と言葉で云ふかはりに、この英國の紳士は、犬を呼ぶ合圖を、支那人の上に応用してゐたのだ。

「あいや、傳單、これあとの證據。」

それを拾つた李刀達は、全然無表情な顔で、ハムマーston氏の秘書官らしい、自分の集めて來たボスターやピラ類を選びわけてゐる、雀斑のある男の手元へ置いた。その傳單は、李の手の下で、今しもこちらの方へ廻轉した煽風機のためにべらべらと身もだえした。この間に、卓上電話へかかつてゐたハムマーston氏は、こちら向きに掛けて、眼ばかりぎよろつかせながら、低聲な會話を誰かと交換はしてゐた。

李刀達には、その呼び掛けが「ジム」といふ名なので、沙面で一番有名なゼームス總領事閣下であることに気がついてゐた。

開け放たれた窓のむかうに、花火の音が聞えた。花火や爆竹の音は、それに押れてゐる支那人でない、容易にはかの爆發物の音から聞き分けることの出来ないものだ。

「なんだ、あれは？」

ハムマーston氏の書記らしい男が、ぎよつと眼を聳やかして李刀達の額を睨んだ。

「花火、子供達です。——子供の排外運動、廣東みな怒つてる！」

李刀達は、河南の埋立地によくむらがり立つ恐ろしい蚊柱のやうな廣東市内の空氣を暗示して見せよちとして、双手で下から煽り上げる恰好を表現した。

「ゴツダアード君、副領事が、李の背後から秘書官を呼んだ。そして、あとは何も云はないのに、機敏な秘書官は、李にむかつて、唇に指をあてがふことによつて「聲が高い、黙つてろ！」と命じ、自分な、汗にからんだやうなズボンを蹴りながら、沙面に向つた窓の一枚を閉めた。李刀達は、ちよつと不氣味になつた。かういふ具合に、西洋人同志では、微細な顔面筋肉の動作によつて、無言の通信が自由に交換され得るのである。ときに、合圖次第によつては、どんな利那的な陰謀が實現されたいとも限らない。ピストルの引金を曳く指の動きなどは、左の脛をちよつと塞いで見せれば、すぐと應じる反射作用にしか過ぎないのだ。彼は、ゴツダアード君から、副領事の方へ開きなほつた。その副領事は、ここにこしながら、受話器をレシーヴァへ架けると、

「よろしい、ミスター・リー、次室へ来てくれまいか？」

と云つて立ちあがつた。

キヤピネットに狭められたスクリーン・ドアを押すと、柘榴の果のやうに紅い髪をした女事務員が、タイプライターを激いてゐた。女の横手には空らなレモネードのコップがあり、さらに、そのコップとタイプネットとを守護するやうな陸戦隊の兵士が、抜劍のまま、ドアのわきに立つてゐた。李は、忘れないやうに持つて来たヘルメットが、一瞬間、指先から滑り落ちそうになつたのを感じた。

その次の室にも、番兵が不動の姿勢を維持してゐた。仄かな麝香の匂ひをあとへ曳きながら、李のためにドアを支へてやつてくれたハムマーストン氏は、厨房の奴隷から急に己が政治的重要な自覚したらしい李刀達を、さげすむやうな、撥ぐるやうな微笑をもつて顧みた。

低聲で何かを番兵へ命ずると、兵卒は擧手の敬禮をした上で、窓越しにきらきらした劍の尖端の進行を見せながら、廊下をどこかへ出て行つた。

「さて、取引である、リー。」

白布を張つた椅子へ掛けた副領事は、今度はすつかり「ミスター」を削り落として、判事のやうに彼を上から覗き込んだ。

李刀達は、瞬きしながら、鎖のやうに組まれた白哲人種の十本の指を、卓の上に眺めてゐた。

「——これから、總領事閣下がお見えになる。秘書も居る。取引は、事實の具體的陳述を意味する。し

力に俟つて、君の通牒事項の全部を、あと千五百弗にまけて貰ひたいものだ。それで、私は、私の個人的査定によれば、むしろ高過ぎると思つてるほどである。——よく理解してくれ、今日の報告に對しては五百弗、あと日限を切つて、十日以内に香港の銀行で受取れる千五百弗。これには一つの條件がある。即ち或る特定の事實を探つて貰ひたい——と云ふのが、その千五百弗の値段である。わかつたかね、それが、私の拂ひ得る値段の全部だ。」

そこへ、兵卒の一人が、レモネードのコップを持つて来た。その兵卒は、退場するとき、實弾の單めであるピストルを見せてゐた。李刀達は、本能的に、この太陽を水に溶かしたやうな飲料を警戒した。彼は支那人である。熱暑には、熱いタオルと、たぎつた茶に限るものだ。それに、コックとしての多年の経験は、容易に自分以外の人間の混和した飲料などに信を置かせるものではなかつた。

ハムマーストン氏は、笑ひながら、鎖のやうな十本の指をほといて、ちよつと肩をゆすぶつた。李は、そつと自分の背後を顧みた。

「まあ、飲め。これはウイシー・ウオーターから作つたのだ。」

支 那
かう云つて、副領事は、ストローの一端を啣へると、ずんずんコップの内容を、ゲージ・グラスかなんそのやうに減らして行つた。西洋人といふものは、とかくこんな機械的なことを欣ぶものである。割

害術的見地から批評すれば、ストローで吸ふ飲料は、皮下注射と選ぶところはないのだ。それは、嗅覺

と味覺とを侮蔑的に省略した、單なる嚙下作用にしか過ぎない。さいぜんから李刀達の憤懣してゐたのは、一グラスのレモネードについてどあつたが、その餘勢が、「取引」の上にもはみ出たことは、ハムマーストン氏も認めざるを得なかつた。さしもの李も、些か顔の色を變へてゐた。

「まあ、飲め。暑い時には冷めたい飲み物さ。」

「暑い時、熱い飲み物、これ支那です。」

「さうだつて、二重否定が支那だつたね。それで、まだ、取引に關する君の承諾は得てゐないやうだが

——？」

「その方は、單なる否定です！」

「興味がある。その理由は？」

「ちつとも、興味ない！——一萬弗か、ナツセング！」

李刀達は、顫へてゐた。その顫へは、彼をして、ウィツカー椅子から起立せしめた。副領事は、空らかなコップをとんと別な場所へ置き換へた。單にそれだけの動作であるが、もう一度、李は背後を顧みないわけには行かなかつた。再び向きなほつたときには、西洋人の大きい掌は、コップの縁底で濡れた圓いしみを、丹念に消してゐた。

「私のボーイよ、お前は何も知らぬよ。二人の紳士が相對すれば、紳士道が生じる。紳士らしく話そう

か？ しかも、それが、八磅、七磅に値切り得る可能性のある商品である場合に。トム・リー、すべては常識だよ。悲しいかな、君達支那人には、ロシア人の教へた常識しか持合はしてゐないのだが——」

李刀達は、誰かを坂の中腹で追ひ駆けてゐるときのやうに、英語を考へながら、喘ぎ喘ぎ相手の早口にむかつて、言葉を疾めた。

「常識よろしい、この場合常識ない。非常識だけ。見なさい、東較場のデモンストレーションもう始まる。沙面武裝——戰闘準備ある。廣東市こんなになつてゐる。空氣熱い、人間の憎み高かまつてゐる。

黃埔軍官學校の士官候補生武裝してゐる。そのほか、國民軍武裝してゐる。鮑羅廷、軍事顧問出席する。プロバガンダ、プロバガンダ！ 英國、支那と戰爭しますか？ 數千、數萬の人命を考へなさい！ 生

命惜しくない、數千、數萬の？——私のピツジャン英語、この悲しみ云ふこと出来ない。その値段で

す？ 一萬弗、それ以下、それ以上、要求しない。」

辛抱強く聽いてゐたハムマーストン氏は、この間の晩、李の部屋で示したやうな超越的な眼を据ゑて、

しばらくじつとしてゐた。

「では、ぎりぎりのところ、三千弗。」

副領事は、巨きい掌を、佛陀のやうに開いて見せた。

「ノオ。一萬弗。現金で！」

白い掌は、もう一度空らかなコップを掴んだ。

「頭固だね、三千五百弗、現金で。」

「オオ。一萬弗、現金で！」

「ますます頭張る、何をそんなに賣るつもりなんだらう？——では、大まけにまけて、四千弗はすまう！」

「オオ、副領事閣下。一萬弗、現金で！」

「面白いはど頑強だ。トム・リー、私はちよつと、君の背後に存在する一人のウエルシュ兵に君の視線を誘ひたいものだ。——見るとほり、この壯丁は武装してゐる。彼の武器と同じやうに、彼の魂も英國を愛する忠節心で、觸れたら切れるほど磨きすまされてゐる。このロイド・ジョージ氏と郷里を同じうする兵卒は、約四つほどの連結した動作を営むことによつて、君の背後から發砲することが出来るのだ。そして、外では花火の音がはげしい。——それでも、親愛なる李君は、その無根據なる一萬弗説を主張するつもりか、李君の意見はどうですか？」

「李刀達死ぬ、一萬弗取らない、——よろしいか、副領事ハムマーストン氏。李はここで、平手で水を切るやうに、空間を横に拂つた。そして、その手は、彼の前に置かれた、場所錯誤的なレモネードのストローを拂ひ、ストローは地震になぎ作されたアンテナのやうに曲がると、手から傳はる擲撃力を折半しながら小タンクのやうなレモネードのコップを卓上にころがした。然らば、即ち、數千數萬の死人が生じることになるのです。李刀達は、今日の戦争を防ぐ役目、單なるスパイではない。何と云ふか、

軌條のルブリケータング・オイル、調停者です。調停料一萬弗安い！」
かう云ひ終つて、彼は、彼れを一發の狙撃で殺すであらうところのウエルシュ兵が、床の上にこなみぢんになつたコップのかけらを拾つてゐるのを尻眼に掛けて、支那服を着つけた習慣から、兩手を前に組んだ。

「いや、その一萬弗は、私が個人の名義で支拂はう！」

かう云つて、のしのし背後から白靴で蹠歩して来たのは、總領事のゼームス・ダナヒユウ氏であつた。背後の部屋は、たしか、柘榴のやうな髪のみた場所である。李刀達は、はつとなつて、その方を振り向いた。彼の云つた言葉は、たしかに、タイピストの速記術によつて、すつかり書取られたらしい。それと同時に、彼は自分の鼻先へ、黄色な小切手の突きつけられてゐるのを覺つた。

「具體的に——いつも具體的に、李君、お掛け、まだ一時間はたつぷり在る。さて、どういふ風に、誰と、この調停を行ふか、それがはつきりすれば、このチエツクは、君の物だよ。」

ダナヒユウ氏は、複雑な打疊み機械のやうに、體軀を多角形に折曲げて、卓の正面へ掛けた。いつも湯からあがつたばかりのやうな顔をしてゐる男であつた。

思はず、李刀達は、低頭したことである……。

どうせ、半分かたは、李刀達獨得の推理法による出鱈目であつたのだが、それが、不思議と、領事館へ這入つてゐる情報と合致してゐたなども、時節柄の流言蜚説が、どんなに英國人の神経を不統一に惑亂してゐたかがわかる。ただ、李刀達の場合では、それを、彼一流の熱辯で、味母で甘く食はせる悪食のやうに包んだだけである。

そこで、番兵を遠ざけ、タイピスト列席の上で、書き上げられた文書の中には、主として、左のやうな細かい情報、沙面英國總領事館の重要な記録に載ることになつた。

一、一九二五年六月二十日、沙面佛租界東橋を通過シテ、廣州市ニ入ラントセシ二名ノ日本人ガ、何者カニヨツテ狙撃サレ、其一名ハ即死、他ハ重傷ヲ負フ。不幸ニシテ、支那官憲ノ云フトコロノ金品強奪ヲ證據立ツベキホド、該日本人等ハ大金ヲ所持セリ。

二、六月二十一日、沙面中國人援助上海慘殺案罷工委員會組織サレ、沙面在住ノ二千人ノ中國人ハ悉クすとりいきニ着キ、左ノ如キ宣言ヲ出セリ。

「各國ノ帝國主義者ハ嘗ニ我中國人ノ血ヲ啜リ肉ヲ喰ヒ、我等ノ膏汗ヲ搾ルノミナラズ、我等ノ生命ヲモ奪ヒ去ラムトス、即チ初メハ全力ヲ以テ壓迫ヲ加ヘ、遂ニ砲艦政策ヲ實現ス。……ココニ我沙面工友ハ奮起シテ上海、漢口、青島ノ工人軍ガ完全ニ勝利ヲ得ル迄援助スベシ」云々。

三、六月二十二日、沙基街上ノ中國人商店二階ニ若干ノ機關銃運ビ入レラレタリ。

四、六月廿三日、廣州市ニ於テ、五三十事件ノ同情示威運動開始サル。滿都ニ排外的宣傳びら撒布サレ、

其種類數フルニ暇ナシ。午前十一時、二臺ノ自動車ニ分乗セル黃埔軍官學校學生ハ沙基街ニ於テ排外宣傳ノびらヲ撒布セリ。市外東較場（練兵場）ニ於ケル示威大軍ニハ、約二萬ヨリ三萬に至ル群集參加シタリ。之等ヲ團體別ニスレバ、廣州市内外、香港（之ハ香港罷工者三萬人中ノ殘部）澳門軍ノ工人各團體、省内各學校、商團、農民團體、黃埔學生軍、粵軍、湘軍、警衛軍等ノ代表者ニシテ、政府要人ノ大官列席者ハ殆ド全部トモ云フベク、農民協會代表潭平山主席ニ着キ、開會ノ辭ヲ述べ、中央執行委員、省長胡漢民ノ決議文朗讀、對外協會代表林森、國民黨代表兼工部部長廖仲愷、市黨部代表孫科、商民協會代表甘乃光、伍朝樞、廣東大學校長鄒魯、汪精衛、ほろーじん等ノ激勵演說アルベシ。

それから、ここへ「五」の簡條が加はつて、ロシア軍官によつて率ゐられた二千から三千までの「赤衛軍」といふものの推定が記入され、その武装状態、武器の概數などが書き込まれた。

すべて、これらの材料類は、李刀達の眼には觸れなかつた。この場合の會議は、時刻を急いでゐたし、ほかの目撃者の情況證據などと組み合はせて、あとになつて英國側が發表するまでは、調査は極秘であつた。

「汪精衛先生、蔣介石將軍と仲がよくない。それよくわかつてゐる。間に立つてゐる廖仲愷先生、私極力話します。この人工人部長です、越飛との交渉者、左翼の頭、話よくわかる。小さな大きい男です。この人命令する、軍隊云ふこと聞きます。鮑羅廷、肩敵きます。怒ることない、しかし、命令は思

つたやうに通じます。李刀達、生命を賭けて保証します。今日、戦争ない、絶対に無い！」
 かう云つて、汗ばむだ總領事の手を握つた李刀達は、その十二時三十分はその室を出たのであつた。彼れのポケットに深く折込まれた一萬弗の小切手には、その金額に該當するだけの零圓氣が伴つてゐて、すべての世の中の危険率を減少するやうに思へた。——そこで、室から室へ、それから階段へ、廊下へ、最後にセメントの支關へ、更らに芝生のある戶外へ、幾種類にもちががつた場所へ足を踏み入れ、その都度、ピストルへ油を引いたり、横眼でじろりと見れば脇で小突き合つたり、不意に彼れにむかつて銃剣を突きつけたりする兵隊達を見ても、李刀達は大将のやうに悠然と手を放つて歩いた。

「ジム、あの小切手を持つて行きましたぜ！」

もとの部屋では、副領事がダナヒユウ氏へかう云つて詰め寄つてゐた。

ダナヒユウ氏は、今浴場から出て来たばかりのやうな顔を手巾で撫でて、

「持つて行つたが、どうしたのかね？」

と訊き返した。

「冗談、英國にアングロとサクソン族があつて以來、あんな空約束へ一萬弗支拂ふ紳士は、海外駐在官吏にあつた例はないのです。」

この副領事の氣の長い否定は、より氣の長い總領事の否定によつた、再否定された。

英國にアングロとサクソン族が、ノルマン王朝時代からの混血によつて、英國民一般を形成して、今

日のグレート・ブリテンの英國人が生じたとすれば、ミスター・ハムマーストン、君は今の一言を撤回した方がほんたうの紳士だらうぜ。何となれば我々は支那軍もボルシェウイキ顧問も、この際徹底的にやつつける氣持だし、勢くとも、女皇ウイクトリアの像に誓つてもよろしい、最後まで彼等を懲らしめてやる心算である。要するに、あの豚の尻尾のやうな料理人が何か先方と交渉すれば善いのだ。交渉は、私の推測にして大過なくば、多少の躊躇を、彼等の間に撒布するものと思はれる。その先方の妥協的態度にこそ、こちらの先取權を確立する餘裕があるのだ。つまり、エニシヤデーヴの爭奪である。

「ばア！ 外交の勝利さ！ それが失敗でないことを確證するためには、支那側から、一發の砲聲でも湧いたなら、あの小切手は、決して李某へ支拂はないやうに、銀行へ約束してあるのだ。そして、考へても見給へ、武装した支那兵が、こちらの砲撃に答へないほど、ロシア人は彼等をトルストイ流な無抵抗主義で訓練してゐる筈はない。——これらの話の要諦は、御賢察のとほり、あの小切手が空手形であるといふことを説明するに過ぎないのサ……。」

かう云つて、總領事閣下は、兵卒の恭しくささげて来た、「ヘエグ・アンド・ヘエグ」を、ぐつと一息に嘸み乾したのであつた。

しかも、私達は、この場合、一人の支那人と一人の英國人とが、ほとんど同時に、お互に對して、内心舌を出し合つてゐたといふデリケートな心理的交錯を記入して置く必要を感じるのである。

商人馬伯堯は、職業の一部として人間の毛髪をひさいでゐた。民國革命以來、男が辮髪を廢し、婦人も概ね斷髪してからといふもの、とかくこの商賣に食ひ込みが多くなつたことは事實である。従つて、馬伯堯の職業と、支那の新文明とは、本質上相容れないかたのものであつたが、その埋め合はせとして、革命期の支那には、絶えず戦争といふものがあつたのである。いくら廣東が、支那の「モスクワ」であらうと、ちよつと廣州市の五哩外へ出ると、いくらもまだ辮髪をしてゐた人間があつた。

これらの事柄は、まだ馬伯堯が、西關目貫きの十八甫に、堂々として店構への「富貴號」といふ、人毛取引所を設けさせ、廿五人の店員を備つて、店に百斤角のアンペラ箱を積んで置かせるには十分な利潤をもたらししたのであつたことを意味する。

大まかに云ふと、彼は、戦争の下うけをやつた。これは、大興公司とか、廣基昌などといふ、一流取引所の手を出さぬ仕事であつたが、馬伯堯の宇宙觀から云へば、世の中に廢物と稱すべき何物もある筈はなかつたので、一と戦争どこかで聞はれると、いつも勝つた方の軍隊に馬伯堯の密使が到來して、恭しく自任將軍の前へ、戦死者の毛髪代といふものが獻上された。そして、大部分はそのままに野原に放置される運命にある敵味方の戦死兵の毛髪が、誰かの手によつて、綺麗に剃り落されてゐたのである。

萬止むを得ずして、屍骸を合葬したりする場合の工夫達の一人は必ず馬伯堯の手下であつて、そのまま土中に腐つて行く人體から、わづかづつなりと彼等は酒手にありついたのである。

この種の毛髪の下等品より寸法が足らず、切れ易くて、どんよりした光澤しか持ち合はせてゐない商品と稱する下等品も寸法が足らず、切れ易くて、どんよりした光澤しか持ち合はせてゐない商品であつた。しかし、馬伯堯は化學工場を設計してゐて、それらの死毛を、一定の薬品のプロセスを通過せしめない以上は、決して市場へ出さなかつたのだ。化學工場と云へば、最新式な文化を輸入でもしてゐるやうに受取れるが、その實、それは、城内にある一軒のうす汚い釜場に過ぎなかつた。そこで、丹念な顯微鏡的手工藝の洗練を経て、一定量の死んだ兵隊達の毛髪が、やや「スタム」程度の光澤を帯びて再現したときに、富基號では、小東に分けて藺草で織り、これだけは二百斤包として、アンペラで包装した。

この廢物利用の一面は、さしもの廣東に於ても表看板ではない。本來、人毛は雲南省や、泗川省、廣西、湖南などの田舎から小仲買が天然蠶や繭を買ひ集めるやうに、百や二百元の資金を持つて、辮髪の爺さんや、ぐるぐる巻きの百姓婦の毛を剪つて歩くことにされてゐて、現に馬伯堯の店にも、さういふC、D、E、F品のサムブルぐらゐはあるのである。

支 那
——だが、一見單純な馬伯堯のこの商賣も、觀察の下しかたによつては、やや複雑性を帯びて見えることがある。それは、富基號の商賣の割に、あまり店員が多過ぎるといふこともあるし、年々激減して

行くこの道に馬伯堯が反對に富んで行くといふ矛盾の點である。しかも、品物の取引關係にはあまり縁故もなさそうな多數の客が、いつもこの店に出這入りして、ときには、夜遅くまでタキシードを店前に待たしてあつたりすることも、不思議な現象の一つであつた。

富基號の二階では、ほとんど一週間に一度は何かの株主總會めいた會合があつて、わりに實直らしい商人の群が、支那人が金品のことを考へてるときにする重要な表情をしては、汚らしいその階段に長い裾を曳いて歩くのであつた。この會議は、人毛取引關係の講とかギルドのやうなものだと思ふと、それは全然まちがつてゐる。いつもその會議の席では、太棒のロイド眼鏡を掛けた馬伯堯が決算報告をし、いつも鶴のやうに瘦せた、頭髪も髯もまつ白な爺さんが、帳簿を調べてゐた。ほかの四人の株主めいた支那人が、茶を駈りながら高らかに何か論じ合つたとしても、二階の窓はいつも氷庫のやうに嚴重に閉めきられてあつたし、店からの階段が、二つに折れて中二階めいた電話室の出來てゐる場所には、いつも旅館の番頭のやうに忙しい眼附をした店員が、鳴らない電話を掛けてゐたのである。

私達は、かういふ叙述によつて、いたづらに馬伯堯の毛髮店を神祕化する必要を認めない。ごく單純な言葉でそれを説明すれば、馬伯堯は決して人毛賣買に従事してゐたのではなくて、その看板の下に、全然看板のないもう一つの商賣をやつてゐたのである。戦争の下うけも泗川省への買出しも、馬伯堯が適宜だと考へた程度に於て實際に店員も派遣され、督軍への賄賂も流用されたのであつたが、それはそれつきりのものであつた。

その證據、十八甫の富基號に、この妙な株主總會のあつた前後には、廣東や廣西や香港の方面にまで、必ず、すばらしい新聞記事の件つた人攫ひ事件が起つてゐたのである。——かういふ理由で商人馬伯堯の本職は、人攫會社の經營といふことにあつたのだ。

この會社が、順調な商業様式を備へた株式會社であつたことは、誰の常識に懇へて判斷して貰つても、當然なことであつた。

それは、一定の商品として生きた人間を取扱ふことから、或ひはアメリカあたりの人道主義者の攻撃するところとなつてゐるかも知れないが、廣東の現在にはさほどにアメリカ人の人道主義を尊重してゐるわけでもない。先づ、その商業上の方式を云ふと、ざつとこんな風な商賣が人攫ひ會社なのである。或る特定の商品「人間」が、株式總會の席上で、交換價值のある諸點を明かにされる。その「人間」は、紳士でも富豪でも、愛妾でも、政府の要人でも、とてつもない大官でも、金廻りの良い賣辦でも、若い娘でも、誰でも個人的資格といふものを選ばないのだ。それには、火柴や雜誌にレットルが貼つてあると同じやうに、他の商品と紛れぬ程度の名前があり、年齢があり、住所がある。更らに、商品の質を吟味するやうに、會社では、その人間の住宅や、日常生活や、嗜好や、趣味や、職業などを、委細を漏らさず調査して置く必要がある。その人間が、政府筋とどんな關係を持つか、友人に軍人が幾人あるか、その妹婿は軍政府の要人ではないか、警察署長や警備司令官に縁戚がないか、あるか、などといふ情況も、大まかな「廣州民國日報」や、中央通訊社などの調査課より少しはくはしく探つて置く方

が便宜である。就中、この商品に關して、最も重要な因子は、商品の交換價值としての、その商品を抜き取つたあとの人間が幾何支拂ふことが出来、こちらの要求する價格でその當人を買ひ戻すだらうかについての査定である。——これらの業務が、かなり敏捷な推理と、鋭い觀察と、綿密な計數力とを要したことは云ふまでもない。

で、もと市政の財政次長をしてゐた神仙そつくりな王松儀が、鶴のやうな瘦身を伸ばして、嚴重に帳簿を保管したことも道理であるし、そのほか、あと五名のうちの馬伯堯は、云ふまでもなく強か者であつたし、粵省商軍團の秘書をしてゐた呂雲卿も堂々とした人物であり、梧州に金の廢坑を持つてゐる外國人から借金する技術にかけては山師の湯芳廷に叶ふものはなく、華寧里の郵便局長を勤めてゐる林澤豐、廣東クラブのボーイ長を八年も勤めてゐる陳景山、いづれも代表的方面の代表人物を網羅してゐたことに於て、この會社の人的構成は遺漏のないものであつた。

だが、たゞ一つの點に於て、この不思議な株式會社は、他の凡百の有限公司とちがつてゐた。それはどんなに株主が重役會議を開いても、決して、會社の社長は一度も顔出しをしないといふことである。この社長の何人であるかは、王、馬、呂、湯、林、陳の六重役と雖も知らなかつた。彼等は、ただ、毎度の報告を、

「上海郵務管理局、私函第3號」へ送れば、同じ第3號の名によつて、緊急な指令や、資金の融通を受けたのである。つまり、普通の

肥滿した大株主の代りに、「私函第3號」が、いつもこの會社の重要なポリシーを計畫し實行して行つたところから、重役達の想像力も、單なる想像力だけのものではなくて、漠として一つの恐怖を伴つてゐたことは無理もない。

會社の業務執行方面は、どんなに科學的に考へて見ても、些か冒險的たらざるを得ない。しかし、冒險と否とに拘らず、この執行こそは、富の生産の原動力たる労働のやうなもので、資本家が政府や、議會や警察や、法律をもつて労働力を巧みに自分の目的に合致せしめるやうに調節して行くと同じく、ここにも儼然とした恐怖組織が存在したのである。

普通の臨時備ひは、一時的な雇傭關係の下に商品を運搬するだけの労働に従事せられたものであるが、その中には、必ず二人の班員が混つてゐて、臨時備ひの運搬や取扱ひを監視してゐたのである。この班員は、いつも油斷なく武装されてあつて、各關係筋の班長によつて指揮された。班長に一定限度の生殺與奪の權のあつたことは無論である。かういふ班員が、實際に、人家に押入つたり、ホテルの自動車に假裝してゐたり、黄包子に乗つたり、黄包夫に化けたりして、人間といふ商品を掠奪するまでに、ごく簡単な命令が、重役の口から班長に傳はり、それが班員を動員するといふ、ほんのわづかな手數しか必要とされなかつた。

さて、かうして攫はれた「商品」を、どんな倉庫に保管して置くかといふに、これも一見何人も首肯する程度の常識なのである。班員の一人か二人は、命令が下るや否や、或ひその計畫前から、一軒

の家を借りて、そこへはアマを備つたり家具を入れたりして、至極住み心地の良い住宅を拵へて置くのである。花瓶も用意しなければならぬし、壁の書額でもさう粗末なものではいけない。商品の値打が高ければ高いほど、保管料を増すことは、普通の倉庫や銀行の金庫と同一理由である。一日三食は、必ず附近の一流料理店から仕入れ、ただ「商品」が外の世界へ紛れ出て、無断で自分の商品的価値を破壊しないやうに、戸口や廊下やカーテンの裏には、爪の先まで武装した社員をして、叮嚀に護衛させて置くのが、少しほかの貿易品と桁がちがふ位のものである。かうして、大切に保管した商品が、忽然商業価値を帯びて来るのには、その班の人員が、その商品のもと屬してゐた家族や事務所や役所へ、電話なり、書簡なりで、指定の価格を要求し、その金額と取換へにF・O・B某所に於て、商品を引き渡すか、それとも商品の所在地を責任をもつて明瞭にするかを決定することによつて生じるのである。すべての大會社の商取引のやうに、これらのことは、支那の傳統的な商業道德を守つて、頗る嚴格に時間も正刻に執行される。總じて、事件によつては、この人攫會社のために動員される労働者の數は、優に地方の小さい叛逆軍隊位には昇つてゐたのである。

さて、これだけの説明によつて、私達は、六月廿三日の朝に、馬伯堯が、他の五人の重役を非常召集して、緊急重要會議を開いた光景の前提としたい。

その朝、一通の電報が青服の配達によつて彼に手交された。平凡な取引上の電文で、誰が讀んでも、
「カンシイヒンストライキホンコンワンテイビンヨリイクラデモカヒコミオクレソウバウケアヒガタン

3

としか讀めなかつた。

この平凡な電文は、馬伯堯の頭腦を殊のほか悩ましたのである。

王資平は、香港で一二の富豪である。この男は、もと英國人商館の手代をしてゐたのであつたが、いつの間にか爲替の切替や株式などで小金を儲け、そのうちに有力な銀號を買収して、専ら匿名組合組織の蔭に隠れて悪辣な金利を貪つて南支の金融界に覇をなしてゐた。

朝の重役會議は、暑いのに窓を閉めきつた室内で、電燈をともした上に、天井に扇風機を廻轉させて開かれた。六人が全部出揃ふと、馬伯堯が電報を朗讀して、直ちに相談に移つた。六人のうちの三等郵便局長をしてゐる林澤豊は、誰よりも、電文の意味について懷疑的であつた。

「こりや、當會社を政争に捲き込むものだね、諸君。何となれば、御存知のとほり、今日から廣東の香港封鎖が内々政府筋によつて計畫されてゐますし、それに、御存知でありませうが、王資平は名うての親英派ですからね。恐らく、ごらんのとほりの沙面側の武装なども、この男の内通から行はれたものと思はれて來たといふことは、私達にとつて大變大事な問題です。」

この示唆の下に、熱湯を駈つてゐた呂雲卿が、熱いタオルで額の汗を拭ひながら、徐ろに意見を陳述した。

「この前の陳炯明の軍隊も、この王資平の手を通じて英國の金で武装されたのですからね。そこで、問

支 題は、一個純然たる營利會社である當會社が、今後もかういふ場合に遭遇することとせうが、果してこの種の政争に手を染めていいか、悪いか、といふこととせうね。會社の定款には、一切この邊のいきさつが明示されて居りませんので……」

那 王氏が、この言葉を、枯れた指尖で遮つた。

「社長の命令です。それ以上のことは私達の關知するところでないことは、紳士諸君も後承知のことだと思ひますが。もし、この電報を疑ふやうになれば、もはや當會社も半分かた存在の意義がうすれてゐるといふものではありませんか。」

「それはさうです。電報はたしかに上海から來てゐますが、私が前にも臆測をしましたとほり、第三番は、この廣東に居るのかも知れませんが——或ひは、ひよつとしたら、この席上にも！」

これは馬伯堯であつた。

「意見の相違は、直ちに重役の更迭であり、更迭は……死すからね。」

かう囁かすやうに言葉を挟んだのは、這入つて來てからずつと無言でゐた山師の湯廷芳であつた。

「しかし、ですな、——しかし、萬ケー、私達の社長が、共產黨でもあつた場合はどうなることとせう？」

50

共產黨嫌ひの林澤豐局長は、意志を明白に表示した。

「社長が共產黨員であらうと、チンパンであらうと、それは問題ぢやないではありませんか。私達の立場？」

51

場と職務は白い一本の線のこちら側です。商品王資平の荷造り、保管、價格付け、そして第二の訓電を待つ——と、その線を踏み越えたら、それは私達の仕事の分界を犯したことになるでせうが。」

王松儀老人は、算盤を弾くやうな指先をして、差し向ひの局長に迫つた。

「よろしい、その議論は打切りにしませう。前例がないことです。近頃流行の職工の會合とちがつて、私達の間に、意見の相違などといふことがあつた例はないぢやないですか？——決議採決などと、そこそ國民黨の眞似をしなけりやならぬほど、當會社は無定見無方針ではなかつた筈です。そこで、直ちに、注文されました原品の調査にとりかゝりたいのですが——」

馬伯堯は、一見、ただの厚ぼつたい黒檀の支那卓であると思はれる物の、裏側のどこかにある釘を指の腹で押した。忽然と六人の眼の前に躍り出したのは、一個の卓上電話である。他の五人は、別に怪しみもせず、受話機を取り上げる馬伯堯の手元を熱心に見成つた。

「ああ、もしもし、唐か？ 香港長距離を呼んでくれ。香港政廳の經理課に居られる超丁教氏だ。こちらはいつものとほり……」

支 嚴封したこの室内の重い扉の外で、人毛の散らばつた階段を五つほど降りた、中二階めいた曲り角の、壁に据え附けられた電話機の前で、眼のはしつこい唐店員は、馬伯堯の云つたことを、しきりに壁に向つて繰返してゐた。

支 支 として、その壁を、十八甫路の外側から見た人は、誰しもそれは普通街角にある人毛賣業富基號で

あることに不審を持たぬ筈である。何となれば、そこには、その日の度東のどの店もがさうであつたやうに、無数のポスターが彼等の視線を奪つたからである。ポスターの字はこんな風に讀まれた。

「打倒帝國主義！」

「收回領事裁判權！」

「取消不平等條約！」

「援助上海慘殺案！」

「實行經濟絕交！」

「中華民國解放萬歲！」

それらは、文字だけでも、既に凄まじい一大デモンストレーションであつた。

李刀達は、沙基街へ出ると、大新公司へ行かうとした足を轉じて、沙基中路へ折れ、そこから十七甫へ切れると安昌號といふ爆竹商から、中型の花火を三個買ひ求めた。

次に、そこから黄包夫の溜り場のある大通りへ這入つて、政府が出してゐる簡易閱報所で、二三冊のパンフレットを繰つて拾ひ讀みをした。それを先刻から隅の椅子で見えてゐた閱報所の若い青年事務員は、客のないところから共產主義のパンフレットを出してくれたり、三民主義を平易に解釋したものを

示したりして、何れとなく親切にした。ここは、謂はば、國民政府の設けてゐる無料圖書館の小さなもので、客は随意に好きな新聞でも冊子でも立讀みが出来た上に、必要とあれば唯でその本を買つて歸ることも出来たのである。

「貴方も、今日は遊行に加はるのですね？」

青年は李刀達に訊ねた。

「俺は途中で待つてるので、」

「上海では非道いことをやつつけやがつたですね。」

「憤慨に堪へないことです。」

「もう事件は知つてますか？」

「ふむ、多少は。」

「上海へは御出になつたことがありますか？」

「船でね。船のコックをやつてゐた時分だから、ずつと前ですよ。」

「ああ、貴方はコックさんですか——やはりいまも？」

「沙面を罷工した一人ですよ。」

「おお、一昨日から？——ではやはり同志です。どうでせう、今日の示威遊行は、聞けば沙面では消極

的防備をしてゐるといふぢやありませんか？」

「鐵條網は張つてあるがね。」
「その鐵條網が良くないですな。何もこちらがデモをやるのに、英國が反對するといふ理窟はないぢやないですか？」

「——もつと深い陰謀が、英國側にあるのぢないかね？ 例へば、聯俄といふやうな政府の方針を引續返してしまふやうな？ 尤も、俺には、さういふ問題はよくわからないんだが……」

「貴下は、支那が現在のままである方がいいと思ひますか、それともロシアのやうな國と提携して帝國主義に對抗した方が幸福でせうか？」

「さア、ロシア——となると、これはまるつきりわからないが、ともかく支那も現在のままでは、救はれませぬね。」

「矢張り私と同じ意見ですな。——ロシアのことはパンフレットに書いてありますが、御持ち下さい。代はいりません。それから御附近に、これが私の名刺です。御名前は？」

程方藩と書いてある名刺を受取つた李刀達は、自分の名を告げて、また惠愛路の方へぶらぶら歩き出した。花火と一しよに、二冊のパンフレットが、彼れの右側のポケットに突込まれてあつた。

「妙な奴だな、いやに馬鹿親切ぢやないか！ 廣東の青年であんな親切な奴ははじめてだ。あいつ、ひよつとしたら、何かの間諜ぢやないかな？……」

すこし空腹を感じたので、彼は一軒の氣の利いた小料理屋へ昇つて、下の階せる窓際に掛けながら麵

を注文した。注文した食物が来ると、彼は悠々と箸を取り上げた。

これらの行動を綜合して見ると、先刻沙面であれほど熱心に主張した英國側との契約に對して、すこしも彼は責任を持たぬことになつてゐるのである。——その誓言が、數千、數萬人の生命にかかはる一大事變の調停——ルブリケーテング・オイルであつたといふことよりも、この利那の彼は、絹絲のやうな伊府麵の一本一本を、いかにして巧みに象牙擬ひの箸の先へ絡みあげるといふ方が、更らに重大に見えるたらしいのである。

食事が終ると、ボーイがタオルを持つて来て、彼の腕の黒い布を見ると、いろいろと質問し掛けた。

李刀達は、簡易閱報所で貰つた共產主義に關するパンフレットを、べらべらと指の間で弄びながら、ボーイの一質問ごとに、自分が、ますます重要な人物らしく見られて行くことを知つて、ここでも芝居氣を出して見せた。

「俺は、市内警備の共產黨員だ。今日の遊行に何故君達も參加しないのかね？ 上海は非道いことをやつたもんだ。有史以來の一大恥辱だよ！ 中華民國として、これをしも忍ぶことが出来たなら、その人間は英國のブルドックに食はれて死んじまへ！ 戦争だ！ 新しい戦争だ！ イデオロギイを持つた労働者と民衆の反逆だ！ 君達も、これからかういふ本をどしどし讀み給へ。何に、我等の政府の設けてゐる辻々の簡易閱報所では、かういふ物は無數に只で分配してゐるんだ。」

ボーイは、拜むやうな眼付をして、立ち上がつて金を拂ひにかかつた李刀達を瞞めた。その減食され

た犬のやうな眼付を見ると、李刀達は、是非とも何かして見せないと済まぬやうな気がして、不圖、指先に觸れた總領事の小切手を出して、二つに折つてあるのを千斷るやうに振つて、相手の眼の下へ突きつけた。

「このとほりだ。我々共産黨には、金はいくらでもあるさ。——一萬弗、どうだい、但し、こんな物を單獨に持ち廻はつては危険だから、ちやんとピストルはここに用意してあるんだぜ！」

さう云つて、花火のポケットを敲いて、彼は高らかに笑つた。ヘルメツトを氣取つた手付でかぶつた李刀達の後姿を、料理屋のボーイは、鼻の下を擦り擦り見送つてゐた。

眞鍮の棒で、カーベツトを押へてゐる、その店の階段を降りきらぬ前に、李刀達の耳には、異様な地響が傳はつた。

車輪の轟きでもなかつたし、自動車の疾驅して來る音でもない。——それは、無限につづく、人間の聲音であつた。

半ば休日状態に這入つてゐる市街に、その土の下から數千人の坑夫が掘り上げて來るやうな、強い、しかし秩序的な聲音が、ぞく、ぞく、ぞく、ぞく——と響いて、心臓といふ動く機械を内包した人間に、動け！ 動け！ と命じるやうに思はれた。それは、決して軍隊のやうな、ことさらに力を單めた足取りではない。さうかと云つて、日常海岸通りあたりで聞く、亂雑な、我勝次第な、四方八八から迫つて來る、時間にせがれた歩調でもない。いろいろな粗末な履物をつけた聲音が一つ行動の下に營む、合意

的な弾力のこもつた連続がそれであつた。武裝せざる大軍の近づく音だつた。これは、たしかに、新しがりやの多い廣東の街でも新しい聲音だつた。この新しい聲音の特徴として、誰かの號令などといふものは聞えなかつた。じつと耳を濟まして聴いてみると、鐵板のやうな市街の上を、見えざる無数の脚の音だけが擴がつて行くやうに感じられた。李刀達は、胸へ何かを一杯に詰められたやうな氣になつた。その底苦しい鈍痛の間から酸っぱい涙が湧いた。彼は飛び出さうとして、自分を恥ぢて、顔を緒らめながら、もう一度ヘルメツトをかぶりなほすと、胸を張つて階段を降りきつた。その後姿を、料理店のボーイは、まだ口を開けながら眺めてゐた。

大きい街幅一様にひろげられた白旗が、街を狭くして進んで來た。旗には、墨のほとぼしつた字で、「援助上海慘殺案！」

と大書してあつた。

旗の全面に太陽が漲つて、人間の顔はその下に黒く脂ぎつて、小さくしか見えなかつた。奇怪な帆を張つた海賊の群が、見慣れぬ船を押しまくつて、不意に都會を占領しにやつて來たやうな幻想が、見物人の頭を襲うた。上半分のすつ裸な、筋骨の逞しい二人の労働者が、黒い腕章をつけた腕に、撓びきつた旗竿を、汗みどろになつて支へながら歩いた。旗持は、黒い顔に、はにかんだやうな微笑を見せてゐた。彎曲した唇に、満面の汗がたらたらと流れ込んだ。これらが、支那の新しい英雄だ！ 大旗の過ぎて行くところには、街の複雑な陰影がすっかり打消されて、紙のやうに疊まれた。



ぞく、ぞく、ぞく、ぞく……無数の足音が、素足、靴、皮鞋、繻鞋、草鞋、足袋などの路面に對する摩擦を伴つて、いつまでも、いつまでも、李刀達の耳の傍にあつた。白い靴もある、赭い足もある、茶つ葉服のズボンもある、青い裾もある、黒い靴もある、赤皮の歪んだ靴もある、東較場の土埃にまみれた靴もある、切れた草鞋を急いで蹴飛ばす甲の高い足もある——それらを見てゐる李刀達の眼からは、粒の大きい涙がぼつりと墜ちた。そして、頭の上を、なくさめるやうな鼓舞するやうな、小旗や組合旗や紙旗が、森の葉のやうにはたはたと鳴つて掠め去つた。

「俺も行くぞ！」

李刀達は、工人と農民團との列の切れ目へ飛び込んだ。惠愛東路のむかろの方には、大きい赤い旗が三角形に尖つて、旗だけがひとり歩いてゐるやう

に、しづしづと動いて来た。その奥には、きらつ、きらつと、軍隊の銃剣の穂先が閃いた。この數へ切れぬ人間の群集、思ひ思ひの服装、あらゆる標語を書いた旗の一切に、李刀達は、大きい統一を感じた。めいめいの人達は、殆ど呼吸でさへも同じタイムでやつてゐるやうに思はれた。四列縦隊に歩行してゐるのであつたが、誰一人抜け出るものもなければ、前を駆け抜けようと思ふものもない。彼も夢中になつて列から離れまいとした。

傳令があわたしく行列の傍を駆け飛んだ。永遠路から長堤へかゝると誰か大聲高に何かを叫んだ。

すると、李刀達の周囲は、一齊に巨きい釜が煮えくりかへるやうな群集の聲で氾濫した。

「打倒帝國主義！」

先頭の一人が、口號の音頭を取つた。

數千の口が、同じ言葉を異口同音に繰返した。

「打倒帝國主義！」

波瀾のやうな複音である。それには、人間の群が、殆ど不可能だと思はれるほどの、重いげしき無形の抵抗を撥ねかへす力が籠つてゐた。言葉は人間を勇氣づけた。何かにむかつて衝き進むだけの闘争力が湧いた。複音がすこし亂れると、遙かに高く、喇叭のやうにりりやうとした音頭が、槍で突刺すやうに、

「打倒帝國主義！」

と先頭を切つた。

前にも、背後にも、左右の隣りにも、四人づゝ組み合はせた、生きた鐵環のやうな人間の長列が、肺の底から同じ言葉をコーラスに叫んでゐるのを耳にして、李刀達だけが沈黙してゐる筈はない。

彼も聲を絞つて、同じ言葉を叫んだ。幾度も、幾度も叫んだ。——と、突然、彼は、行列が、間もなく沙面近くに迫つてゐることに気がついた。すこし勾配になつた、大新公司からの大道が、珠江のぎらつた水に滑り込まうとして、サンパンやジャンクの帆柱や屋根に食ひ留められ、それが濃緑な沙面の木立の蔭に糊けてしまふのが先頭の大旗に遮ぎられながら、見てはならぬもののやうに彼の視覚を脅かした。

李刀達は、意識的に、計畫的に、行列を離れて、先方へ駆け出した。

殆ど工人團體の最前列へ追ひついた頃に、彼は、自分が沙面の西橋のまむかひに立つてゐるのを知つた。濠のこちら側には、電信柱が立つてゐて、その傍に白塗の電燈の支柱が細い柱身を撓はせるやうに立つてゐた。無心でこの前から歩いてゐたのだが、河岸には、工事中か何かの切石が置いてあつた。これは、行列の人達の足の間から、ぎら／＼と白く光つた。切石のま向ひに、ワトソンス・シヨップといふ酒場があつた。掩ひかぶさるやうに繁つた樹木が、ワトソンと並んだウイクトリア・ホテルをほどよく保護してゐた。ホテルの壁は、西へ廻つた日光を受けて、煉瓦の刻みを見せて黄ろく沙基街へ反射してゐた。

行列に這入つてゐる労働者や農民の團體は、口號を叫びながら、わざと投げつけるやうな視線を、ウイクトリア・ホテルの方へ向けた。ホテルから橋へ掛けて、見渡す限り、そこには鐵條網の内側の英佛軍人の眼が、長列の支那人の眼を弾ね返して、隙があれば飛び掛らうといふ伏勢を取つてゐた。子供が石ころを投つても屈きさうな、狭い、どろ／＼に濁つた濠のむかうとこちらには、ぱつたり空氣の流通が途斷えて、たゞその上に、支那人が歴史を持つて以來の滿腔の呪ひを單めた口號の響だけが、わーつ、わーつと、むかうのエランダや、室や、戸口や、扉などに突當つては碎け、碎けては突當り、その隅々まで、小さな氣泡のやうな餘韻を漲らせた。

鐵條網といふものは、どんな場合に張りめぐらされても、張つた方にも張られた方へも、必要以上の警戒心を與へるものである。しかも、その内側に、無數の軍人の炯つた眼があり、黒い圓い孔のあいた機關銃が覗いて居り、更に、それらの敵對行動を完全に隠匿する砂囊のふてふてしい胴腹を見るときには、張られた方の人間は、どうにかしてそれを撤去して見たいといふ欲望を感じるにきまつてゐる。たしかにその反抗意識の嵩じた結果であらうが、李刀達は自分の眼の前を過ぎつゝあつた學生團のうちから、二三人の學生が、

「俺がやる！」

「俺だ。」

「何を、君は籤で落ちたぢやないか！」

「やらうか——今だ！」
と、罵りながら、揉み合つて、そこだけ列を亂してゐるのに気がついた。
その光景に接した李刀達は、いきなりマツチを片手に掴み出すとよろけるやうに横丁の一つへ駆け込んだ。居住民が沙面街へすつかり見物に出拂つた横丁は、人つ子一人通つてゐなかつた。その最初の店の入口に駆け込むと、そこは、大小三つのかまどへいつも湯をわかしてゐる。老虎籠と云はれる賣湯屋であつた。煤つぼけた天井と壁とに包まれた、すべて土からこね硬めた店である。李刀達の足音を聞きつけたらしく、奥から、力ない咳がして、青い布きれで前髪を包んだ婆さんが顔を出した。彼は、何も云はずに、手元にあるマツチと三本の花火を、コークスの燃えくすぶつてゐるかまどの下へ一くりにして投げ込んだ。

「何をしてゐるんかね？」

「いや、ちよつと煙草の火を借してくんな、お婆さん。」

「あう、あう、いいとも。——今日はえらい人出だそうだの。もう行列はそこまで來てるそうだが……」

「あゝ有難う。」
李刀達は賣湯屋の軒下から表へ飛び出した。壁を一つ巡ると、まむからに、ウイクトリア・ホテルが、芝居の幕のやうに眼を奪つた。その下を、いろいろな小旗が通過したと思ふと、急に旗の列がなくなつて、その代り、胸をどきどきさせる銃剣の穂先が、鏑を張つた巨大な太刀魚のやうに人間の波の上に動

いた。

ウイクトリア・ホテルから、望遠鏡でこちらを覗いてゐた、けばけばしい服装をした、鼻の高い、顔の赤い西洋人が、覗き込んでゐた眼鏡をつるりと手から滑らすと、首筋へ釣つてあつたらしいその紐がびんとまつ直に張つた。その何でもない動作の後に、西洋人は、誰かへ合圖でもするよきのやうに、つと右の手を差し伸べた。

そのときである。李刀達の今花火をくべて來た賣湯屋の方角から、轟然とした爆發物の響いたのは！
花火は、三つともいつしよに爆發したのか、あとは、ものの一秒間も、何の爆發もつづかなかつた。その一秒間に、李刀達は、空前の希望を賭けて、ウイクトリア・ホテルの黄ろい壁の反射を見成つた。そして、その一秒間の後に全く豫期しないことから、一番先に驚いたのは、彼自身であつた。

無数の爆音に蹴散らされた河岸から、白い黒い混濁となつて、夥しい人間の洪水が、この横丁へ雪崩れ落ちたと思ふと、もう彼はその群集の締めめに濡はれて、一丁ほどは、夢中で御いてゐたのである。そこで一度踏み留まつた群集は、互に蒼白になつた無表情な顔を眺め合つては、ほんのわづかの時間、河岸の方でわーつ、わーつといふ人間の叫喚と、あらゆる家財道具を引ばたいて敵きつけるやうな小銃の亂射に耳を落すと、又、思ひ出したやうに、双手をひろげて、横手の奥へ奥へと流れ込んだ。

ものの半丁も駆けたと思ふと、群集は、もう一度互の顔を見合はした。いろいろな叫び聲や、狼狽した掛け聲の上に、た、た、た——と無限の鐵彈を吐く機關銃の音が、あざやかに人達の意識に、

「戦争だ！戦争が始まった！」
と教へた。

李刀達はあせり出した。彼は、幾度か踏み堪へようとして、異常な力で押して来る胴や手や脚や頭を、てんでに切離して、それぞれのめがけて行く方向へ進ませてやり、自分だけは何とかして後へ引戻そうと苦心したが、さういふ個人的努力をすればするほど、完全に一つの凝結力を持つ群集は、ますます奥へ奥へと彼を押し包んで運び去るに過ぎなかつた。沙基街から三丁ほどの間は、もう身動き一つ出来ないほどの人間の頭で埋まつてしまつた。

「逃げる、逃げる！」

「道はこつちにもあるぞ！」

「早く城内へ！」

「大變だ。外國人と戦争になつた！」

幸に横丁は、どんづまりの壁へ突當ると、左右に広い通りへ退去場を展開してゐた。小便臭い突當りの壁の下には、群集に踏み付された婆さんが、血みどろになつて肩を、土埃に埋めながら慄へてゐた。その前を、恐ろしい勢ひでどどとと駆け通る群集は、危く婆さんの體を踏み碎かうとしては、ちよつと思ひ留つて、左へ右へと黒い渦を巻いて争ひながら駆け抜けたのである。

李刀達は、沙基中路の方へ切れ込んだ。

その横丁では道具類を出しかけては、逃げ落ちる群集に、何か聲高に訴ねてゐる婦も見えた。ここにも急激に混亂化された街の姿があつた。人間といふ人間は、悉く心から蒼ざめてゐた。その逼迫した窒息的な呼吸の前に、極度の混亂から生じる黄ろい塵埃が、西に傾いた日光を浴びて、どす赤く立單めて動いてゐた。

「俺の仕事はまだ終つてゐない！」

李刀達は、沙基中路から、ひた走りに沙基街へ飛び出した。

びしりッ！

彼の足元の鋪石を割つて、彈丸が一つ横手の壁へ突刺さつた。町角へ出ると、彼は、廂を街路へ突出して、それを石の支柱で押へ、その下を人間の通路にあてがつてゐる廣東風の建物を心から感謝しないわけには行かなかつた。

最初は、いきなり行列を横向けにして、沙面側の砲撃に折式の構へで對抗したらしい軍官學校の生徒や軍人達は、何の隠蔽物もない平地の犠牲の數に氣がついたらしく、めいめいに難行だの雜貨店だのの廂の下に陣取つて、鐵條網にむかつて射撃を開始した。

黒血を吐いたままに仰向けに斃れてゐる仲間の體軀を楯に取つて、根強く腹這ひになつた姿勢で狙撃してゐる兵士もあつた。動かないので氣がつかなかつたが、濠縁から店の前へかけて。ごろた石のやうに轉がつて、路面に低い陰影を投げてゐるものは、皆死骸であつた。わづか三十ヤードともない道路で

横なぎに仆れてゐる動かない陰影といふ陰影は、決して二十や三十ではきかなかつた。誰かが、英國橋の方面で、手に手巾らしい物を振つて飛び出した。その白い物を掴んだ手が、斃れてゐる陰影を、二三尺ずるすると曳摺つて動いたかと思ふと、手は手巾をうちやつて、放心したやうに空中に輪を描いて、ぱつたりと動かなくなつた。切石の一角へやうやく片手を力に匍ひ上がった兵士が、立上がりうとした途端に、何かがびゆうと彼の方へ飛んで来て、意氣地なくも前のめりに濼へ吸ひ込まれてしまつた。もう、李刀達の耳には鐵砲の音は苦てなかつた。

緊張してじつと動かない人達の群は、水平に支へた銃身から、ぱつぱつと火花を吐かせてゐた。さういふ機械みたやうな人間のゐる傍らには、両手をちぎれるほど振つたり、跛を曳いたり、聲も立てずに泣いたり、笑ふやうに口を動かしたり、むちやくちやに自分の着てゐる着物から離れようともがいたりする一團の人達もあつた。

どーつと、廣東一帶の土が全部撥ねあがつたやうな地響がした。遙か遠くの方で、銜が牙えた音をして、大砲の響であることを人達には思はせた。

「軍艦がやり出したぞ！」

李刀達は、いきなり聲を出して叫ぼうとした。しかし、聲は薬品で口をふさがれたやうに、喉から出て来なかつた。彼からさほど遠くない距離に、今自分の云はうとした言葉を、そつくりそのまま繰返してゐる男があつた。それが、この咄嗟の場合に、何か自分の聲がその男の方向へ反響してゐるやうに思

はれた。しかし、聲はそれきりで止まなかつた。その男は、李刀達の頭腦に出て来ない事柄をも叫びつづけたのである。

「孫中山先生は、我々を守つてゐるぞ！ 同志諸君、火蓋は切つて撃された。この上は勇敢に闘つて死なう！ 敵は、前面の卑怯な英國人ではないぞ！ 我等無産階級國民の敵は、全世界の資……」

ここまで叫ぶと、その男は、挫と仆れて、彼の背後に踞まつて正體なくなつてゐる老人の上に仰向けに両手をひろげた。竹の尖端で突刺したやうな彼の前額の孔から、見る見る赤い血が流れ出した。

しばらく経つてから、李刀達は、それが自分と同じ組合の、總領事のコツクの下働きをしてゐた伍頼信であつたことを、ごく遠い幻覺のやうに、憶ひ出したのである。……

このとき、李刀達には、自分の持つてゐる、人間としての判断力や感情や感覚が、極度の麻痺作用から、すつかり體外へ持つて行かれたやうな惧れが湧いた。

はげしい一瞬間の苦しみ、それから吐き出されて、ふらふらと眼が昏んだときは、もう、巨大なボイラーかなんそのやうな機械に飛び込んだ人間も同然であつた。その機械は、非常な速度で廻はつたり、破裂したり、滑走したり、上下へ揉み立てたりしてゐるので、それに觸れたものは、否應なしに、恐ろしいその自動力に引渡らはれずには居られなかつた。……

李刀達は見た。動いた。聞いた。しかし、それは、全く自分と関係のない狼藉の世界を、誰かに代つて見たり、聞いたり、動いてやつたりしてゐることのやうにしかとれなかつたのだ。彼はものの聯絡を忘れた。

そこに、三人の人間のヘルメットが、一度にサイドウオークへ轉がつて、たつた一つしか眼の前に落ちなかつたやうなことがある。頭の上で、いままで、
「やつつけろ！——外国人を敵き出せッ！」

と大聲でわめき散らしてゐた、學生らしい青年が、水を噴むやうな音を立てたと思ふと、李刀達の上へ憎いほど亂暴にのしかかつて來るのである。押しつけて見ると、その青年の下頤が全部失くなつてゐた。どこかで、白い布に、颯と赤い色が流れる。色は、とめどなく漏出するインキのやうに布地を染めて行つた。それを見てゐる間、彼れの耳には鮮やかに陶器がびーんと裂けるのが聞え、更らに、その下から、食用蛙が踏みつけられるときのやうな氣味悪い人間の呻吟もして來た。すこし横手の支那靴の底と大きい臀部の下から、仔豚の屠殺されるときのやうなきいきい聲が、さいぜんからつづいてゐる。子供にちがひない。李刀達は、その方へ行かうとした。躓いた。人間の蒼黄ろい顔が、南瓜のやうにころがつてゐる。その顔は、もう生命のないものであるにも拘らず、二三度、石の上を寢返へりを打つやうに動いた。動くことに、李刀達は、機關銃彈の骨を貫く音を聞いた。やつとのことで、人間と人間との重なり合つてゐる底から、少年らしいものの二本の足を曳摺り出すと、小さな楊桃を潰したやう

な顔からは、もはや人間の聲は出てゐないのだ。

大砲が、つづけさまに、自分の顔へだけむけて、まともに妻まじい火の握りを送るやうに思へた。その都度びくんとして、横を向くと、これも火焰に握り立てられるばつたのやうに、腰を力に飛びあがつて、何か白い物を閃らめかしながら、
「殺罷！ 殺罷！——」

と叫んでゐる。北方人らしい瘦せた労働者が眼についた。

李刀達の帽子が、何もものかによつて、手荒らく地面へ敵き墜された。それを拾つたときには、横手の「殺罷」は、ぐつたり前かどみに、沙面の方へ両手をついて、東洋人が敬禮するときのやうな恰好で坐つてゐた。ちやうど、その男の股から瘦せた臀肉の間へかけて、先刻から彼れの振つてゐた白い物が見えた。旗だつた。その上の「……帝國主義」といふ赤い文字が、蛙のやうに血を吸つた布から消えた。自分の帽子には、前額から後へ抜けた彈丸の孔があつた。——李刀達は、愕然として、我にかへつた。

ほんのちよつとの間だけ、そこには妙に靜かな時が迫つて來てゐた。それは、單純な、物體や人間のことも音響が停止したといふだけの靜かさではない。突然、聾になつてしまつたときのやうな驚駭が、李刀達の心を襲つた。靜かになつた四邊には、もつとも恐ろしいものが潜んでゐた。その中から、より妻さまじい爆發が、今にも起りそうであつた。寸断れそうであつて、わづかに一本の絲のやうな時間で、つなぎ留められてある沈黙であつた。沙面側も、支那人側でも、云ひ合はしたやうに、この瞬間は、射

撃を中止したのである。

このとき李刀達は、ウイクトリア・ホテルの窓に、過去七ヶ月間やとはれてゐた主人であるところの、ジイ・エム・ハムマーストン氏の顔をありありと見た。奇妙な境遇である。西洋人は、手にピストルらしい物を持つてゐた。ボンジイのシャツ一つになつても、彼は、さすがに英國紳士らしく、腕まくりなどはしてゐなかつた。ハムマーストン氏の、特長のある眼は、ことさらに李刀達に對してだけ炯つてゐるやうにこちらを熟視してゐた。

李刀達は、わざとヘルメットを脱いで、ちよつと敬禮の眞似をして見せた。西洋人の顔が、認識で、すこし赧らむやうなけはひがした。

と、彼は、ホテルの下の方を向いて、しきりに何か大聲で、誰かに命令するのであつた。節くれた樟の木の眞下にある鐵條網の奥に、カーキー色の帽子が、水に漂つてコルクのやうに、二つ三つ浮いたり沈んだりした。

「撃つつもりかな、畜生ッ？」

李刀達は、心の中で訝かつた。そして、ごく微細な、丸い、黒光りに光つたルウイス銃の照尺のむかうに、軍帽の廂がてかりとすると、彼は一種の芝居氣から、ポケットの小切手を取り出して、副領事の視線を邪魔するやうに高く振つて見せた。

副領事が、手を擧げた。左の手だつた。李刀達は、その端にピストルを豫期してゐたのであるが、意

外である。が、次の瞬間、商館の事務員達が、揃つて十呂盤を鳴らすやうな音がしたと思ふと、李刀達の身を躲はした柱石の柱身は、見えない鈍刀で削りおろされるやうに、旺んに大小の石のかけらを飛ばしてゐた。それに應じて、味方のどこから眞赤に焼けた鐵の棒を、いきなり水の中へ突刺すときのやうなライフルの響がした。それは、ずつと頭の上であつたから、誰かその邊の商館の二階へ陣取つた兵隊達であるにちがひない。

李刀達は、憤然として叫んだ。

「——酒店！ 酒店！」

そして、異様な沈着さを見せながら、一步石柱から踏み出ると、手にした小切手を半分に切裂いて見せた。「Hongkong and Shanghai Banking Corporation」と印刷してある小切手が、一枚になると、もう一度重ね合はされて四つになり、最後に十六枚の小さな紙きれになつて、ハムマーストン氏をめぐけて投られた。惜しいことには、この芝居を見せようとした當の見物人である副領事その人は、もう窓枠の奥深く姿を潜めて、折角の芝居と、もう一つ、両手の指をひろげて、それを鼻の上へ、Wを二つつなぎ合はせたやうにして羽搏きして見せた李刀達の、國際的侮蔑の表情とを、彼は看過したのである。

尤も、かういふ應當が、李刀達に出來たのは、味方の射撃が再び猛烈になり、従つて、敵方の目標も商館「利榮號」の二階へ移されてゐたといふ、間接の庇護にも依つたのである。

「どうせ拂ふわけが有りつこはない。對手は、ただで一萬弗呉れる英國人ぢやないんだ、碧ん眼玉

李刀達は、自分をチヤステフアイするためにかう斷定した。夥しい人間が、わアわアと騒ぐ音がして、礮とやんだ。もう一度、先刻と同じやうな静寂が廣場を占領しそりになつたとき、誰かが、尖がつた聲で、

「おい、發砲をやめい！」

と命ずるのが聞えた。鋭い刃物で宙を截つたやうな餘韻が聞いてゐる人間の耳に残つた。李刀達は若い黃埔軍官學校の士官を思ひ起こした。そして、氣がつくと、いつの間にか英國人側では、發砲を中止してゐたのである。

「おうい、擔架だ、救護班だ、——負傷者をどうするか！」

から煙脂のつまつたやうな聲で叫ぶと、意外に近い場所から、

「君は、誰か——？」

と鋭く訊問する聲がした。

振りむいた李刀達は、自分の背後に、血の沁みた鼠色の中山服を着て、細い青で縁取つた赤いネクタイを締め、幅ひろいバンドを掛けた軍人が、帽子の廂から不審げに彼を睨めてゐるのを發見した。彼は、何時からこの青年士官がそこに立つてゐたかしらと疑つた。

「李刀達、沙面罷工委員會の李刀達です。あの英國副領事の奴は悪魔だ。もつとやらないですか？ 發

砲をやめたのですか？

士官は、彼れの姿から眼を放すと、ちよつと腕時計を覗いたのちかう云つた。

「負傷はしてゐないかね？」

「いや、別に。僥倖です、私だけこんなにびんびんしてるのは！」

「ちや、御氣の毒だが、君は、一と走り病院から醫者やアムバランスを迎へて来てくれ給へ。——僕

は、軍醫長の方へ電話を掛けにやらん。早いのがよろしい。だいたい學生や見物人が殺られてる。」

李刀達は、自分も一兵卒でもあるかのやうに、無言で頷くと、活潑に踵を巡らして、廂の下を歩き出した。靴の底が、泥濘にでも捕はれたときのやうに、にちにち粘りつくので、彼はわざと石疊の上を見ないで進んだ。見ないでも、妙に生あたたかい臭みが、ぼんやりとそこから一面に發散するのである。

沙基申路の角へ出ると、眼に入る限りの街路の光景が、あまりにも濼端のそれとちがふので、かへつて、その開け放たれた扉や、張りつめたシヨウ・ウインドや、何も反響しない壁などの整然とした列が氣味わるく思はれた。彼は、靴から血糊を敲き捨てるために二三度、岸へあがつた家鴨のやうに足踏みした。一軒の家では、開かれた扉の奥でしきりに婦人達の立舞めいてゐるけはひがして、店の前には赤から赤黒く變色しかかつた女の衫と襪汗とが、捨ててあつた。平和な場所へ來れば來るほど、沙面が恐ろしくなつて來た。

「博濟醫院！」

そこは、よくアマの芳春幡が厄介になりに行く慈善病院である。その廣ろい、西薬の香の漂つてゐる芝生を、彼は一度ならず低い煉瓦塀越しに見たことがあつた。つい先達も、仲間といつしよに「血心救國」を貼りに行つたのが、その病院ではなかつたか。

「あすこなら、大丈夫。」

かう考へて見ると、不圖、長堤から太平路へ抜けた方が近路であつたのに氣がついた。——しかし、それには、再び沙面の方へ引返して、あの動物園の柵のやうな鐵條網のむかうに數百の眼がこちらを窺つてゐるフランス租界から、税關の方へ出なければならなかつたのだ。それでなければ、華寧里邊の裏通りから、太平路へ出て、そこをうねうねと曲がつて行かねばならない。かなりの道だ。しかし、李刀達は、かなりの道の方を選んだ。彼は臆病になつてゐたのである。

眼の前に、呆氣にとられた表情をして彼をしげしげと瞷めてゐる女が三人あらはれた。どれもこれも若い小綺麗な姑娘であることだけをぼんやり意識して、行き過ぎてから、はつとして自分の服を見返へつた。娘達の驚いたのも無理はない、いつのまにか、彼は、上衣とズボンの最も眼につきやすい箇所へだけ、濃い血しぶきを浴びてゐたのだ。

「乗りますか？……」

腰を掛けられて、顔をあげると、輩のやうな竹笠の下から一人の黄包夫が、探るやうな眼付で、自分

の上衣とジボンを讀めてゐた。李刀達は、何年ぶりか、黄包子といふものを見たやうな氣になつた。かういふ手合は、戦争があると、一旦は鼠のやうに何處かへ姿を晦ますのであるが、すこしあたりが静謐になると、このこ平氣で孔から出て稼業をはじめめる。

「よし、やれ。大至急。——博濟醫院。仁濟大街。右だ。」

彼は蹴込みへ片足を載せた。靴の甲には赤鉛筆でいたづら書きをしたやうな、血の痕跡が残つてゐた。車夫は片手をひろげると、

「痛くはない、先生？——」

と訊ねた。

「俺、大丈夫。むかうには死人が百人も二百人もゐる。早くしろ！」

車は風を切つた。狭い横丁から黄包夫の素足の音と共に、急に閑靜な通りが展開して、その角を曲らうとするとき、一軒の西洋造りのドアを擠して、つかづかとはらはれた西洋婦人が、李刀達の上半身と膝頭へ眼を遣るや否や、

「Aoh! my, my!」

と叫んだ、自分の言葉に蓋をするやうに、片手を口の上へあてがつて、いきなりそこへ立ちすくんでしまつた。

車夫は、病院の敷石の上を、悪鬼のやうな客を乗せて、棕櫚の葉を戦かしながら駆け込んだ。

支 那

がらんとして、ボーイ一人もない受付のガラス窓を、苛立ちながら、指先で敲いてみると、廊下へ葉巻を叩へたハムマーストン氏そっくりな西洋人が顔をあらはした。

「大人——英國人？」

びつくりした李刀達は、階段へ踏みかけた片脚を外づした。

「No, We're Americans!」

「メリケン。——オーライ。」

につこり笑つた李刀達は、唾液のなくなつた口をあけたまま、自分の上衣を捻つて見せ、その上、西の方へ手を揮ふことによつて、沙面の事件を暗示しようとして試みた。

だが、この無言劇も、小銃や大砲の轟きを聞き、更らに市黨部公署からの電話で、救護班の組織中であつた博濟醫院の、米人醫員にとつては、むしろ餘計な反覆に過ぎぬかに思はれた。

西洋人は、大きく頷くと、口中の葉巻の位置を變へた。

「オーライ。すぐさま！」

李刀達は、安心して、勢の上へぞつと手鼻をかんだ。

10

76

……最後の、素裸に剥かれた死骸である。無数の老人の寫眞が、柴南巷の露地で撮られると、夥し

77

い死骸の山がトラックや、病院用自動車や網曳き車に積まれて、黄昏の街をわかれわかれに、方々の病院や個人醫者の診察所などへ運ばれて行つた。

夕霞にぼんやり光をうすめられた街々に、苦力達や労働者救護班の、

「え——ほう、え——ほう……」

といふ掛聲が、遠くの遠くまでつといて、いかにも死んで行つた人間の魂が、どこかほかの世界へでも運び去られる風に響いた。

「博濟醫院は五十六人だね。それから、光華醫院が二十人、廣東公醫院には三十八人……それから！」

高らかに收容人員の數を讀み合はしてゐるのは、黃埔軍官學校から派遣された二人の軍醫である。しまひに、數字を合はしてから、その一人が、

「負傷者の多いのは良いにしても——あのうち幾人生きるかが問題さ。」

と嘆息した。

政府の寫眞班は、軍服をつけた士官達にまじつて、新聞記者をとなりつけながら、店やサイドウオークを犯罪捜査的に撮映して歩いた。

支

「まだある！ まだ濠の中にあるぞ！」

那

兵卒の一人が、サンパン用の金具のついた竿で、こはこはと堀を掻き廻はしながら、かう叫んだ。四五人の兵士達が駆けつける。

「血だ。滑り落ちるなよ！」
 「よし、よし。もつと帯へ絡みつけろ！」
 「おうい、寫眞班、こつちだ！」
 「自動車はどうした？——まだこつちにあるぞ。車でもいい。何だ手押車か！」
 マグネシウムフラッシュ、一輪車をきしませながら近よる裸體の苦力、好奇心に富んだ見物人、
 おいおい人混みで泣き出す遺族の群、竹竿で軍帽や音楽隊の喇叭や小旗や靴や服の山をがりがり掃きあ
 つめながら数人で選りわけてゐる兵卒の群、わづかな數時間で廣東の大通りの一つからがらんだ廢
 墟になつてしまつた店舗のてこぼこなシイルエツト、突然群集を押しつけて来ては歸つてしまふ役
 所のサイド・カアの爆音……さういふ光景の上に、六月二十三日の太陽は、疲れきつた大きい眼のやう
 に閉ぢて行くのである。

沙面側では、ものものしいサーチライトを動かしてゐる軍艦の光に浮び出てゐる、四角い仄暗らい建
 築層の奥で、しきりに電話のベルが鳴つた。この租界は、敵意を孕んで、鳴りを鎮めてゐる。濠一重へ
 だてたむかうには、警戒をゆるめない英國やフランスや印度の兵隊が、殺人の装身具にすつかり身を固
 めて、對岸の悲嘆と當惑と不安とに、無關心に、一人々々頭を動かして番號を叫んだり、一小隊づつ土
 官の號令の下に交替したり、廣東人に嫌はれる蛋家の苦力に彈丸のケースを一輪車で運ばせたり——戦
 争といふものが、當夜も、明朝も、明日の晝も、その翌日も繼續するかのやうな戰闘準備に急がしく見

えた。鐵條網の上には、電燈がともり、強い反射光線のレフレクターが光つてゐた。
 「畜生、あの電燈を消してやりたいな。」
 「利榮號」の前に屯ろしてゐる群集の一人が、沙面に向かつて煙草のきれつばしを投げ棄てた。
 「消そうよ、出来るさ。」
 「電線を截るのか？」
 「二三人が聲に應じた。職工連中らしい。」
 「電燈會社のストライキさ。」
 「一人がきつぱり云つて唾を吐いた。」
 「さうさう、廣東電力のゼネ・ストだ。——」
 「そんなことになつたら。こつちも困るさ。やはり、問題は、彼奴等を支那の土地から驅逐するんだ
 よ。」
 學生らしい影がさう云つた。

「香港ちや、どうしても廣東を兵糧攻めにするといふ噂ぢやないか。」
 「經濟封鎖か——畜生ツ、いまましい野郎どもだな！ 戦争だ！」
 李刀選は、かういふ群集の間を、ピッケットでもやるつもりで、ぶらぶら歩いてゐた。
 あれほど凄惨な場合に直面して、屠殺場に這入つたほどの經驗を通過した彼であつたが、今はゆつた

りと唇に楊枝を咬へてゐた。やつと探してあてた裏町の料理屋で、何の屈託もなく貪り喰つた大血湯や、名前だけいやに麗々しい「鸞肝鳳膽」といふ鶏の臓物や、羊の血と肉を煮つけた肴で、強い蛇酒を二三杯飲んで、晝からの飢ゑをふたげたところなのである。ふよふよした豆腐の肉を齒の間へ運んで行つても、修養の積んだ彼は、人肉を懐ひ出さないほどの専門的な味覺は持つてゐた。彼は、頗る上機嫌になつて、この血腥ぐさい戰場である濠洲を徘徊してゐたのである。

——いかに、一介厨房の奴僕である自分が、孫中山先生の正義觀に感化されて、烈々たる愛國心に驅られたあまり、終に、碧眼紅毛の外交官連を煙に巻き、新興支那の偉大さに奴等の度膽を抜いてやつたばかりでなくその堂々たる態度から他們馬鹿者共に書かずともいい小切手を書かせ、自分の一擧一投足にまでタイピストの速記をわづらはし——あの柘榴色の女猿めが——最後、あのだたんばで、三本の花火で、英支戰爭の口火を切つてやつたか！ しかも、どうだらう？ 肉弾戰の最中に、あの總領事野郎の小切手を、ものの見事に他們の前で引裂いて見せた、捨てた——それが一萬弗！ そんな目腐れ金は、俺の頭にはないんだ。これから、支那は天と地とを反對にして見せるんだ！ 支那の革命こそは、國際的な〇〇の尖端なんだ！ 何が、一萬弗か。それとも、毛唐人、温順しく尻尾を捲いて、香港、九龍、上海、漢口から手を引くか！——

こんな排外思想に醗酵してゐた彼が、むしろ適宜に得意であつたことも認めねばならない。そして、血だらけなズボンのポケットへ手を突刺して、大股に歩いてゐながら、群集の誰彼や、兵卒、巡警、監督の士官などに、半ば不審げに顔を覗き込まれても、かへつて名譽心の強い、廣東人らしい矜負をさへ感じたのであつた。

「俺は李だよ。沙面罷工委員の李刀達さ。今日の事件は俺が口火を切つたんだ！」
「實際、彼は、顔を覗き込む人間の一人々々へさう挨拶してやりたい位なのであつた。」
「——前進呵！」

革命青年！
前進呵！ 強敵當前！ 勿遂巡！
最可恨八十餘年侵略 吞倒！
最可恨廿載侍兵横行！

誰かが暗闇のむかうから、牙えたテノールで唱ふ聲がした。フランスの革命歌の調子である。李刀達は、思はず、ぶるツとした。それは、きつぱりと張りつめた銀の細い糸を、一本づつ順に弾き立てるやうな聲であつた。その聲には、何かしら、日頃、支那の大衆が無意識に求めがいてゐる尖銳的な精神が暗示された。擦つた。尖端の鋭い、觸れば——びんと弾ねかへるやうな劍で、音もなく突刺される時の様な烈しさが、聲の裏には籠もつてゐた。——李刀達は、じつと立ちどまつて、歌に聴き惚れながら、今日の惨劇を思ひ泛べた。少年のめちやくちやに踏み潰された顔を思つた。老人の胸にあいた孔を

思つた、無数の人間の流した血を考へた。数千本の針で眼窩の周囲が刺戟されるやうに、苦しい、悲
痛な涙がひとりてに、湧いて来た。好い歌だ。畜生、泣かせやがる！——

合唱！ 合唱！

歌は、忽ち數人の青年士官達らしい、朗かな聲量の持主によつて、いろいろな樋から清水が送つて
一つの瀧になるやうに強められ、擴大された。齣の終りに、ちよつとポーズがあると、鐵條網からこち
らを覗いてゐる英國兵の一人が、まるで犬の競走を見物でもしてゐるやうな口吻で、

「ゴツデム・チンク！」

と嘲笑つた。

このとき、李刀達は、闇の中に腫を据ゑて、一人の男を凝視してゐた。その男は、さいせんから、駈け
出しの扒手のやうにそちこちと群集の間を縫つて歩るき廻つてゐるのであつたが、別に窃盜の目的があ
るわけでもなさそうなのは、巧みに他人と接觸することを避けてゐる様子でもわかつた、が、目立たぬ
服装をして、靜かに支那靴で歩るきながら、をりをりじつと立停まつては、群集の話を聞いたたり、それ
となく警備の兵士達の方へ近づいて腰を踢めて休んだり、ときには見ぬふりをして李刀達の前を通つた
り、煙草屋、錢莊、雜貨店、米行、麵行……と立ならんだ店舗の方へ姿を消しては、再び忍び足でもと
の場へあらはれて来る、その全體の行動に於て、怪しいと思へば怪しげな節が多かつた。
うす鼠の上下の支那服を着た、瘦せ形の小柄な男で、はつきりしない地柄の烏打を眼深かにかぶつ

て、いつも伏眼に歩るいてゐるのだが、何かしら嗅ぎ出そうとするもののやうに、ときをり立停まつて
は周囲に犬のやうな嗅覺を働らかすところに、李刀達の本能的な猜疑心をそそるに足るほどの不審さが
あつた。

「何だい——彼奴の目的は？」

彼はそつと背後からその男に近づいて行つた。誰かが、むかうの方で、懐中電氣をバツと照らした。
しかし、電光は、男の顔に反射する前に、ほかの方へ外れてしまひ、背後に人のけはひを感じたのか、
彼はすたすたと店舗の方へ十分にコントロールした速足で歩み去つた。

「遁げる——こりや、可怪しい。」

同時に、李刀達には、どこかしらこの男の全輪廓に見覚えのあるやうな氣がしてならなかつた。人間
の後ろ姿といふものは、ときに、正面を向き合つてゐる場合よりも、より多くその特長が出るものだ。

彼は、ひとつこの男のあとを尾けてやらうと思つた。——この偶然な好奇心から、妙な追跡が李とそ
の男の間にはじまつた。

一定の目標を持つと、李刀達の神経はかなり機やかな執着力を發揮するのである。彼は初夏の夜の
水蒸氣に、むんむん生血の臭ひの立騰る路面を、息塞らしい思ひをしながら、小刻みな歩調で追ひ駆け
た。都合の良いことには、この頃廣東の市街には、人間よりも偉大な宣傳のポスターや壁や柱にぢかに
大書したスローガンが多いので、いざといふ場合には、對手に氣とられずに、びつたり壁や柱へ蝙蝠の

支 やうに身を寄せれば、一時這れの忍術が使へたのである。
鼠色の服は、しばらく急ぎ足になつたが、やがて、ごく自然な疲労の體を装つて、反對にゆつたりした歩調で、西橋からすこし鍵の手に曲がるころまで行つて、何気ない風に立停まると、マツチを擦つて煙草に火をつけた。

「なア——んだ。やはり、何でもなかつたのか——？」

追跡する方では、別にその男に用件があるわけではなし、それに一日の疲労も手傳つてゐるので、や自分の馬鹿々々しい空想を放棄して、早く宿屋へ歸つて寝てしまはうとさへ思つた。人間、鼠色の服を疑つた日には、廣東の人口の半分かたは、何かの間諜であるにちがひない。李刀達も、先方にならつて、マツチを擦つて「紅錫牌」に火をつけた。しかし闇に擦つたマツチのお蔭で、ちよつと視覚が鈍つた矢先に、ひよつと前方をすかして見ると、彼は、思はず、

「しまつた？」

と呟かざるを得なかつた。

鼠服の男は、忽然として横丁の一つへ消えてゐたからである。

「悟つたな！」

李刀達は、煙草を捨てて、「新填地」と呼ばれる、第五區警察署へ抜ける細道を、片側の壁に添つて急いだ。

道が盡きて、Kの字形になつた街角へ出ると、遠くの方にともつた電燈の下を、一瞬間白っぽい肩の動きを見せ、すぐと闇そのものに溶け込んだ鳥打帽を發見した。この邊は、わりに賑やかな通りなのであるが、今日の事件ですつかり怯えてしまつた市民の大部分が戸を固く閉ぢたり、ほかへ逃げ込んだりしたあとなので、ろくに電燈もともつて居らず、街はどこかの舊都の靈廟のやうに荒れてゐた。

「いよいよ怪しいぞ。わざわざここへ来るなら、どうして沙面からまっ直ぐに這入らなかつたのか？」

李刀達は、普通の通行人らしい歩調を装ひながら、その實不規則な速足になつて男に追ひすがらうとした。道は曲がつた。鼠服も、曲つた。その通りは、沙面の西橋から、一直線に北へ趨る狭い横丁なのである。鼠服は、明らかに、追跡者をまかうとして焦心り出したらしい。

「武器——？」

不圖、李刀達は、かういふ素性の知れぬ男が、他人を誘拐して置いて暗闇から突然躍り出すと對手の胸腹へピストルを突つけるのだといふ、上海や廣東の常識を憶ひ出してゐた。そして、心算かに、今日引裂いた小切手を持つてゐたなら彼自身ひとつ面白い芝居が打つたのであつたことに、苦笑を洩らしたのであつた。

對手の方は闇らい街へ狭い横丁へと、選りに選つて嫌がらせをするやうに歩ゆんで行つた。幾度かその姿を見失はうとしては、ぼつくり視線の届く範圍に浮み出る瘦せた白っぽい肩の影を見つけては、釣り込まれて歩るいた。沙基を離れてから、よほど歩るいたらしく、もうその邊は、あまり李刀達にはは

支 つきりしないいくつも横丁の錯綜し合った区域であつた。この邊へ來ると、廣東の市街も緻くちやになつて互に押し合ひへし合つてゐるやうに思はれた。もうろりとした人間の影を、高い城壁のやうに聳えた邸の壁に添うて深い谿底へ怪しい獸を追ひ込むやうに慕つて行く——その泰西探偵物の書き出しのやうな冒險を、李刀達は必要以上にも味はなければならぬのである。不思議な心理から、對手が逃げようとするほど、その人間を捕へて見たくなり、捕へられぬとなるとますますその男の神秘性が加はつて行くのが、かう云つた冒險の特質である。彼もよくこんな小説を讀んだことがある。

「やめよう！ つまらないや。愚劣だ！」

手を放すやうに彼は云つてその男が賑かな十八甫の街路へ飛び込んだのを見成つた。深夜の雲呑屋よりも下らない、平凡な街の通行人を對手にしてしまつたのだ。——ここから自分の酒店まで、もうかなりな距離になつてしまつた。

鼠色の服は、闇らしい横丁から彼れの出て來るのを待ち受けてもしてゐるかのやうに、しばらくハンカチーフで顔を拭きながら電柱の側に佇んでゐたが、李刀達がひよつくりあらはれると、再び挑戦するやうに、彼れの方を振りむいて、またすたすたと歩きはじめた。

「畜生ツ、馬鹿にしてやがる！」

舌打をした李刀達は、はじめて、謎が解けたやうな氣になつた。——彼奴、俺を誘き寄せるのだな！しかし、何の目的で？……

彼は駈け寄ると、いきなりその襟髪を掴まへて、力づくに對手を詰問してやりたい氣持を押へて、やはり魅せられたもののやうに小半丁も蹠いて行つた。と、その男は「富基號」といふ金看板の出でゐる店へ吸ひ込まれるやうに這入つて行くのであつた。李刀達はべツと唾を吐いた。

「へツ、何だ、こりや毛髪屋ぢやないか！」

忍び足に立寄つて、扉の表から内側に注意を集中すると、誰も今新しくそこへ這入つたものの氣勢などはなく、てきてきと麻雀らしい牌を掻き寄せる音がして、

「導死！ 導死！」

と、半ば眠むたげに呟く男の聲が聞えるだけ——李刀達は、すこし、自分の他愛なさにもつとしたのである。

そこで、彼は、もう一度煙草に火をつけると、どこか西關の黄包子の溜りのある方へ戻らうとしたのであつたが、そのとき、横手の押戸になつてゐる扉を開いて、一本の手が伸びると、黒い腕章をつけた方の彼れの腕がしつかと握られた。

「李刀達——待つてゐたよ！」

李刀達は、むしろ快よく招待されたのであつた。

最初、遠路を、「案内」した男は、電燈の下で顔を合はせると、思ひ掛けなくも、沙面中國人組合の書記である張定奎であつた。次に、多少の膂力を用ゐて彼を屋内へ、「案内」した人間は、これも意外といふよりほかはなかつたが、今日「博濟醫院」へ彼を載せて行つた、黄包夫そのものであつた。明かに、二人の案内人の間にはあらかじめ意志の疏通があつて、什景火鍋に入れる小蝦のやうに李刀達を待つてゐたらしいのである。

かうわかつて見ると、李刀達には、非常に不思議の数が殖えたのである。そして、この毛髮賣買所の家屋の構造などもたしかに不思議の一つにちがひなかつた。これらのわからない諸事情を引くるめて、彼は、張定奎にから詰問した。

「君達は……この俺を、どうしようと思ふんだ？」

張定奎は、相手の蒼くなつた顔色には無頓着に、から答へて先頭に立つた。

「どうぞ、こちらへ。」

壁の片側には、廊へ屈くまで、荷造りされた人毛の櫛が積んであつた。乾いた藁草の香りが、ほのかな糝皮を焼いたやうな臭ひを籠めて、夏の物置に特有な、人間の呼吸を窺める程度の熱氣を湛へてゐた。それと反對に板壁に赤く扉だけを塗つてある箇所を押して這入るのかと思ふと、張は、構はずんずん先へ行つて、一見、青いペンキと單なる板の圍ひとしか思はれぬ壁を、片手でどしんと撲つと、何かのトリツクのやうにそこに廻轉式になつたドアが開いて、先づ彼が一步を踏み入れるのであつた。手

には懐中電燈がともされてあつた。冷いやりした空氣が李刀達の體軀を包んだ、黄包夫がぎいと押ししかへすと、ドアはもとのままになつて、三人は完全な暗黒の中に在つた。

「どこへ行くんだね、張定奎？」

「黙つてその梯子を上がんなさい。」

背後から黄包夫が、さほど手荒くはない掌で、彼を押し遣つた。

足の下は石敷らしく、微くさい冷氣が見る見る人達の汗を弾ねた。張定奎は、もう四五尺上方に居つて、足下を電燈で照らしてゐた。恐ろしく急な狭い階段である。恐らくその長さも普通でなからうと思はれるほど、三人は永いこと登りつづけた。やつと張の聲音が終熄して、ごつんと李刀達の片手が、彼れの突兀した肩胛骨へ觸れた刹那、かすかに鈴の音がして、こもつた上層の空氣に、三人の歩行を終つたあとの呼吸が、氣せはしく響くのであつた。

ドアらしい場所のむかうに軽い登音が近づいた。かなり複雑な錠と門とが外されて、三人は帳の垂れてある小房へ通された。そこで、険はしい眼をした肥つた男が、張へ會釋すると、李刀達の前へ出て、

「一應形式だけ——失禮ですが。」

と云つて、ポケットやズボンの上を慣れた手付で軽く觸れた。

「どうぞ、御待兼ねてです。」

検査が済むと、彼は緋の帳を掲げて、一同を招き入れた。そこは、晶るく電燈のついた、贅澤な官廳風な部屋で、多少洋式を加味した嚴重なドアには、外國で見受ける新式の錠がおろしてあつたり、窓には涼しそうなカーテンが垂れてあり、天井からは刻ガラスのシャンデリアが、水晶で拵へた瓔珞のやうにきらびやかに中央の大きい卓の上へ伸びてゐたりした。

部屋のまん中に、鷺のやうに寂然として、一人の老人が餘念なく「字」を書いてゐるだけで、ほかには誰もゐなかつた。

「これが李刀達君でございます。」

から張定奎が紹介すると、まづ白い練絹のやうな長襦を垂れた老人は、年齢に不似合ひなほど鋭いグイヤモンドのやうな瞳をあげて李刀達の顔をじろりと見遣つたが、やがて、又、筆を執りあげて、「紅」といふ字を書き加へた。その一字が終ると、老人の前の白紙には、

「空林微雨落花紅」

といふ一句が出来あがつてゐた。

李刀達は、餘念なく風流事にひたつてゐる仙人のやうなこの老人が、何のためにあんな馬鹿騒ぎをしてまで自分をおびき寄せたものだらうと訝りながら、そつと張定奎の方を顧みると、どうしたことか、張定奎も黄包夫の姿も、床に吞まれたやうに室内にはなかつたのである。

「謝ッ！」

驚いた彼を、老人は象牙の筆軸で、しづかに制した。

「こゝへ掛けなさい。」

筆軸の向いた方向には、黒檀の椅子があつて、その上に緋の小座蒲團が敷せてある。李刀達は、馬鹿馬鹿しさにすつかり立腹してしまつて、老人の麗々しく書いてゐる紙をそのまま引摺んで寸断してしまはうかとさへ憤つてゐた。

景色はむて近よつた彼を、老人はにたりと微笑みながら受けた。

「よく来てくれたね。」

李刀達は、まつ緋になつて腰を掛けた。

「わざわざ御招きして、非常に失禮だとは思つたが——實はな、是非とも貴方に相談したいことがあつてね。何かい、迎ひの者達が、何か無禮なことでもしましたかの、手荒いやうな——？」

「いや、別に——でも、何ですか？　こんな芝居をしなくとも、組合へ出りや、張定奎とはしよつちやう顔を合はせてゐるのだし、あすこへ迎ひをよこせあいぢやないですか！——それに、晝は晝で車夫を使つたりしてさ。私は、もうこんなに運くなつて、他人に監禁同様にされてまで、相談とやらなんか聴きたくはないですよ！」

支 那
老人は、じつと李刀達の血だらけな服装に鋭い視線を沁み込ましてゐた。對手が云ふだけ云つてし

支 まつて自分の言葉に豫期したやうな反應がないので、やゝ失望しかけた——と思はれるほどの間を措いて、老人は、卵白のやうな髯を鷹揚に撫でおろした。

「李刀達さん……今日、貴方は、偉らいことをしてかしましたね！」

「えいッ……？」

「いや、あの花火ぢやよ！」

李刀達は、しばらく無言であつた。事實は、何か云はうにも、唇が顫へて、それを噛みしめるための努力に、彼れの全精神力は傾注されてあつたのだ。やうやうのことで、喘ぎながら訊ねた。

「——それはどういふことですか、大人？」

老人の聲は、非常に透き徹つて、やや女性的でさへあつた。それは、聲が彼れの貴族的に隆起した鼻へかかつたせみかも知れない。彼は永いこと話をつづけた。

「何もかもわかつとるので、秘密は厳守して置ませう。——だが、貴方もまだ若い。いや、お若い。

あの老虎籠ぢやあれはわしも知つとる者が出してゐる店だ。あの婆さん——御覽ぢやつたらう、病身ものらしい婦人——あれは中々はしつこい女でのウ。あれから、急いで貴方の投げ込んだ花火を取り出したのだ、が、どうも二本だけは揉み消しても、あと籠の一本は籠の下で爆發した始末ぢや。——それがために、あんな世界中を警かすやうな大騒動がもちあがつた次第さ。いや、それは、尤もごく間接の動機にはちがひない。貴方の簡易閱報所から御持ちなすつた書類にも明記してあるとほり、外國の資本主

義が侵略した結果、支那が半植民地化されると、何と云ふかの、それ新しい言葉で云ふマルクス辯證法かの、それに従つて、中國には被壓迫民衆の民族的解放運動が起るのは必然ぢや。——したが、李刀達さん、貴方は、二つの爆彈へ、同時に一本のマツチをあてがつた人だよ。と云ふのは、一面、異常な功績者で貴方があると同時に、他の半面には實に不用意きはまる輕卒な仕事をされたとも云はるべきだからだ。まア、御聴きなされ。——貴方は、日頃の貴方の空想癖とても申そうか。つまり、お芝居氣だの。それに騙られて、ああいふことをなすつたが——あの結果どうなると御考へかの？——中國と英國との國際關係がさ、恐らくおわかりになるまい……又、誰しもわかるまい。だが、賢明な李刀達さん、わし共には、かういふことだけはわかつとる。——現在の廣東政府、北京政府と對立しての國民革命政府ぢや、これには現在のところ英國と武力の闘争を開始するだけの資金はない。——よろしいか、苦しい内輪話だが、これは事實だ。しからば、折角貴方が白哲人種に對して、よしむばそれが個人的動機から出たものとしても、ああした復讐手段を講ぜられたにしても、それは謂は水泡ぢや。よろしい、それまでは、それでよろしいとする。——さて、一旦ああ開始された。それは、あすこまで展ろげられてしまつた沙面の慘案を、今度は、英國と中國との政治的な立場から考へて見よう。一方、英國側では貴方も御承知のとほり、沙面の武装は當分解除せぬことだし、次には、その消極的戰爭を挑む傍ら、香港九龍を根據として、激烈に廣東政府を窮地に陥し入れる策を講ずるだらう。趣くとも、わしの調べた範圍では、今日白鷺潭にあつた軍艦には日本の軍艦も二隻あつた筈ぢや、それからアメリカ、これもあの

闘争の目撃者であつた。さういふ列國の環視中に、どんな無法な英國と雖も、砲艦攻撃を敢へてして、廣東を占領するやうな時代錯誤はやるまい。そこで、英國が企むだらう唯一の方法は、廣東政府の形式的否定は無論のこと、更らに實質上その聯俄容共主義の「赤い」政府を潰そうとする事業であるにちがひない。——それは、廣東州の經濟的封鎖、といふことが最も致命的であることも、アスキスやチヤールが良く心得てゐる。全然印度のやうに植民地化してしまはない中國のやうな邦の無産階級運動を壓迫する英國政治家の常套手段がこれだ。

「そこで、今度は、翻へつて、現在の廣東政府を見て置かう。——今日、貴方も見られたとほり、あの示威遊行へ参加した政府の要人の主だつた連中、胡漢民、王精衛、林森、廖仲愷、孫科、甘乃光、伍朝樞、鄒魯、譚平山、ボローヂン……まあさう云つた連中は、大概先頭に立つて出たものだから、あの沙面の鐵火の洗禮は受けなんぢやつた。わしの手元に來とる情報では、現に、この時間、軍政府内では非常會議を召集し、黃埔から蔣介石が一枚加はつて、審議を凝らしとる最中だそうぢや。もうすこし経てば、わしのところへこの會議の結果が報告されて來るだらうが、現在のところは、そこまではわかつて居らぬ。が、どちらにしても、戰爭反對説が有力となることは、現在の左翼と共產派との勝味のある政府としては、さもあるべきことと思はれる。あれだけ國辱を被つて、政府はおめおめ赧い顔をして引退がるのか、と貴方が御云ひなさるだらう。しかし、その御心配は、御無用ぢや。共產派乃至左派の戰術としては、わしの眼に黒い腫があるうちに、きつと、英國にむかつて、香港、廣東の總同盟罷業に出る

だらうことは、この卓を撲つわしの掌よりも外れつこはない。

「そこでぢや、ここに英國側と廣東革命政府とが、期せずしておなじ經濟戰の戰術に出ることになる。これは假定ぢやが、大體間違ではあるまい。——つまり、中國が排英打倒帝國主義の無産國民戰術を採用すると、英國は資本帝國主義の經濟戰術に出るわけぢや。が、ここに問題が起こる。まア、御疲勞の様子ぢやが、これから貴方の出る場面だから、お聞きなされ。英國側では、その攻撃の唯一の口實として、支那側が最初に發砲して來た、當方は正當防衛である——と申すだらう。しかし、わしの知つた範圍では、李刀達さん、貴方があの他愛もない兒戯に類した爆竹を鳴らした以外に、支那側では誰一人沙面を砲撃しようなどと考へたものはなかつたのだ。それは、常識から見ても、あれほどボローヂンやガロン將軍によつて、根強く共產黨軍の訓練を受けてゐる國民軍としては、有り得べき正當法ではないのぢや。誰が、好んでああ武装してゐる敵軍へ、些かの保障もない平地で戰爭を挑む馬鹿があらうか！ わづかに思想カブレのした學生が二三人、それこそ、わしが上海から持つて來て、貴方が寫し下さつた「血心救國」ぢや、あの精神で犠牲になる心算はあつた。しかし、軍隊内には絶對にない。それはわしが斷言する！ だから、中國側では、最初に發砲したのは英國ぢや、と云ふ。英國は中國ぢやと主張する。——かうなると、證據聚めが双方で行はれる。さア、何しろ地球の兩端の二大國が、老大な經濟戰に這入る爲めの準備行爲なのだから詮議立てもかなりやかましからう。重大な搜查ぢやて。これこそ大規模の探偵術が行はれる。が、しかし、李刀達さん、さういふ重要な動機となる發砲事件が、謂はば

他愛もない貴方の花火問題から起つたのだ——とは、いかな國民政府も主張しかねるだらうし、英國側でもへいさうでありましたか、と苦笑して済ませる筈のものでもないのぢや。おわかりかい？」

「わしがさいぜんから云ふ問題といふのは、このことだ。それは、李刀達さん、貴方一身の始末のことに外ならぬやうなものさ。今日明日のところは構はんぢやらうが、いよいよとなると、李刀達さん、貴方の生命は、双方から邪魔になるわけではないか？ 一方英國でもそれを否定するために、又、中國側では、英國の方が下手人であるといふ説を主張するために。——つまり、事件が逼迫して来れば来るほど、李刀達といふ悪戯者の生命は、二つの轉がつて来る大石のまん中に置かれた卵のやうなものになるわけぢや。……どうだの、篤と考へて見なざるがよい！ さて、わしは、永いことお饒舌をして来たが、この序に、もう一言だけ貴方に云つて置きたいことがある。それは、外でもないが、この家の奇妙な構造ぢやよ。ここは、窓もこのとほり、嚴密に閉ざしてあるが、特別な装置を施して、格別この暑さに熱氣も籠り居らぬ。もう一つの部屋がむかうの方にあるが、それは、こことは違つて、或る會社の重役會議を行ふ室になつてゐて、完全にこの部屋から隔離されてゐるのぢや。——で、この部屋には、貴方が御氣づきかどうか知らぬが、わしが釘を一つ押すと、それその通り、壁の中から四挺のピストルが出るやうな二重の壁に圍まれて居る。御覽なさい、その額の中から一挺、こちらは電氣釘らしいところ。銃孔になつとる。それから、窓の下に一挺あらう、あれは、決して人間があの下に居るわけではない。機械仕掛——いや、むしろ電氣仕掛と云つた方がよろしからう。それで、もう一つは、貴方の眞後

ろぢや。これは皆わしの命令に従ふ思實な武器で、もし貴方が、すこしなりと悪戯心を御出しになれば、わしの命令で四挺のうちのとれなりと自由に貴方の體軀を狙ふやうに出来て居る。わしの命令といふのは、小さな四の釘にしか過ぎんが、その釘の後ろには、強力な電流があることだけは御承知下さい。——で、な、この部屋の構造がおわかりとあれば、もう一つわしに云ふことがある。それは外でもないが、貴方の生命が買ひたいのだ。値段は、記名して電話で打合はしてある空手形の一萬弗ぢやないよ。は、は、は、ここに纏まつた香港銀行の紙幣で五百ポンドある。これが貴方の生命代ぢや。と云つて、わしは別に貴方の生命を奪つて、生贖を薬屋に賣るのぢやない。陰莖を強精劑としてひさくわけでもない。當分の間、この廣東を運げ出して買ひたいのだ。しかも、立退先きはちやんと御世話して進ぜる。それは香港へ行くことぢや。香港も唯漫然と行くのではない——香港市内キング・エドワード・ホテルに棲んでゐるわしの親友のもとへ行つて、然るべき仕事に就くのだ。その仕事は、親友の王先生に云ひつかるとほりをやればよろしい。至極貴方の性分に叶ひそうな仕事だ。王——王先生は、謂はばわしの片腕ともいふべき人での、革命のためには随分功勞のある仁ぢや。生命を賣りますか——買はして貰へれば、ここに香港行の輪船の切符と、紹介状と、紙幣で五百ポンド封入してある。輪船は、恐らくこの便が最後かも知れんて、そのうちに香港へのボイコットが始まらうも計られぬでな。——三等船室。なるべくこの際、目立たぬやうに旅立つがよろしかろ。……どうぢや、わしはこの上お饒舌はしたうない。ボーイ、茶ぢや！」

云ひ終つて老人は、緋帳の間から龍井を運んで来る肥つた男へ、鋭どい一睨を與へると、枯れた手でちよつと白麻の袖口を扱いて、再び石硯へ香りの高い墨を滑らせた。

勇敢な、新興支那の冒險家として、コック李刀達が、この場合成し得た最善のことは、味を佳良にするためにわざとあらゆる方法で惨虐な屠殺を行はれる豚のやうに、必死の勢ひで、悲鳴をあげるだけのことであつた。その悲鳴は、道かに蕭然としたこの老人の前では、深かい嘆息のかたちを執る以外にはなかつたのである。

汽船は阿片臭かつた。

廣東、大新公司前の碼頭から香港まで、近海六時間の航路を、黙々として眠りこけて行く苦力の姿が現實よりすこし調子を低くめた李刀達の貧乏たらしい變装であつた。その三時間目にやつと睡を十分の一ほど開いて、彼は暮れかかる船内の雑沓から、一人の特定の人物を發見しようとして試みた。その人物は李刀達と殆ど同じ程度の貧窮と粗食と失職とを表現した労働者にはちがひなかつたが、世界萬國に共通した労働者の大きい手だけを持ち合はさぬ、やや變装術の下手な人間であつた。乗り込んだ最初から、李刀達は、この白い手の労働者の存在を意識した。無制限に乗客を詰め込むカルゴウ・デツキの常として、出帆まぎには立錐の餘地のないほど混み合つてゐるのであるが、次第に船足が速くなると、ど

うにか船客達はめいめいの座席だけは擴大して行くのが、この船の特長である。そんなわけで、室の右隅の、積荷の箱にもたれてゐた李刀達が、だんだん人いきれに眠りを催して来て、自分の膝の伸びる範圍まで場所をはだけて行くと同時に、左隅の絹絲の箱に凭りかかつてゐたこの人物も、やはり同じやうな行爲で睡眠状態に陥つて行くらしかつたのである。二人の間には、壁に沿うて、人いきれの發散者である、無慮三十人からの雑多な客がまつて居つたが、不思議と、李刀達には、この労働者らしくない労働者しか眼につかなかつた。それは何故であるかといふに——右隅と左隅とに、同じやうに人目を避けながら着座した二人は、必ず同時に千鈞の重さを帯びた眼を開いて、お互を見遣つてゐたからである。つまり、二人とも睡眠を装うてゐたのである。それが、二度目ほどまでは、誰しもにあり得る暗合とも云へるのであるが、三四度と度重なるにつれて、そこに心理的交渉が生じる次第であつて、——その心理的交渉から反射する、合理性と不合理性との區別に對する判斷が各自の頭に萌すのは、きはめて自然な話である。李刀達は、梧州所在の農民や、廣東市内外の工人のどんなに零落したサムブルを持つて來ても、決してその男よりも、白い光澤のある手を發見することも出来ないのを知つてゐたし、それから、貧窮と粗食とに刻まれた労働者の額と頬と眼窩とには、左隅の鞞笠に身を扮した人物のやうな、擦みのない肉附と、黒耀石のやうな、腫は絶無だつたのである。

「スパイだな！」
これは李刀達の直感であつた。

次には、

「どつちのスパイかな？」

といふ疑問は、當然の歸結であつた。それは、英國側にも、支那側にも、自分を附け狙ふ可能性のあることが、昨夜の考へによつて立證されたあとで、もう一つ、老人の方からもスパイが派遣され得るといふ可能性も積み加へられた現在の彼としては、尤ものことである。

今、三時間後に、眼を細めて、燭力の弱い電燈の下で、左隅へちらりと一瞥を與へた李刀達は、對手もやはり右隅へ同じやうな視線を投げてゐることに氣づく、衝動的に立ちあがつた李刀達は寢呆けた眼を擦りながら、大きい伸びを一つした。

やつと百八十人ほど乗り込める收容力を持つたカルゴオ・デツキに、かなりの荷役をした上で、二百人以上の人間を詰め込んだ室内で、わづかに多少の空間を残してあるのは、奥の右隅に設けられた料理場の前だけである。ここは、どんなに手足を四つに擴げて眠りたい人間でも、絶えず燃やしてある炭火のために、暑くて、逆も寄りつくわけには行かないといふ特點を備へてゐた。そこへ、李刀達は、人間の頭だけは踏むまいとして近づいた。

この荷物代用として香港まで運搬されるお客様の愛用する三等船室は、民國創始以來の斷髮令を無視した、辮髮の男子や、長髮の女を満載してゐることによつても、廣東市街や香港の大通りでは見受けられない、別な國境線内にあるのである。さういふ女達は、乳呑兒を抱いて、鱈のやうな口を開けながら

大事な履物を大事な神棚のやうに藏ひ込んで眠つてゐる。さういふ男達は、素裸な上半身に油汗をかきながら、蜜柑の皮と唾液と紙屑の中に依のやうにころがらつてゐる。これらの民國革命を知らない群集はいつも、大擧して廣東や香港や上海へ陸續と上陸するのであるが、大都會は、不思議な吸收力をもつて、彼等を、砂へ撒いた水のやうにどこかへ散らしてしまつて、決して目立たせるやうなことはしない。その唯一の原因は、かういふ労働者男女は、何處へ行つても一定の住宅などといふものを持たずに、最も民國革命の目につかぬ裏町を徘徊して歩くことに歸因するのである。この、何時も大都會の舗道にごろ寝をする群集が、二百個からの銅片を拂つて、比較的抵抗力の渺い板床の上へ寝るのである！彼等は、出来るだけ完全に近い睡眠を執るために、都會の競馬馬でさへ享樂しない空間の獨占の本能を發揮するわけである。それぞれの寢藥と獨房とをあてがはれる競馬馬には既うの昔にさういふ原始的な動物的な本能が退化してゐるのである。……李刀達はやつとの思ひで、コック場へ漕ぎつけた。大概の客が欲しいだけ食つて、出せない分の銅片はちやんと腹掛やズボンへ藏ひ込んでしまつたあとなので、料理場は、頗る閑散であつた。コックと二人の素裸なボーイとは、廣東人の矜負として白い飯を、客の方へ見せつけながら、まん中の二枚の皿を睨みつけて、旺んに掻き込んでゐる最中だつた。

ちやかちやかと小錢を鳴らすことによつて、コックは忽ち食料品の商人となつて立ちあがり、箆から三疋の赤蛙を掴み出すと、この兩棲動物の飛躍を試みる前に、箆の縁で彼等の神經中樞を撲滅してしまふのである。次に、三個の蛙の屍體が圓るいまん中の碗のやうに磨り減つた臺の上に陳列されて、手斧

ほどの圓るみを帯びた庖丁で、すぶんすぶんとかうべをはねられるのである。少量の吐瀉物が内臓から食み出る前に、コツクの拇指と人さし指とは、ゴム手套を脱ぐやうに、蛙の皮を剥いてゐる。身だけになつた蛙は、まだ盤臺の上で泳ぐやうな恰好をして生きてゐる。三疋の蛙が、頭と皮膚を失つて、何處かへ泳ぎ着かうと焦心つてゐるとき、再び大刀隊の使ひそるな庖丁が器用に使驅されて、内臓を全部切開し、脚から踵を切斷すると、珠江の水より濁つた水の中でざつと洗ひ立てられ、じわじわと油の中で焦げて行くのである。

食事が終ると、李刀達は、反對のデッキへ出ようとして、ここでも亦異常な注意を拂つて、他人の頭から自分の脚を除けて、鐵柵をまうけた二等船室の境目まで漕ぎつけた。鐵柵のむかうには、ライフルを抱いた巡警が、しきりにスタンダード石油會社の石油箱の上で居眠りをしてゐる。どうして三等船室にだけ動物園よりも巖丈な鐵柵をまうけ、鐵鎖をその上に絡らみつける習慣になつてゐるかといふことは、支那の長い間の外國資本主義による搾取、半植民地化に對する民衆の自然發生的な叛逆方法としての海賊歴史との關係のあることであるから、ここでは省略するとする。が、鐵柵は、全然それがないよりは、或る種の來客にとつては便宜である。何となれば、彼はそこから、獅子や豹が園丁の持つて來る肉の香を嗅ぐやうに、より清潔な、二等一等客の呼吸する空氣だけは吸へたからである。

李刀達は、煙草に火をつけて、船會社のためにベルトを付け、鐵砲に實弾を罩めて居眠りをしなければならぬ警官の横顔を、ややしばらく觀察の對境に置いた。が、ぎらぎら着剣をした銃を肩にして、銀

行を守護してゐる巡警達を見慣れてゐる彼には眼の前の警官にさほど興味を感じるわけでもなかつた。この刹那、彼れの最も興味を感じてゐたものは、この鐵柵のわきに凭りかかることによつて、直立してゐることが出來たといふことだ。直立の状態にあれば、自然と室内の大部分の現象が視野のうちに收められ、渺くとも、横眼で、今しも、彼につづいて、鶏肉か何かを料らせてゐる白い手の労働者の一舉一動がよくわかつたといふ特點を持つたのである。

スタンダード石油會社の石油箱は、だんだん熟眠状態に侵入して行く巡警の上半身の傾斜を支へきれなくて、デッキと或る程度までの角度を描くや、今にも、石油以上の重量を帯びた荷物を投げ出すやうとするらしく見えたのであつたが、人間の叡智の働きは、こんな場合にも無意識的にその存在を主張して止まぬのである。船の動揺と、身體の垂下状態と、箱の一隅の急角度を造らうとする傾向との、三つの自然現象を、巡警は、巧みにライフルの銃身を擱んでゐることによつて、都合よくバランスを取つてゐたのである。この平和な巡警は、鐵砲といふものの用途を、たしかに發明者以上に考案したのであつた。

巡警のからいふ愉快そな假睡状態を、現實の三等デッキに呼び返へしたのは、まん中の荷物の山に隠れてふわんたんをやつてゐる一群の賭博打ちの騒々しい口争ひであつた。しかし、それも一銭か二銭の遣取りで鬼がついたらしく、やつと治まつてしまふ、と李刀達の存在には目もくれずに、彼はもう一度ライフルの冷や冷やした銃身へ手を置き變へて、以前のポーズに歸へつた。

「暑いぢやありませんか？」

李刀達は、飯を済まして、意味ありげに鐵欄から空気を吸ひに来た、白い手の労働者を待つてゐたのであつた。勿論、その男は、型の如く煙草の火を借りに來たのであつたし、六時間の航海は獨り者の旅には、お互に無聊であつたのだ。

「全くやりきれません。」

すべて、支那中で、どんなスパイでも、相互を紹介し合ふ場合の會話は、かういふ緒からはじまることは、人間の發明した支那語の形式から當然さうなるべきであつた。

「あすこの阿片患者にはやりきれませんよ。——私は妙な性質でしてね、あの臭ひだけは堪らないんです。」

一向に労働者らしくない口吻で、その男は述懐した。

「阿片」と聞いて、巡警がハツと眼をあけたが、次の李刀達の言葉によつて、もう一度安堵したかの風で、銃身を受撫した。

「廢東はともかくも、香港へ近くなると、なかなか盛んなやうですな。」

「——香港は始めてですかね？」

「いや、これで二度目です。この前は船のコックとして行きましたが、素通りも同然でしたよ。」

李刀達は、わざと自分の手をひろげて、相手の前へ機やかな指を示した。

「——さう、さう、貴方はコックの方ですか？ 私には、これで茶館の手代をやつてゐたもんですが、組合の方からちよつとへまをやつたので除名されてね。今では、何でも手當り次第な労働に従事してゐるんですが、何しろ今度の騒ぎでせう——組合に這入つてゐない労働者はかうなると弱いもんです。てんで働き口がなくなるんですからね。貴方は沙面の騒ぎを御存知ですか？」

李刀達は、内心相手の貧弱な「茶館」説をせうら笑ひながら、すつかり暮れ落ちた沿岸の方を舷窓から覗き込む振を装うた。

「おい、君は誰か？」

これは、舷窓に區切られた闇の色に失望したらしい彼が、身を引きな放つた最低音の質問であつた。

「俺よりも、君から右へ四人目に眠つてる小僧に氣をつけろ！」

相手の答へは、鋭い低聲であつた。

「もうそろ／＼着く頃ですがね。」

李刀達は大聲になつて、自分から四人目の男といふのをじろりと眺めた。

そこには、猫のやうに丸くなつて、曾て李刀達が一萬弗の小切手を見せびらかした、料理屋のボーイが熟睡した風を見せてゐた。

亞州酒店の三階の廣間には、西洋の芝居の應接間へ出て来るやうなソファや椅子が、洗ひ立ての白布に覆はれて、教會の處女のやうにならんでゐた。

それら來客用の家具とちがつて、室の一隅には、西と南に開いた窓の中間に、一脚の廻轉椅子が置かれてあつた。古ぼけた、生地そのまゝの、剝製の鸚鵡のやうに禿げた椅子である。入口をはいつてすぐ眼につく、ま向きのレニンの像と、この禿げちよろけた椅子とは、どこかしら共通するところがあつた。これは、革命同志ニコライ・スミルノフの廻轉椅子である。

めつたに外出することのないスミルノフは、毎日この椅子へかけて、非常に大きいパイプから煙草ばかり喫つてゐた。——だが、この一脚の廻轉椅子は、現在の廣東と將來の支那革命に、わりに重大な役割をはたすやうな時機に、角度に、廻轉してゐたのである。

それにとつかと掛けてゐるスミルノフのズボンの臀部は、はげしい椅子のブラツシュとの接觸の度合に應じて、今はどちらがズボンか椅子であるか、ちよつと判断しにくいほどに双方ともに、悪る光りに光つて來てゐた。と、いふことは直ちに、次の事實を證據立てるのである。——即ち、この椅子の表面と、それを摩擦するズボンの一部分とは、かなり長い間の接觸を續けて來たといふことである。もうすこし歴史的に説明すれば、ミハエル・マルコヴィツチ・ポローヂンが、孫中山から頼まれて、廣東政

府の最高政治顧問として、この亞州酒店の三階を全部借り切つて以來、今からざつと二年前から、スミルノフはこの特定な椅子を愛用しはじめたのである。スミルノフとポローヂンとの間柄——それはごく簡単に云つてしまへば、同志といふ一語で掩はれた。どちらにせよ、この廻轉椅子にも、ニコライ・スミルノフにも、どこか普通とちがつて、狂氣ひじみたところがあるには相違なかつた。

ニコライ・エフ・スミルノフは、有史以前の恐龍類の一種である、角の三本生えたトリセラトプスといふ巨獸を聯想させるロシア人である。兩の眉毛が尖がつて眼の上へ飛び出してゐて、やゝだつびろい鼻の下、ピンと撥ねあげた口髭とともに、異様な赤い角を三本突き出してゐるやうに思はれたのみならず、鬚の多い體軀に、胸が際立つて長かつたからである。勿論、その動作も、體量に従つて鋭敏な方ではなかつた、椅子は三度修繕され、ズボンは二着も變つてゐるが、この兩者の間には依然として同じ廻轉行動が伴にされて來た。

スミルノフといふ名前は、電氣技師あがりの現在のロシア共產黨中央委員の一人にもあるが、廻轉椅子のスミルノフは自分でもそれが己れの本名であるかどうかさへはつきりしない、漠然としたニコライエフ・スミルノフなのである。

曾ての昔、イワン・イワノウイツチ・ノヴオルスキーといふ名を持つてゐたこともあるし、モロトフといふ名で通つたこともあり、ウリツキー、ペトロフ、クララー、ヴオロンスキー、その他半打以上の他人の旅行免狀で半生以上を暮らして來た彼にとつては、或る時冗談らしくポローヂンがつけてくれた

「ニコライ・エフ・スミルノフ」といふ姓名が、どうやらこの上動かない名前らしく思はれたので、笑つて採用したまゝに過ぎない。スミルノフが、ポローチンに「拾はれ」たのは彼が「ビー・デー・クラーク」と名乗つてゐた時分であつた。

それは、北アメリカ、イリノエズ州シカゴ市に於てであつた。

「ビー・デー・クラーク。」

さう英語で名乗ると、夜学校の受付は噴き出した。

「本名は？ クラークといふ柄でもないぢやありませんか！」

「……でも、工場ぢやそれで通つてゐるですよ。」

「ははア、クラークさん。で、御職業は？」

ポローチンの経営している移民夜学校へ通ひ出した當時のスミルノフは、シカゴ市西マディソン街の大きな硝子工場で砂とソーダと石炭の、嘘のやうな混交物から、鏡やショー・ウインドオになるガラスを、肺の力で吹きあげて生活してゐた。

「わつしや、あのスパイのガボン奴に騙された組でしてね、ヴァシリエウスキーの島で市街戦をおつはじめた一人でさア、あの時は、モロトフで通つてゐましたよ。——一月九日さ、糞いまいましい九日さ！」

あとで、このガラス職工が、先生のポローチンへかう打明けたので、あれはどうなつた、あの男は殺られたか——と話し合つて見ると、ポローチンがリガでやつたことを、スミルノフは當時のベテルブル

グでやつてゐたことが判明して、この師弟の關係は、ずうつとあとまで續いた。たゞ、ポローチンとスミルノフのちがつた點は、前者はリガのバルティツク車輛工場やクヰネツホーフの工場などの委員會を指導してゐたに反して、當時のモロトフは自然發生的な反逆労働者に過ぎなかつたことである。この生徒は、先生よりも三つ年齢が多かつた。

革命に従事してゐるロシア人にとつて、シカゴのガラス工場の與へた影響などといふものは、蚤のあつたほどにも關係のないものにはちがひないが、スミルノフの壯年期に通過したこの經驗にたつた一つの尊い抵抗力が養はれた。それは熱暑に堪へるといふ修練である。だから、八四・〇五度といふやうな暑さに、デルタ地方の蒸風呂のやうな濕氣を加へて、うちやけた皮膚に、頭腦に、家屋に、兵舎に、鋪道に、集會場に、すべての存在が腐つて蒸し爛らされてしまひそんな廣東の氣候に、ガロン將軍の如きは一つと堪りもなく逃げ出してしまふのに、スミルノフだけは、平氣で夏冬ぶつ通しのサツク・コートを着てじつと廻轉椅子の上で煙草を燻らしてゐることが出来たのである。

シカゴで別れた師弟は、もう一度ロンドンで出會ひ、更らにレニングラードでいつしよになり、現在は支那まで同道して來ることになつた。そして、この十七八年間の歲月はポローチンをしてますますポローチンならしめ、スミルノフをしてスミルノフらしい型に押遣つてしまつた。

支 那
スミルノフの體軀で、一番發達した部分は何れの眼であつた。普通の度の弱い望遠鏡ぐらゐの視力を、その一双の碧く澄んだ瞳は、優に誇り得たのである。彼は、この特定な場所に据ゑられた椅子から、

廣東市に起るいろいろな現象を観察した。その観察の方法が又、いかにもスミルノフらしいのである。つまり、彼れの観察の感覺的基準になつてゐるものはカール・マルクス以來の儼然とした階級觀念であつた。

女の子がラツケツトを持つて通る。そのすぐ手前に「革命尙未成功、我同志仍須努力」と支那字で書いた電柱がある。支那語はわからずとも、彼には、それが革命のモットオであることが知れてゐる。——ブルジョア！——と、彼はそのラツケツトを片づけてしまふのである。學生が本を持つて行く。聖書でもない、教科書でもない、この教會では——見慣れた「三民主義」の解説である。——學生運動！——と、彼の記憶の底に、その本を疊み込んでしまふ。すべて、彼れの視線の範圍にはいるものは、かういふ階級闘争の見地からだけ、その最も特長のある具體的な形態だけが抽象されるのである。

だから、ポローチンのやうな人間でも、スミルノフにとつては、その膝頭のすこしだけだつたズボンと、彼れの口髭に隠れた、ものを云ふときすこし捻れかけんになる唇と、この二つだけが残されてゐるのである。同じことだが、支那人にも適用される。ときどきこの事務所へやつて来る、軍官學校の校長の蔣介石は、その軍帽の徽章と、瘦せた喉首で記憶された。瘦せた喉首には、屈伸性があつた。汪精衛は、彼れの眼玉と、支那語を發音するときの滑かな餘韻によつて、いやむしろ、その時の口腔にある舌の地位によつて記憶された。

かういふ觀察の方法は、絶対に正確な判断を築きあげる上の重要な要素となつたかどろかは、誰によ

つても科學的なテストをほどこされてゐないのであつたが、少くともそれは、多數の人間のあひだに居つて、群集といふものの複雑な構成要素を、極度まで單純化し、階級化して見ることに、かなり役立つたのである。さういふわけで、一つの事件が、またたく間に眼の前で起つて、澤山の人間が蠅のやうにその後左右にむらがり立つたとしても、一と眼で、スミルノフには、それが、不穩な事件であるか敵か味方か、プロレタリアートかブルジョアかが即座に決定出來たのである。——一口で云つてしまへば、彼れの眼は、暴動に慣れた眼であつた。

ニコライ・スミルノフは、六月二十三日に廻轉椅子を西南の方へ向けて、熱心に煙草をふかしてゐた。その日はデモンストレーションがあるので、事務所には彼一人だけしかる合はさなかつたが、行列が長堤から沙面にさしかかつて、ほとんど最後の一隊になりかけた頃に、彼は、廻轉椅子を蹴倒しそつた。椅子を放れると、窓から伸びあがつて沙基馬路の方へ碧い眼を睜つた。スミルノフでなくとも、誰しも同じことを行つたであらうほどに、その利那の廣東は、ライフルや機關銃や大砲の音で、一時に爆破しそつに思はれたのであつた。しかし、彼れのその利那の觀點は、普通の人のやうに大砲の煙や、その大砲の所在地にあつたのではない。——白鷺潭に泛んでゐる軍艦の國旗としきりに打ち出すその大砲の照準がどんな角度に向つてゐるかを、彼は臆めてゐたのだ。それから直ちに彼の視線は大砲の彈丸の命中すべき筈の州城區域に濃がれた。今から、七年前の十一月、ネブ河から軍艦オロラがタレムリンの宮殿を標的として發砲したときには、この日のフランスの輕巡洋艦から發砲されたやうなもので

はなかつた。その時の大砲には實弾が籠つてゐた。今廣東の城内のどこにも、その子供の水弾きのやうに空に向けて打たれる大砲によつて起る火焰も爆破もなかつたのである。

スマイルノフは、一と眼でそれをたしかめると、再び廻轉椅子へのつしと腰をおろして、くろりと一と廻轉しながら、

「威嚇だ！——威嚇だよ！」

と處女の群のやうにならんだ椅子の白い列へ語つて聽かせた。

事件の中心點とも思はれる沙基と沙面とは、あまり注意が拂はれなかつた。何となれば、そこは、市街の屋根の蔭になつてゐるのみならず、ちやうど、事件の起りやうに豫期されてゐた、西橋の邊には質屋の倉庫が邪魔になつて眼の届かないのを知つてゐたから。——この廣東の質屋といふ封建的遺物は城のやうに高く、城のやうな銃眼をそなへた白塗りの墓のやうな建物で専ら濕氣と土匪の襲來を防ぐために都市線の上に聳えてゐるものださうである。そこで、その蔭の光景は、スマイルノフの眉毛を曇るやうな銃火の響だけで、豊富な彼れの豫想力に澤山であつたのである。

「同志スマイルノフ、何か新しいことがあつたかね？」

その晩、稍おそく歸へつて來たポローチンが、やはり同じ廻轉椅子で、就寢前のパイプを脚へてゐた彼れに訊ねたときに彼れは、やはりかう簡單に答へるよりほかはなかつた。

「同志ポローチン、威嚇です。……大砲は威嚇でしたよ！」

しかし、廿四日から五日へかけての窓の外は、さう簡單ではなかつた。

眼に入る限りの市街には、昨日の倍も青天白日旗が掲げられてあつた。明かに、多數市民の血を流した廣東は重苦しい空に訴へて、悲劇の發祥地を示してゐるのであつた。フラツグ・ポストや綱に結ばれた旗の上には、黒いリボンがぶらさがつてゐた。それは悲劇を起こした力に對する挑戦であつた。海外の資本主義に對する無抵抗の戦争であつた、勇敢な喪意の公表であつた。

それと反對に、珠江から河南へかけて、いつも騒々した河港は、監獄の廊下のやうに鎮まりかへつてゐた。そこには連日の苦力の荷役の掛け聲もなかつた。ウインチのからからと鳴る響きもしなかつた。荷船の舷を蟻のやうに歩き廻る仲仕の群も見えなかつた。廣東人の奇妙な頭の働から造られた、凡ゆる怪しげなグロテスクな船は大嵐の一分間前のやうに影を潜めてしまつた。蒸汽の汽笛が鳴るではなく、のろのろした濁流を活氣づける白い煙があがるではなく、ジャンクもサンパンもフラワー・ボートも呑まれたやうに水面から姿を消してゐた。この静けさには、戰術的な何ものかがあつた。それは、ストライキをはじめめる前の、大工場の車輪の運轉の中止に近いものがあつた。

税關の附近へかけての淋しさ！

そのうちに、スマイルノフは一隻の軍艦の河南の突端に廻つて來るのを見受けた。その艦旗は、思はずスマイルノフの拳を握り締めさせるだけの理由を持つてゐた。曾て、何の理由もなしに、彼をハイド・パークで官憲は捕縛したときには、同じ公園のどこかに、この旗が澤山懸へつてゐたではなかつたか。軍

艦は、二十二日に香港總督府で、一九二〇年規定の「義勇兵法令」を動かしたといふ噂から綜合しても陸戦隊を補充して来たにちがひなかつた。約二時間の碇泊時間のうちに、軍艦はあわたたく香港の方へ引返して行つた。最後の船が出発すると、その日一日、廣西の奥から泥砂を運んで来る、うす汚い珠江の水は、流れるままに、何の邪魔立てもなく海へ海へと落ちて行つた。急に、人間がその川床を攪き廻すことをやめてしまつたこの水のほしいままた姿には、崇嚴なものがあつた。

翌る日は、サイレンも、汽笛も、クラックの音も、鎖も響かない廣東の市街は、内地から途方もない海岸へ押出されてもしたやうに、文明の半分を失つて明けた。その午後、やはり英國汽船會社の旗を掲げた二艘の運輸船が、稍臆病らしい船脚で、白鷺潭へ近づくと、沙面の碼頭へ夥しい食糧品を吐き出しはじめた。すると、その向う側を梧州邊から石井を下つて來らしい原始的な象形文字を船側に躍らせた支那船が、舞臺へかかつた俳優のやうな足取で通り抜けようとした。その咄嗟である。黄ろな二疋のブルドックのやうな、英國旗を立てたカツター船が、どこからか水を蹴つて飛んで出て支那船の兩舷へびたりと咬みついてしまつた。カツター船にどんな力があつたのか、仁の良さそふな支那船は、見るまにぐいぐいと沙面の方へ曳摺られて行つて——やがて、質屋の倉庫の蔭に、その橋だけを揺り動かしてゐた。これは、たしかに米か何かを、廣東の平碼頭へ輸送して來た民船にちがひない。誰が、いつ支那人の商品を差押へるまでの宣戰を、英國と支那との間に布告したと云ふのか？ スミルノフは吃驚した。彼は、ガラスを吹くときのやうに頬を膨らまして、ふーツと息を吐いた。息を吐い

た方に、レニンの肖像が彼れの顔を窺き込んでゐた。

同志レニン、これは重大だ！

そして、かう彼れが壁にむかつて報告したと同時に、その開放された戸口から、かすかに煽風器のうなつてゐる次室で、誰かが英語で、

「組織——それ以外に策戦なし！」

と云ふのが聞えた。

聴き覚えのある聲だ。パイプへマツチをあてががつてゐる間、スミルノフの頭には、乾物の爬蟲類を聯想させる塵仲愷の印象的な顔が泛んで來た。

滑稽なことには、この小さな男は、よく大きいポルトフォリオを抱へてゐる癖があつた。

「あゝ、工部長か——？」

その塵仲愷が、暫らくすると、小さい人間の習慣として、急ぎ脚でスミルノフのところへ近づいて來た。

「やア、スミルノフさん、暫らくで！」

「あはア——如何ですか？」

相變らず大きい靴を持つてゐる。

「君、廣東のバイロツト、何か見えますか？」

「あれだ！」

スミルノフは、パイプの彎曲した柄で、先刻の櫛を指さした。

「なんだ、あれは？……ありや、支那船ぢやないか？ けだもの！——やつたな！」

工部部長は、手巾で汗を拭いた。

「いよいよ、經濟封鎖だね。」

これは、戸口の方へ廻轉椅子を向けたスミルノフ。

長いことその窓の方から方々を覗いてゐた客は、乾からびた顔に似合はぬ肉慾的な唇を開いて、

「なるほど、良く見えるね、この窓は！」

と云つて、横手のソーフアへ腰をおろしながら、靴を大事そうに、瘦せこけた膝の上へ立てかけた。

「これから、この廻轉椅子が忙がしくなるかも知れなくて。」

スミルノフは河馬のやうに口を開いて笑つた。

そこへ、片手をポケットへ突込んだポローチンが、にやにやしなからはいつて来た。

「スミルノフ君は、扇風器を使はないのかね？」

かう云つて、彼はスキツチを動かした。中央の圓卓の上で、薄い車輪が風を切りはじめた。ポローチ

ンは、長髪のうしろを風に蔽かれながら、反對の方へ歩み寄つた。彼が椅子へ掛けるとほとんど同時に窓の下の方から聞き慣れない鐘の音がした。

「なんだらう？」

三人は黙つて、その音に耳を傾けた。スミルノフが口を切つた。

「沙面の寺院だらう。」

「ああ、さうだ。英國總領事の回答には、フランス人のバスケエといふ男が、彈丸を九發も浴びて死んだと書いてあつた。それだ。其の葬式でもやつてるにちがひありませんよ。」

熱しやすい廖仲愷は、靴の胸を叩きながら云つた。

「支那側の五十二人に對して、そのムツシユウ・バスケエだけなら——申分なく彼等の口實を奪ひ去つたわけだね。」

「全く。——それに、英國人が四人、フランス人二名、日本人二名の負傷者もあると書いてあつた。負

傷となると、こちらは百十七人からあるのですからな。畜生！」

ポローチンは腕を拱いて、意色の眼をじつと押しこくるやうに瞑ぢた。二人は、無言で、まだ續いて

ゐる寺院の鐘に耳を貸した。

突然、二人の眼の前に、白い服のポローチンが、身長が倍も伸びたやうに突立ちあがつた。

「やらう。——決戦だ！ あらゆる困難を排して！」

「聞いてくれますか、ポローチン氏？」
廖仲愷も立ちあがった。二人の握り合はされた拳の下に、煽風器が小さく廻はつた。
「一應は、北京を通じて交渉する。伍朝樞氏でよろしい。しかし、こちらは、こちら。——廖仲愷さん、しつかと準備して経済戦だ！」

「よろしい、これからすぐ皆な集まります。私も二晩眠つてないんですが、漕ぎつけるまでは、幾晩でも眠らない！」

やがて重そうな鞆を抱へて出て行つた客人は、リフトに乗つたらしく、がちやんと機械の音がして、それがホテルの孔へ吸ひ込まれるとどこか階下に自動車の爆音が、ひっそりした四邊に張りつめた幕を破るやうに響いた。

ほんの偶然な機會からであつたが、パイプに詰まつた煙脂をしたたかに味はつたスミルノフが衝動的に唾を吐かうとして一つの窓から首をさし伸べたときに、彼は、だらりと街路へ垂れた青天白日旗の蔭に、六七間先へスタートした自動車を見受けた。同時に、二人の異様な人物を、街の反対側に發見したのであつた。

その一人は、高價な白麻の支那服を着て、バナマ帽をまぶかにかぶつた首の太い紳士であつた。もう一人は、脂ぎつた臍まですつ裸になつて、サイドウオークをうろろしてゐる、仕事にあふれた自由労働者風の男であつた。これらの社會的には何の關係もなさそうな二人が妙な手眞似で今出て行つた自動

車について暗號めいた通牒を取りかはしてゐたのである。

スミルノフは、ぐつと苦がい唾を呑みこんで、首を引込めた。もう一度、鋪道へ眼を遣つたときには、北と南へ別れたその二人は、かなりの距離を互の歩行の間に残してゐた。

「不思議だな——同志ポローチン、この廣東政府内に、何か暗闘でもあるのですか？」

ポローチンは、手にした雑誌から眼をあげて、質問者を顧みないわけには行かなかつた。

「有り得る、又、有ると思ふが——」

「廖仲愷は、誰かに狙はれてゐるらしいね。」

「廖……黨員でないのに、恐らく、すこし頻繁にこの事務所を訪問し過ぎるのだらう。保定派と黄埔派とは、大部内訌を起こしてゐるそうだよ。それから……例の全然廓清しきれない客軍の犬共も、どこか市内にうろついてゐるそうだからね。何か見たかね？」

「どうも、怪しい二人だつた。電話でさう云つて注意して遣りませう。」

ポローチンは雑誌を捨てて戸口へ歩いて行つた。

「さうだ、それがいいよ。我々は、今彼を失ふことは出来ない。——彼と、あと二人、この三人は孫仙逸の三分の二つに該當するのだ。そのほかに、現在の支那では、指導者はない！」

「あとの二人とは——？」

「同志ニコライ・ミスルノフ、忘れるな、われわれは常に民衆を見てゐることを？——あまりに深く個

人だけを見過ぎると、われわれは骨相學者となるだけに終るだらうよ。」

「でも、蔣介石は？」

「蔣介石が……いや、あの人は、軍人だ！」

から答へたボローヂンは、はいつて来たと同様に、ポケットに片手を突込みながら、利鎌と槌とを組み合せた紋章の下を、のそのそと廊下へ歩を運んだ。

あわたたしい電話が、何處かで、ち、ち——と鳴った。

その晩、長堤の戲院で民衆大會が催された、

霧のやうな季節の雨が、濃く闇の中から忍び降りて来て、熱病患者の呼吸のやうに下界を包んだ。その憂鬱な雨の底には、數百年來、底の底から腐りきつてゐるやうな、珠江のどぶ泥の臭ひが長く尾を曳いた。人間の細胞の間に潜り入つては、肉と皮膚とを潤み爛らしてしまひそらな雨である。戲院のベッキ塗の壁には、拷問に掛けられる男の血のやうなものがたらたらと傳はつて、重い滴になつて群集の額の上に落ちた。温室のやうな水蒸氣と熱に煤だりきつた圓柱は、觸ると溺死人の肌のやうにぬるぬるした。人いきれと濕氣に包まれた電燈は、どれもこれも幻覺のやうな二重三重の暈を着てゐた。演壇の上には、コップとフラスコが、汗をかいた。窒息的な煙草の煙が、扇と人間の動きに攪き亂されたところだけゆらゆらと動いて、激んだ深みでは、人間をマツチ工場のやうに嘔吐した。

群集は、その雨よりも執拗く殺到するのである。六時の開會といふのに、六時十分前までに、二階も三階も、特別花樓も、優等官廳も、ぎつしり詰まつてしまつた。六時には、その上入場者を詰め入れることが出来なくて、巡警と軍人とが表門を守つてゐた。闇の中に、夥しい群集が、内部の隙を狙ひながらわいわい騒ぎ立ててゐた。濁り切つた海の底のやうな場内には、四五人の卒倒者さへ出した。それが表へかつぎ出されるごとに、群集はなだれを打つて、入場しようとする押附めいた。巡警と群集の間に、甲高な口論がはじまる。口の達者でない巡警が敗けると、船底へ關入する水のやうな勢ひで一塊りの人間がものを云はずに場内に飛び込んだ。通廊も壁側も、忽ち人間の顔で埋まつた。

廣東中の人間が、長い間嘔になつてゐて、今夜はじめて口を開いたのである。熱さと發汗を忘れためだけに、彼等は騒がなくてはならなかつた。ごつごつした、調子の高い、荒らい言葉の波濤は、無数の扇や葵扇などによつて、鯉の培養池のやうに引掻き廻された。時刻が過ぎる、彼等は足踏みした。青年は口笛を鳴らした。西洋人流に拍手をするものもあつた。大聲で、空虚なビラだけの下つてゐる舞臺へ、棍棒を投げ込むやうに嘔吐し散らすのが、十も二十も重なり合つて、いまにも暴動が突發しそふに思へた。しかし、それらの喧騒の奥には、血の出るやうな眞剣さが流れてゐた。どうしても開會して貰はねば、憤死してしまひそらな激昂を、彼等はきはめて適當な方法で合理化してゐたのである。對外協會を代表して、役人の林森が司會社として、群集の掛聲に摺み出された。

彼はしばらく、聴衆を睨んで突立つてゐた。

一瞬間の沈黙を挟んで、千人以上の人間と、一人の役人が、空中で相撲を挑み合ふやうに視線と視線とを絡らみ合はせた。同じ林森は二十三日の午後、東較場の同じ群集へむかつて決議案を朗讀した。しかし、その時の林森は、今夜のやうにやつれてはゐなかつた。それから、同じ群集は、今夜のやうに、頭上に火を燃やしてゐはしなかつた。林森は、自分のしよげかへつた氣持をよく知つてゐた。ただ、彼れは、それを群集の前にさらけ出したくないといふ彼れ自身の理由を持つてゐた。自分の聲量と辯舌を知りぬいてゐる當人が、それを知り過ぎてゐるために氣運れのすることはまゝあるのである。彼れには、この大衆の中に、自分を冷靜に批判して見てゐる敵のあることがわかつてゐた。その敵といふのは、現在、彼れと國民革命に従事してゐる味方であるところの共產黨なのである！

『やれ、やれ！』

『やらなきア俺がやるぞ！』

『しつかりしろ！』

明かに、司會者は會に敗けてゐた。彼れはじりじりと、無数の複眼を持つた手を振り足を動かして騒ぎ立てるこの巨大な動物に奈落の底までも曳摺りこまれる勢ひで吸ひ寄せられてゐたのを自覺した。

林森は、絶望的に兩腕で宙を拂つた。

『諸君、兄弟——一分間の脱帽、默禱！』

鈴のやうな叫び聲には、自分自身に對する怒りが籠もつてゐた。誰で突刺されたやうに、滿場は起立した。これだけの人間が、自分の一と聲で、一齊にかうも一致行動を取るのかと思ふと、小氣味よくもあり、恐ろしくもあつた。——林森は、鼻柱からぼたりと汗の流れたのを知つた。そして、完全に一分間の經過を腕時計のセコンドで知ると、自分では默禱も何もしない空虚な時間を、敵の武器を外らすやうに遣り過ごした。

彼は樂な氣持で雄辯を揮ひはじめた。

『……既に、諸君は百餘の各團體を、この悲痛な席場に網羅して居られる。しかし諸君の團體のすべてが、交々代表者を送られて、當夜の大會の趣旨に添はれることは事實上不可能なことでありますところから、甚だ僭越ながら、ここに協會幹部に於きまして豫め代表的な各工會、各團體方面の辯士を選いたしましたして、その範圍で弔意を表したいと思ひます。——そこで、劈頭、鐵道工會の周文和君を御紹介いたします。』

すこし大袈裟な身振りで、彼が手を揮つて舞臺の奥を指さすと、支那式な中庭の書き割りの柱から、額骨の秀でた、眉毛の逞ましい瘠せた男が、菜色の作業服のままこつこつと歩み出て、へこりと頭を聴衆にむかつて下げた。

司會者は、壇の傍の椅子へ卻くと、内側のポケットから骨の繊細な扇を取り出して、ぞろりと開いた。

「諸君、廣東市民諸君！ 中華民國は、正に滅びんとしつつある！ われわれは、今夜のこの溽暑に一堂に會することとなつた。われわれの怒りは、滿堂の熱暑よりも烈々として燃えてゐるのだ。この戲院の壁と窓とは、屋外の霖雨によつて血汗のやうに潤ほつてゐる。これが、石叫び、地動くの比譬でなく何であらう。憎むべき帝國主義者の犠牲となつたわれわれ百六十九名の同胞の血が、涙が、今諸君の頭上に降り濺いでゐるのだ。窓を排して戸外に咽び泣く雨の聲を聴け、これが、われわれの親愛なる兄弟百六十九名の沈痛な涙でなくて何であらう。天もわれらと共に泣く……。」

「簡單、簡單！」一つの聲が、そのたどたどしい修辭の行列を横ぎつた。

「泣くのは過ぎた！ 闘争だ！」もう一つ聲が、鋭い鉄のやうに、あとの瞬間の沈黙に打ち込まれた。

「……この日、われらは何をなすべきか？」

辯士は菱形の顔を赧らめて、突然大きく咽喉を膨らませた。

「實際、何をなすべきか？」隅の方にゐる學生らしい白の背廣が野次つた。辯士は巧みに模倣された自分の聲音を聞いてもう一度顔をまつ赤にした。戲院は總體にとつと笑ひ崩れた。司會者は、苦が顔をして、扇を急激に働かせた。

「そんな拙い演説をやめることだ！」

「異議なし！」

「引込め！ 引込め！」

しかし辯士は、執拗に演壇を守つた。

「諸君、兄弟！ 今夜、私は悲痛な氣持でこの演壇の頭席をけがした者である。私の此處へ立つた目的は、諸君と共に、沙面からあの地獄の手先である軍艦を遂拂ふためだ！ われわれの同胞の血のまだ乾かないうちに、日、英、佛、米の帝國主義を、廣東から——香港から——中華民國から逐拂ふためだ！ この提議を持つて諸君に臨んでゐる私を、諸君はこの演壇からどこへ引摺り降ろそうといふのか！ 私の演説は拙からう！ 私はこの演説をするために工會の事務を取りながら随分考へたのだ。しかし、私、今、その時、廣東市民諸君の一般に萬遍なく行互つたやうな演説をしようと思つたことが非常にまぢがつてゐたことを發見した。諸君は、もうむだなことを云はなくとも、餘計な美辭麗句は使はなくとも、私と同じ發憤の氣持にまで熱しきつてゐるのを私を發見する。これから云はうとすることは、私の言葉でない。諸君の言葉を私が云ふのだ。黙つて聞いてくれ！」

この一聯の言葉で、はじめて滿場は靜かになつた。鐵工會代表は、片手に顔の汗を拂つた。

「この日、われらは何をなすべきか——問題はここである。私は沙面事件を、中華民國對世界資本主義の問題にしたい。私は、沙面事件を、單なる廣東市民の一部と、沙面外國領事館だけの問題には留めたくないのだ。既に、政府では、英國總領事及び北京外交團への報告書を出してゐると聞く。しかし、私は、その報告書を、最後の通牒に書き改めたいのである。諸君、支那は正に滅亡せんとしてつあ

る。孫中山先生、四十ヶ年の建國の苦衷が、今や無慘と外國の砲艦の政策によつて泥土に委せんとしつ
つあるのではないか！ 起て、奮起せよ、中國國民！ あらゆる武器を執つて、われらは外國人を本土
から驅逐しようぢやないか！……その武器の問題だ。われわれは完全に武装されてゐない。われわれの
軍官學校は創立未だ日が浅い、われわれには歐洲大戰によつて磨き立てられた資本主義國の陸海軍の誇
るやうな銳利な武器も軍隊もない！（ノオ、ノオの聲）最も簡便にして、最も手近かな、最もわれわれ
の使ひ慣れた武器を諸君は知つてゐられるか？——ストライキだ！ 經濟闘争だ！ これがわれわれの
最新の武器だ、銳利なる劍だ、磨き上げられた大砲だ、大きい砲弾だ！ すてに香港總督府の非常法令
の發動によつて、敵は廣東に對して食糧と燃料と交通機關の經濟封鎖を斷行してゐる。すてに、われ
われの同胞も、この廿四日午後から香港廣東の海員、ボーイ、アマ、苦力、仲仕等はこれに應戦して罷
業を開始してゐる。諸君よ、このストライキを援助せよ。諸君よ、このストライキを支那中に擴大せ
よ、諸君よこのストライキに世界の弱小民族及び全無産階級の戰線を引き込め！ 香港が廣東に勝つか、
敗けるかの經濟闘争ではない——外國の資本主義的侵略が勝つか、中華民國の無産階級が勝利を占める
かの問題である！ 私に提議する。支那四億の民よ、この際奮ひ起つて、眞に世界の無産階級運動を、
支那の廣東を發祥地として出發せしめよ！

「それには、組織が必要である。われわれの武器を最も有効に使ふための組織が必要である。私は、今
夜各界百有餘の工人、農民、學生及び軍人團體の集合を好機として、廣東港罷業大會の組織建設を提案

する。二十四日からの香港廣東聯合罷業委員會は、その活動の範圍も狭いし、各罷業團體間に聯絡が取
れてゐない怨がある。もつともつと大多數の職業の罷業参加を奨励するとともにここに個々の組合及び
團體がそれらと併合して、一つの策戦の下に動員される一大罷業大會の建設が——最も今日の必要な案
件であり、緊急事である。外國の砲艦を卻ける。帝國主義を打倒する、孫中山先生の建國の大業たる國
民革命を成就する——これは偏へに支那四億の無産大衆の團結力によるものであらねばならない。何に
よつて團結する？ 經濟闘争を通じて！……これが、實に、凄惨なる最後を遂げた五十幾人のわれら
の同胞の死に酬ゆる唯一の弔慰の發表である。

話の後半で聴衆をすつかり凌つた辯士は、悠々と手を振つて降壇した。
拍手。司會者の紹介。續いて飛び出したのは、廣州總商會代表の陳大良といふ紳士であつた。太梓
の眼鏡に眉根を寄せた、唇の肉慾的な男で、俄かに生長した筍のやうに脂肪肥りがしてゐた。彼
は、開口一番、總商會らしい香港と廣東の金融、産業關係を説き、ゼネラル・ストライキを起すこと
の不利な點を擧げて、よろしく國際聯盟や全世界の新聞通信關係への聲明の必要を説き、各國に廣東か
ら、慘案報告の報告委員を送るやうにと希望を述べたのち、これは陳大良一個人の意見である。但し總
商會としては、市民諸君の輿論の向ふところ、或ひは水火を俱にすることを辭せないであらうが
——と附加へた。

この太梓の眼鏡には一向に拍手が擧がらなかつた。又、當人もそれをあらかじめ豫期してゐたやう

に、自分の演説の効果などを考へぬ風で、さつさと無愛想に壇を下つた。

次には女醫を代表して鳳金淑といふ婦人が立つた。

白い洋服に黒の腕章を帯びた彼女は、人間の肉體を検査するための特別な眼鏡のやうな、強度の近眼鏡を掛けて、金鎖の腕時計で縛りつけた方の手を旺んに振り廻はした。粵語とても云ふべきほど、この中年の廣東婦人の話は、朗詠に近い口調であつた。

「打倒帝國主義！」

「收回沙面！」

「不分階級、聯合一氣、共同奮闘！」

などといふ應分の刺戟を香料のやうに振りかけた彼女の詩歌調は、聴衆に金時計の所在を明かに知らせた上で済んだ。

市黨部代表は、要職にありながら、或ひはそのためにか、非道く昂奮した人間が登壇して、さんざん日本と英國の侵略主義を論難して、政府に訓請して一戦を期しても廣東市は悔いなしだらう……とまで挑戦的に出た。

「——現在我國民智已進歩、非三十年前之可比、萬不可取仇外之手段！」

殆ど自動的なアナンサーの役割にしか過ぎない自分を、どうにかして、より以上の重要さにまで押立てようとして、林森が、また一鎖りの訓話を挟んだ頃から、會場の空氣がすこしづつ不穩さを加へて

行つた。

「次は、廣東建築工人研究社の徳元瑞……」

と、紹介しかかるや、左端の壁際に佇んでゐた三四人の學生達が、計畫的に、リレー・シイテムで、一人が聴衆を押しければ他が進み、その人間が前を開くと、あとからもう一人が出るといふ風にして、辯士の登壇するまでに、三人のうちの一人が舞臺へ登つて、何ごとかを司會者と談判しはじめた。

司會者が扇の尖端を強く振ると、その學生はバナマ帽を手に絞りながら、舞臺のずつと前方へ進み出て、聴衆一般にアツビルをしはじた。

「諸君、われわれは、今夜沙面の憎むべき外敵に對する民衆大會を開いてゐるのです。だから、徒らに官選辯士の、あらかじめ下相談をしたやうな演説に憚らぬ私達は、民衆それ自身の聲として、この演壇の即時解散を必要とするのであります。われわれ廣東の民衆は、直接われわれの意見を交換したのである。保守的な政府部内の或る人達だけの意志に束縛された報告と、弔詞と、美辭麗句とに不満な人達は、私と同じやうに、この演壇を諸君のものとすることに賛成して下さい、そして賛成の意志を、諸君の御起立によつて、一般投票の採決方法としたいのであります。——賛成の方は東縛されざる廣東市民の言論の自由を主張して、御起立を願ひます！」

司會者は、まつ赤になつて、その青年に掴みかかった。あとについてゐた二人の學生は、演説者と林森との仲を隔てて腕を井桁のやうに組合はせながら、さんざん嘔鳴り散らした。バナマ帽を絞つた青年

は、高く両手を振り上げた。萬雷のやうな、聴衆の叫びが彼れの舉手に應じた。戲院總體で、不思議に床が盛り上がりでもしたかのやうに殆どすべての聴衆が起立した。

「やれ、やれ！」

「官製司會者を叩き出せ！」

「戲院占領だ！」

「デマゴークを逐拂へ！」

「戦争だ！ 戦争、戦争！」

優等官廳の前列に一團となつてゐた女學生や女事務員達が、金切聲で應接した。その四五名は、申合せたやうに赤い半巾を振つて舞臺の學生達を使喚かした。

「満場一致——演壇公開の議は決定されたものと認めます！」

學生はもう一度バナマ帽を高く差し上げた。林森は、不本意に檻に押籠められた動物のやうに、白い齒を見せて何やら高聲で罵つた。それを振り返つて見た學生は、

「——が、しかし、私達は、徒らに對外協會司宰の當夜の民衆大會を攪亂しに來たのではないのです。そこで、司會者林森先生を尊敬する意志から、私は林森先生に現在の椅子を保留されることを希望いたします。それと同時に、この演壇の自由解放を主張された諸君の意志をも尊重しまして、すべての

これからの決議は司會などといふものを必要とせず、歐米で採用しますレフエレンダムの制度、一般投票の方法を採用したいと思ひます。即ち、あらゆる決議事項に對しては、諸君の御起立を採決の方法とすること。——如何ですか、それに御異議がありませんか？ なければ先づ第一回の採決方法として御起立願ひます。」

聴衆の大部分は、スピツチを切つた紡錘機のやうに、一齊に竝立した。

それを鎮撫するやうに両手を振り降ろした學生は、ぶかぶかと演壇へ昇つて、演説をはじめた。

「私は、國立廣東大學の學生であつて、唐振和と云ひます。しかし、私は、私の大學の校長であるところの鄒魯先生等の發企された孫文主義學會には絶対に反對するものである。この孫文主義學會は、名を革命の祖師孫中山先生に藉りて、その實、國民革命政府の主義に弓を引くところの反動的學閥である。

——私は知つてゐる。現在の廣東には、孫中山先生が民國十一年十一月、ロシアの越飛氏が上海へ來て會見した時、兩國の間に黙諾があつて翌年十一月、ソウイエット政府代表として鮑羅廷氏が廣東政府の最高顧問になつて以來、共產黨の國民黨組織に加入するについて、二つの明確な對立を示すところの理論と運動とが表はされたことを！ その一派は、孫中山先生晩年の依囑であつた聯俄共容主義を弊履の如く捨てて、國民黨運動を、殆ど陳炯明時代にまで逆轉せしめようとする新軍閥運動の化身である。この一派を代表する人に、當夜の司會者である林森先生をはじめ、張繼先生、謝持、戴天仇、鄒魯などの大人がある事を斷乎として茲に曝露する。で、これら國民黨の保守派は、口に孫中山先生を賞めちぎ

りながら、實は孫中山先生を裏切るところの組織の逆轉に従事してゐるのである。更に、この保守的學問及び政治家達に共鳴して、昨年一月、國民黨改組に反對した馮自由、馬君武等の山カンの國民黨同志俱樂部なるものを北京に設け、陰に段祺瑞派の外國資本主義の犬と手を握つてゐる。かういふ反對派の暗流に抗して、私達、青年國民黨員は、陳獨秀、譚平山諸先生の範にならつて、あくまでも飽羅延顧問を擁立するものである。私達は、今日の列國資本主義の侵略によつて無慘な状態に置かれた支那を救ふものは世界最初の無産階級聯邦であるソヴェット・ロシアと聯結して、無産階級の闘争をもつて外敵にあたらなければ、到底その實を擧げることの不可能なるを知つてゐる。諸君は、民國十一年五月中國共產黨第二次大會に於て決議されたる十一條の標榜を忘れはしないだらう。それには、中國の政治經濟の現状、勢に鑑みて、歴史進化の過程に依り、暫らくブルジョア民主主義派と聯絡して、支那に封建制度の殘存物である軍閥を撲滅し、先づ完全なるブルジョア・デモクラシーの獲得をするをもつて現在的一段階とするといふ精神に基いて擧げられた諸項目がある。私達は、その十一條を、極力支持するものである！ 私達は、今回の沙面慘殺事件にまでその十一條の全部を活用せんとするものである。——どうしてそれを活用するか？ 私達は先刻からの諸代表によつて具陳された經濟闘争も、國際的アツピールも、これらに徒らに反對するものではないが、これらの手段は、むしろこの緊急時に於て第一義的な抗爭の方法であると観るものである。先づ私達は、劈頭、明確な支那と列國間の國際關係に基いたところの政治闘争の意義を擧まねばならない。——どういふ風に？ 一言にしてこれを述べば、列

國資本主義の侵略に對する無産階級××の闘争方法として、弱小諸國民の提攜を促がすことであり、直ちに×××××を採用して××の××××政體に抗爭することであり、内には軍閥を打倒し、支那の經濟的自主權を奪還することである。即ち一路黨進、××の實行にあるのみである！ 既にわれわれの絶好の機會が、沙面に於ける暴虐不道なる帝國主義者によつて開鑿された。この楔機を握へずして、われわれは他にどんな日和を俟つつもりであらうか！ 然らば満場の諸君、兄弟姉妹諸君よ、起て！ 起つて直ちに支那無産階級大衆の威力を、彼等の前に示そうではないか！ 彼等に砲彈と機關銃とあらば、われらに組織と團結の力があり、プロレタリアートの烈々たる××××精神がある！ 何を恐れ、何を狐疑して、充實した諸君自身の偉大なる闘争力を發揮することを躊躇するのであるか！ もし諸君のうち、一人でも私と行動を伴にするほど××的闘士があらば、今宵、沙面に向つてわれわれだけの血心救國運動を起こそう。もし諸君のうち、一人でも、私と行動を伴にする人がなかつたとしても、私は敢然と身を挺して、彼等沙面に集喰ふ惡鬼羅刹の輩と闘ふであらう！ 私達は、これだけの意志を諸君の前に標示して、この上言葉の綾を弄ばうとは思はない！ 私達の示威行動は、直ちにこの戲院の門前から、沙基馬路に出發する——私の降壇から、支那の無産階級運動の第一歩が始まる。同志よ、勇敢なる廣東市民諸君よ、われわれは一死をもつて國家の急務に當らう！

唐振和は、次第に昂奮状態にはいつて行く自分の氣持を、一瞬間、何か冷めたものに觸れさせることによつて鎮靜しようとするやうに、フラスコの水を注いで渴ききつた喉音を立てながら呑み乾した。

その間も、この意外な青年闘士は、きはめて客観的な眸で聴衆の動搖を、ガラスの糸底から見廻すことを忘れなかつた。

彼の言説が、頗る突飛な手段で公衆の前に展開されたとすれば、その結末も亦群集の意表に出たものであつた。降壇と共に、彼は自分のパナマ帽へ丸めてしまつて置いた赤い布を颯と群集の前にひろげて、二三度高く打振つた。パナマ帽の謎がはじめて衆人に解けた。

「進め！」

ひらりと舞臺から土間へ飛び降りた彼は、他の學生達にあとを追はれながら目の前に誰一人もないやうに、ぐんぐん聴衆の間を肩で押し分けながら衝き進んだ。

聴衆の大半は、魅せられたやうに、この勇敢な青年のあとを眼で追ひかけた。そのうちの一人が立ち、二人が立はじめると、そこに急激に栓を開かれた水路のやうな紋流かうづまき、押揉まれる泡のやうな個人個人が、重なり合つてどつとそのあとを追ひ驅けるのであつた。

大きい團扇を揮ひながら、劇場の表門では、どよめき落ちて来る群集を煽り立てるやうに指揮してゐる一人の労働者が居つた。

無数の靴音が、礎石の上にとどろいて、朱塗の門柱の前には、幻影の列のやうな白い着物が閃めいた。巡警も軍人も、どこへ影を潜めたか、後光のやうにぼんやり虹を畫いた電燈の下には、陰影つばい、昂奮した顔が、われもわれも遅れてはならぬやうに、息を喘ませて、薄明から闇へ消え去る

のであつた。それから、まるで、潮流に押流されて来る、魚の群が、自分の尾や鱗を動かす間もなく、ひたむきに前方へ浮き漂よつて行くやうにしか見えなかつた。

闇の中で、一發のピストルの音がした。

「前進！ 前進！」

學生唐振和は、汗みづくになりながら、膝頭へ力を罩めて駆けてゐた。彼れの左手には、まつ赤な布が翻へり、右手にはぎらぎらするピストルが翳されてゐた。

橋がある。電柱がある。電燈がきらめく。長い壁のうちに、明るいビルデングが、ぱつと照り返へる。榕樹の重たるく垂れた枝から雨の雫が群集の上に滴る。廣い長堤の通りが、果物のやうな電燈をならべて、彼等の足を反響する。唐振和は、誰か行手に人間の姿が見えると、ピストルを空へ放つた。

ものの五丁ほども駆けたと思ふ頃、突然先方に二臺の自動車が行列を遮ぎつてゐるのが見受けられた。行列は、ちよつと足を停めた。

唐振和は、最後の一發のピストルを珠江の方へ向けて放つた。

警戒しろ。われわれの行列を遮ぎるものは、民衆の敵だぞ！」

ピストルの合圖はさう警告する風であつた。背後から、自動車をみつけた群衆は、異口同音に、わーツといふ鯨波をつくつた。

支 那
しかし、自動車は動かなかつた。



いきなり自動車の横まで突進して来た唐振和は怒った顔をして、
 「退け！ 退け！ 邪魔をするな！」

と、息を喘ませながら呶鳴つた。

その唐振和の鼻先へ、細長い銃身が機械のシャフトのやうに素速く伸びて、武装した一人の軍人が、
 大声で誰何した。

「首謀者は誰か——？」

唐振和は、おめずにピストルを振り翳した。

「私だ！ 貴様達は何だ？」

「貴様か、この不穏な群集を煽動する奴は？ さア、手を擧げろ！」

一人の士官が自動車の中から、白い手套を嵌めた手で、何かを兵卒の一人へ命じた。

「ほかに、この學生と連類の者はないか？ 云はぬと打殺すぞ？」

「俺だ！」

「同志唐振和君の仲間は俺達だ！」

彼の友人達が二三人、唐を庇ふやうにしてヘッド・ライトの前へ進み出た。

「あたしもさうよ！」

一人の女學生がまだ息を喘ませながら、赤い手巾を握りしめた手を出した。

「よし、その首謀者三人を直ちに捕縛しろ！ これらは共産黨員にちがひない！」

自動車の奥からかういふ命令がガラス扉をへだてて傳はつた。

三人の兵卒が、銃で學生達の背骨を刳ぐりながら、聲高に命じた。

「歩めッ！」

群集は、犇々とこの二臺の自動車を取圍んだ。ざわざわと互に問ひ質す低聲から、誰かが一と聲、

「奪還せよ！」

と叫ぶと、彼等は、大風に殿ぐりつけられた茂みのやうに、一様に身をかがめて、自動車目がけて突

進した。この時三發の鐵砲が、長堤の間に、鼓膜を刳ぐるやうな反響を立てた。

「呀ッ！」

何かが、非常な勢ひで群集の包圍の中から飛び揚がつた。二三の人間は、スタートを切つた自動車の

下敷になつて悲鳴を擧げた。

「諸君、前進！ 前進……！」

群集は、最後の一臺の自動車のガラス扉から、唐振和が悲痛な蒼ざめた顔を出して、赤い布を振りな

がらから喉を縊られかけたやうに叫ぶのを聞いた。

「團扇を持つた労働者が叫んだ。」

「諸君、あの自動車を追ひ取けよう！」

暗黒のうちに、暫らく、又、群集の呻吟と聲言とが續いた。

聴衆の半分以上を失つた戲院では、穩健派と目される林森は完全に司會者の權利を回復して、幾度も

コツプの水を呑みながら、數人の辯士を紹介した。

「共産主義幼稚病！」

出る辯士も出る辯士も、悉く唐振和の一群を批評した。最後にこの平和主義的な殘留組は、左のや

うな重要決議案を、林森の音頭の下に可決した。

第一、通電全世界。

第二、諸政府嚴重抗議並組織調査隊。

第三、電致北京政府、速宣佈取消不平等條約。

第四、要求革命政府回沙面。

第五、撤退沙面之外艦。

第六、請革命政府要求撫恤與懲兇。

第七、公祭難者。祭時各戶一律樹白日旗。上書「打倒帝國主義」「國民革命萬歲」標語。

第八、函電全國組織全國對外協會。

第九、請政府下令茶樓劇院停止歌曲。以示哀悼。

第十、公祭死難之時、市民應作更大規模之示威運動。

- 第十一、組演講團。
- 第十二、派員赴各國、聯絡全世界被壓迫民族爲一致之抗爭。
- 第十三、請政府整備海陸軍。
- 第十四、組織學生軍、工人軍、農民軍、以爲外交後盾。

その翌日、沙面の英國總領事館の副領事官邸では三人の支那人の訪問者をひそかに奥まつた室内へ通した。

「唐振和。」

「鄭洪伯。」

「商鎮。」

受附の支那人巡警が、かう傳へると、ハムマーston氏は、朝餐の珈琲を啜つた口元をナブキンで拭ひながら、奥の書齋へ大股に歩いて行つた。

「御早う、副領事閣下！」

唐振和は、疲れた顔を椅子から擧げて一禮した。

ほかの二人の學生も、椅子から體を起こして、ハムマーston氏の白靴を恭しく禮拜した。三人と

も今日はすつかり學生服を脱ぎ捨てて、船から上がったばかりの勞働者らしい身装をしてゐた。

ハムマーston氏は、思ひ切り碧い瞳をぐりぐりと動かして、その一人一人へ、咎めるやうな皮肉な笑ひを浴びせた。しまひに、彼は、斜めな日光が、開かれた窓から、三人の長い影を絨緞の上へ投げてゐるのを珍らしそうに眺めながら、

「頗る上手な仕事だつたな！」

と、鼻の尖端でせせら笑つた。

唐振和は、吃りながら辯解した。

「……御存知でもありませんが、群集は税關前まではたしかに殺到したのです。……ですが、政府の方で早く気がつかうとは毛頭思はなかつたので……あれも、つまりは——私の考では、まだ機が熟してゐないからだと思はれませんでした。……御疑ひでしたら、この二人に御訊ねになつてもよろしいございませうが……群集は、たしかに五百人以上も私のあとへついて参りましたので。……」

戶外からは、すがすがしい熱帯地の果物の日ぼてりのする香が漂つて來て、どこかで饒舌に小鳥の囀る聲がした。

ハムマーston氏は、眼の前に手巾で汗を拭いてゐる三人の青年よりも、果物の方に氣をとられてゐるらしく、ポケットから大型の葉巻を一本取り出すと、大きい動物的な鼻孔をひろげて、肺臓いつばいに朝の空氣を吸ひ込んだ。珠江の方から、朝の靜寂を破つて、若い運動家の心臓の鼓動のやうなモー

支 ター・ボートの音がした。ハムマーストン氏は、白綾テヨツキのポケットから葉巻の口切を取り出した。

那 悠然と煙草の口を切ると、彼は圓卓の上のマッチを擦つて、満足氣に紫の煙を鋭く吐いた。

「——それが、全部かね？ 私は考へるのだが支那の革命運動もよからうが、そのまへに君達青年が恥といふものを知ることだよ。それが肝心だ。解つたかね？ おそらく君達三人は、あの約束の後金を請求しに來たことだらうね？——しかし、グレート・ブリテン、いかほど我が國の政治家が著確してゐたとて、失敗したスパイには後金は打たないよ！ もし強ひて請求するとならば、次ぎの室には一小隊の陸戦隊が居るから、彼等の戦闘力をも打算に入れてから請求したら良からう……」

「これにしかしは無いのだ。君達、失禮ながら、われわれにとつては稍重大な手先となつてくれた君達ではあるが、本來は卑しむべき商人ぢやあないか、——國家を賣る乞食よりも輕蔑すべき賣國奴ではないか！ その失敗した賣國奴が、昨夜の今日、再び何の面目があつて私の前に顔を出したのか？——あの小鳥と、涼しい朝風と、この香りの良いマニラがなかつたなら、君達三人は、ここへ出頭するまへに、私の顔の永遠に見られぬやうな境遇になつて居つたかもしれんよ。考へると、かういふことの失敗は實に卑しいものだ。私の方としても、この上秘密が洩れることはきらひだからね。——だが幸ひに、君達には君達自身の失敗によつて、再び黨へも、廣東へも、通りすがりの車夫にさへも顔向けが出来ないや

うな状態になつてゐる。それが當方の寛大さを許す唯一つの原因だよ！ 解つたかね？——解つたら、その川に君達の船があるうちに退散したらどうか？ それとも、おつと待つた唐振和君、そのポケットへやたら片手を突つ込みたがる習慣を君は持つてゐるね。それは止めた方がいいだらう——見られる通り、君達の今這入つて來た入口には、忠實な、君達スパイよりも忠實な、支那人の巡警君がピストルを用意してこの部屋を警戒してゐるのだよ！ すべては、最後の幕になると、ピストル——といふことは、英國の芝居でも、支那の新しい芝居でも、結局同じさ。

唐振和は、額の筋をふくらまして、自分の草履穿きの足下を瞷めた。ほかの二人も、手にしたきたたらしい鳥打をぎゆつと握りしめながら、緒らんだ眼元に非常な力を籠めて副領事を下から見上げた。
「……金は殆んどありません……どうすればいいんですか？ このまま、私共三人は、この官邸の支障で自殺でもするのですか？……大人、どうぞさう云はないで、もう一度どこか別な場所へ私達を使つて下さい！ 全然私達が、かういふ事情のもとにあるといふことは、誰しも知つてはゐないと思ひます！」

支 ハムマーストン氏は揶ぐられた時のやうに鼻先で嗤つた。その鼻孔からは機關車の停泊した時のやうな煙が流れ出る。

那 「蟲のいい話だ！——あの五百弗を、お前がたは、この泥溝のやうな珠江へでも投り込んだといふのか！ われわれ英國人は正面から反對する革命黨はさほど苦にならない。しかし、自分で提案を賣りに

来て、その前金をせしめた上、その失敗の代金まで拂ふほど慈善家ではないよ！ 去れ！——去れと云つたら、即刻ここを去れ！」

いつの間にか、ハムマーston氏の燻らしてゐた葉巻が、掌に隠れるほどの小型なピストルに代つてゐた。

かうして、三人のスパイは、前後をピストルに護衛されながら、すごすごと副領事官邸を立ち去らねばならなかつた。

彼等の去つたあとに副領事ハムマーston氏は、かう呟きながら、葉巻の葉の交つた唾を玄關先へ吐き捨てた。

「チンクの民衆運動も、これあ中々馬鹿にはならない。」

しばらくすると、印度人の武装した巡警が、一人の支那歌劇へ出る俳優のやうな老人を中へ挟んで、ハムマーston氏に面會を求めてゐるのだと云つて来た。

老人は、雲を拂ふ仙人のやうに、黒い印度人達の腕から、麻の袖を振り拂ふと、仰々しく支那風な敬禮をして、流暢な英語で自分を紹介した。

「ユージン・ウーと申します。閣下のもと雇人でありました李刀達の件につきましての御願ひ。ほ

んの五分間だけ、御多忙の時間を御割き下さるやうに。——」

ハムマーston氏は、先づ、その漢りのない、非廣東人らしい英語の教養に氣を奪はれた。

「トム・リーのことかね？」

「思はず、彼も釣り込まれてゐた。」

「はい、その李刀達奴でございまする。」

「まあ、こちらへ御はいり。お前達、よろしい。だが、無闇と支那人を通過させてはならんぞ。」

かう云つて、副領事は、印度人の巡警二人を、指の先きで追ひ返へした。

「李刀達、あれは、閣下、大きな魚でございましたぜ！」

老人は、くるりと眼を斜くとまじろぎもせず、下から、紅い西洋人の顔を見上げて、練絹のやうな長い髯をさんさんと撫でた。

「大きい魚とは？——この私には、支那の詩的なメタフォアはよくわからんだが？」

「老人は、軽るく頷いた。」

「現在貴國政府側でも、廣東政府側でも、あの考へても忌はしい記憶を喚び起しまする沙面の開鎗な、あれの最初の砲聲が、どちら側から發したか——御存知のとほり、非常な政治的重要點となつて居りまするだて。閣下は、はたして、あの第一發は、閣下の水兵達が放つたものと御考へになりますか
那 支 那の？」

「ふうむ——そのことか？　だが、私は、さういふ重大な事柄を貴方と御話しするには、適宜なクレデ
ンシャルと云つたやうな物の缺乏を惧れてるのだが——つまり、貴方は、どこの何人であるか、どんな
資格で私にさういふ會話を御挑みになるか？……」
老人は、乾いた掌を樂器のやうに二つに合せた。忝しく胸の間から取り出したのは、洋封の紹介
状である。

「英國の御役人達は、きはめて格式を尊重されることは、ダウニング・ストリートの美はしい傳統でし
てね、——これは、北京の英國公使閣下からの御紹介ではございませぬが、私めの職柄に關しての御賞
めの言葉で御座りまする。骨董屋でありましてな、些か、かの地に於きまして、兼々御意を得て居り
ましたもので。」

ハムマーストン氏は、數行の文字を素早く読み取ると、レターヘッドや署名にちよつと眼を留めた上
に、折り返へしてその推薦状を老人の掌へ渡した。

「——随分と手びろい御商賣ですな。では、トムとの御關係は？」

「そのことで御座りまする。何よりの要點ですな。——李刀達は、あれは、御存知かも知れませぬが
支那人でありましてな。」

老人は、稍まぢかに顔を寄せて囁いた。

對手は、西洋人の複雑な動作の一つとして、金色の和毛を生やした手を、片手の指で軽く叩いてゐた

が、その言葉によつて両手が大きく離れると、空中に輪を描いて、ハムマーストン氏の後頭部へぐるり
と廻はされた。その両手の杵に嵌まつた西洋人の顔は、紅い顔面に、紅い口を開いて、高らかに嗤笑し
てゐた。

「貴方は、たしかに諧謔が上手だ。——だが、私は、この忙しい午前の時間を、ホンコン・クラブのロ
ビーにゐるつもりで過ごしてゐはしないのだからね。」

「ところが——」老人は、險はしい眼を見せ、顔を遠退けた。「これ以上に重要な點がどこにありませ
うや？　閣下に御訊ね申上げたいのですよ。あれが支那人——中華民國國民の一人であればこそ、閣下

も、これからの話を御聴きにならうと云ふもの、もしあの青年が英國人や日本人でありましたなら、も
う事件の興味は、自から別な方面に向はねばなりません。——閣下、沙基馬路に於きまして、第一
發の砲聲らしいものを起こしましたのは、あの李刀達といふ支那人の仕わざですぞ？」

「どうして、何故、何處で、すか——？」

「さ、そこです。何も彼も御話し申上げませう。——ですが、その間に、閣下に御願ひしなければなら
ぬことは、暫時この附近の御人拂ひをして戴くことです。國家と國家との機密に屬する類ひの報告でこ
ざいまするてな——」

ハムマーストン氏は、快活に片手を振つた。彼は好奇心と妥協した。

「おい、お前達、ちよつと遠慮するやうに。——五分間でよろしい！」

それから、外交的に、卓上の煙草が老人の方へ向けて蓋を開かれた。老人は一禮しながら言葉を續

いた。
「悪い青年ですよ、あれは。——閣下も七ヶ月間料理人として御使ひなすつた上は、よつく御見越しのこと、存じますが、いたつての悪戯者でしてな。あの火、事もあらうに、横丁の賣湯屋の爐の中へ、あの緊張した一刹那、三つもの花火を投じましたのですよ。それは、私の方に歴然として證據のあることなのでしてな。證人は勿論、そこで、それからあの修羅場の出現でございます。閣下も御存知のとほり、あの青年、最後まで沙面の方に挑戰的な態度をもつて、學生や士官達とわめいて居りましたてな。——どうですこの事實が、何かの御役には立ちますまいかの？ 國際的に？」

副領事は、すべての動作を沈落させて、ひたすら、巨大な體軀の精力を、唇の間に嚙んでゐる、點火しない葉巻を動かすことのみ集中してゐるかに見えた。

中庭には、士官の聲高に號令を掛ける響がした。室内の日光は、一時ことにじりじりと退くと、不思議にそのあとからむんむんといふ烈暑が加はつて來た。

老人は、汗一滴流さずに、端然と掛けてゐた。

突然、副領事は野獸のやうに吼えた。

「賣るかね——身柄を？」

老人は、はつとなつて、片手を團扇のやうに擧げた。

金——ではないので、不肖の値は。香港と沙面とから、直ちに英國軍人の撤去が欲しいのです？
開かれた窓の外の光景が、すこぶる單調なものであつたとしても、それは、複雑な心理活動營んでゐる窓のうちの二人によつてさほど注意されてはゐなかつた。二人は、ただぼんやり、戶外一面にはびこる廣東の夏を感じてゐた。

そして、この際、ハムマーストン氏の方が、どちらかと云へば、痛切にその暑さの中にある自分を自覺した。

「個人的御忠告ですか？」彼は、やつとこれだけを云つて、葉巻へ火をつけた。

「いや、いや、閣下、交換條件ですよ。立派な國と國との取引です！——金ならば、まだほかに取り分があります。私は、さういふ向の支那人とすこしちがひしてな。」

「問題の外ですな。千八百四十三年……」

「いや、南京條約は、南京條約です。われわれ國民黨員の關知するところではない筈。——案外、お國の外交は、國民の思想生活と驅け隔つて居るではありませんか？ この間まで労働黨内閣を戴いて居られた大國民にも似合はぬ反動振りですな！」

「ミスター・ウー、何といふ私の愚かな人間だつたことか！ 一體、貴方は、かういふ高等政策に關する問題をばこの私ごとき、謂はば商取引だけの調査の役にある總領事館員の一人へ御話になつてどうなさるおつもりか！——これは、畢竟、公使館問題ですよ、否、むしろ、本國政府との外交であると思は

れる。貴方は、たしかに御話しの開拓の方法を第一番に誤られたのだ！」
 彼はかう云つて、麻の手巾で顔中をぐるぐるつと拭いた。

「——トム・リーを御存知の貴方をさし置いてですか！」
 「しかし、それは個人的雇傭関係と云ふものだ。」

「よろしい、それで十分ですよ。私はただ閣下に、それだけを御承認下されば満足するものです。この問題の持つ屈伸性は、北京公使閣下なり、それともテムバーレーン氏なりに、いづれ到達するものと思はれます。だが、先達の歐洲大戦によつて、われわれは、尠くともアメリカ大統領から民衆外交といふ一つの新しい政治を教はりました。これからの支那の衆は、皆その新しい政治をもつて、秘密外交に對抗して行くでせう。それにつけても、私は、先刻も申し上げましたやうな交換条件は、明らかにこれを掲げましても、當事者の間には何の蟠りもないことと思はれます。但し、双方で、一個人李刀達といふ人間を、宣傳の具に使用するといふことの徳義上の問題は別であります。如何でせう、副領事閣下、貴方があれほどまで御認めになる李刀達、貴方の厨房に過去七ヶ月間勤務しました李刀達の件について、總領事閣下と一言の御相談がありましたか？——」

「殆ど問題ではありませんまいな。」

老人は、はじめて象牙の骨の扇を取り出して、ぞろりと擴ろげた。

「——でも、殆ど物の數にもならぬ、アブレ者の學生三人に、多少の機密費を御惠みになるだけの慈善

心をお持ちになる閣下のごとすから、随分、御考へになれば、英國の利益かとも思はれますがな？」
 彼は涼しさに、私かに微笑んだ。

「澤山だ！——貴方は妙な云ひ掛りを附けにこの役所へ來られたのだな？ 即刻、この驛馬へ乗つたやうなお話を疊んで、ここを出て貰ひたい！ そんな閑人のお對手はまつびら御免だ！」
 ハム・マーストンは眞赤になつて、白い靴を鳴らした。

「は、は、は、——この老人が、さほど御邪魔なら、即刻退場させよう。だが、よろしいですか、ハム・マーストン氏よ、この話はもうこれだけで、英國側とは打切りでございますよ！ 私は、東洋に歴史的な執着力を持つ英國のために、この話は、この事實は、すつかりこのままを廣東政府に譲つてやりませう。——その方が、むしろ私としての愛國的な行爲かも知れませぬ。然らば、非常に御邪魔いたしました。グッドバイ！」

扇は骨の重みで、流れるやうに老人の手へ折り疊まれた。衣服の裝をなほした彼は、恭しく頭を垂れると、絨緞の上をしづかに支那靴で踏んだ。

「ま、ちよつと待ち給へ。——トム・リーは、一體、いま何處に居るのですか？ 具體的な話は、そこからはじまるのぢやないかね？」

副領事はあわて、先づ自分から椅子へ重そうな腰をおろして見せた。

「さア、老人は、髯を愛撫しながら、深く呼吸を曳いた。李刀達は、たしかにこの私が保管して居りま

する。と云つて、現在、支那に居るか、日本に居るか——そこまでは、明白に申上げるまで貴方と私の交渉が進んで居るわけでもなし、兎も角、生きてゐることだけは事實です。或ひは、この瞬間、沙面の向う側を歩行して居るやも計られませんか、それとも香港のウイクトリア女皇の銅像を仰いで汗を拭つてゐるかも知れませぬ。日本——この國は、御存知でもありませんが、孫文、黃興以來、われわれの唯一の避難地でありましてな。まゝこの話は、これ位で打ち切りませうて。グールドモーニング・ユア・エキセレンシー！」

吳友仁老人の踏み出した芝生には、烈々とした南の太陽が琥珀のやうに燃えてゐた。彼は、數歩無意識に歩み出してから、自分のバナマ帽から、胸や裾へかけて、手の込んだ綾のやうな陰影を投げてゐる頭上の榕樹を仰ぎ瞻て、何かその間から、洩れて見える蒼空にまでも感じたやうに、

「腰の弱い奴ぢや！——よほど、本國政府も疲れてゐると見えるわい！」

と支那語で呟いて、右の指と人さし指の間に、さらさらと自分の髯を捲くやうに撫で上げた。

二人のまつ黒な印度人が、もう一度、銃剣を閃めかしながら、彼れの兩傍にびたりと寄り添つた。

「ハロー、英國軍人、お苦勞様！」

若やいだ聲になつた老人は、から左右の二人を揶揄つた。

印度人の一人は、馬のやうな大きい眼を剝くと、驚くべき單純さを顔にあらはして、羊のやうな低聲になつた。

「支那人よ、先へ歩ゆめ！」

ホンコンといふ港は、高い、階級的な梯子の上に建つた、不思議な近代都市である。——

その梯子段のいちばん下は、常に、ドックやセメント會社や軍港の煤煙に、腐つた牛乳のやうに濁つてゐて、不穩な空氣の底では、原始以來の支那人が、喉を裂かれる鶏のやうに騒ぎまはつてゐる。

市街のいたるところに、經濟戰爭のバリケードが散在する。皇后大道の長さは、それ自らの姿に於て、變々たる半植民地の階級闘争のパノラマである。搾取の組織と機關と、治安の法律と大砲とは、洪水のやうにあふれきつた、無秩序で非個人的な、恐ろしく重厚な混亂となつて押しよせる支那人の生存慾と、あらゆるビルディング、エツキス・チエンヂ、酒店、客棧、銀號、錢莊、サイドウオーク、市場、取引所、碼頭、沖合などに於て、組んづほづれつ戦つてゐる。——この戦争だけは永遠だ。

干諾道の花崗岩の石堤から、ポツテンジャー區域へかけての、西洋人の商業地帯、これは、ものものしい銃眼を備へ、機關銃のやうなタイプライター、コムボメーターで武装した、占領軍の大本營であつて、大理石の城壁の一つ一つは、牛肉のやうに脂ざり、海賊の眼を持つた無數の資本主義の前衛によつて充たされてゐる。そこから、世界の放射される殺人光線のやうな無電とケーブルとは、直ちにニュー

ー・ヨーク、ロンドン、東京、上海の市場を、それぞれの電波力によつて騷弄し激動する。事務所の掲

示板の数字の桁の増減は、全然その事務所と關係もなさそうな場所に、新しい武器を持つた傭兵の群が、古るい馬蹄銀で買った毫碌督辦の支配を顛覆して、城壁に圍まれた都會を掠奪強姦してゐる。

香港廣東澳門汽船會社の碼頭から符箕灣へかけて、大食した工場主のやうな外國汽船や、一擧にして數千人を殺そうと身構へしてゐる將軍のやうな軍艦や、カデットから始めて金モールを着けた少壯士官のやうな驅逐艦などが、入り變り立ち變り出はりして、轟く號令を港へむかつて吐き掛けると、磁力に吸はれるやうな數限りもないジャンク、石炭船、荷船、家族船、サムバン、物賣船、供水船の群が、あらゆる角度から聚まつて来る。これらの黒い、小さな蟻のやうな船は、陸の人間よりも衝動的であり、群集心理に富んでゐる。……

ホンコンの上部構造は、梯子段の七百フィート以上から構成される。支配階級の法律は、これ以上の高さに、支那人の昇降を嚴禁してゐるのだ。そしてホンコンが支那の領分であつた時代も亦現在も山の高さに變りはない。ウイクトリア・ピークは、昔から一千八百フィートの雲上に聳えた。

上部構造には國旗がある。文化がある。贅澤品がある。美人がある、音楽がある、温度でさへも、下層の世界とはシャツ一枚はちがふ。モーター、ケーブル、電線、軌道、自動車、水道、下水、ラヂオ……これらの近代文明の神経系統は、大理石の殿堂とふくいくとした百花園に鼻孔をひろげてゐる資本戰の元勳や參謀に、戰場とらうるさくない程度の聯絡を取ることによつて快よい熟眠を與へてゐる。高價な地價の調節によつて地所をひろく取り、颱風に對する耐久力そのものである、それらの花崗石の上に築

かれた大理石の邸や、殿堂や、別墅や、城廓は、阿片戰爭以來、奴隸のやうな支那人によつて年々年中、石を運び、木を伐り倒し、地固めをして、最後に西洋人の建築技師の指圖に應じて造り上げられたものだ。そこから、微妙な策戰を講ずる英國紳士達は、天然色の地圖のやうに展がる深州灣、鯉魚門、九龍灣、半島、島嶼、デルタ地方までの占領區域を、寶石にひかる指先で指し示すことが出来る。足下のウイクトリア市とホンコン港内とは、いつも手布のレースとコツプの底から、ルーレットの盤のやうに透かして見られる。だが、七百フィート以下に支那人を押し籠めた彼等も、七百フィート以上にまで達する支那人の視力を、法律で縛るわけには行かない。そして、現代の支那人は、カンフル注射で起き上がる病人のやうに、時折頭を擡げては、血走つた眼付で山の上を瞻上げる習慣を持つてゐる。そこで、劣等民族を劬はる傳統に優秀さを誇る英國の紳士達は、サー・アーサー・ケネーデー總督時代から支那人の眼を痛めまいといふ親切心で、この山の上に澤山の樹木を植ゑて、あけすけと支配階級の虐殺的な豪奢と富とを見せまいとして、成功した。七百フィートの制限が、「公衆衛生と土地法」といふ人道主義的法律によつたとすれば、このことも、水源涵養といふ非常に都合のよい口實に背景づけられた。そして、深い木立に隠された大邸宅群の間には、戰爭に勝ち誇つた紳士達が、「ストランド」や「ヴアニデー・フェア」に欠伸を催すと、ゴルフに、競馬に、偽善的な戀愛に、帝王主義的な飲み明しに、ギリシヤの神々のやうな淫蕩な時間を過すのである。

上部構造と下部構造とに極端な軋轢があつてはならない。どちらから見ても、それは氣持のいいもの

でけない。そこで、植民地政策の一定の法式に則つて、山の七百フィート附近の中腹地帯の重要性が生じて来るわけだ。どんな悍猛な支那人と雖も、死を惧れることは英國人と變りはないではないか！ はげしい彼等の生存慾を鎮靜するアンテ・ドートは、「死」の觀念を常に彼等の頭に植ゑ込むことに限るのだ。寺院と、慈善病院と、墳墓と、死體解剖所とは、「死」の各段階に應じた表現であり、それらを山の中腹に密集することによつて、資本主義は肉薄するプロレタリアニズムと適宜な遠近法的胡麻かしをつけることになるのだ。朗らかな鐘、香の煙、ゴシック建築の持つ空洞の威嚇、それに女の胎内から生れたことのないやうな偽善的な牧師、——消極的に支那人の死の恐怖を嚇かすにはこれで充分である。

かうした用意周到な搾取制度に庇護されながらも、野蠻な支那人は、生意氣にも海賊となつてホンコン近海をひどく荒らし廻はる！ 豚群の如く家畜化された彼等が、ついこの頃まで、やはり海賊を働いてゐたアングロ・サクソンを脅かそうと云ふのか！——首は飛ぶ、支那人であるが故に、海賊の首は、蜜柑のやうに飛び落ちる。

もしホンコンの街で、外國の女王や皇帝の銅像が林立してゐるとか、コンノート、デ・ビュウ、ボツチンデヤー、ケネデー、モリソン、ボナムなどといふ街の名は、憎むべき支配者達の名であるとかわめきちらして演説をはじめめるものがあつたとすれば、一八八八年以來の支那人取締法や一九一二年度の團體取締法が、直ちに適用されるし、又、新しく法律を作製したところが決して未決拘留者を處罰出来なわけではない。殊に最近の新しい經濟戰術を教へた支那人が屢々歐米で學んだ學生の煽動に乗つて

起こすボイコットには、れつきとしたボイコット取締法が刪立されてゐるではないか。輕蔑すべき理想主義者、孫逸仙の乾分の鄧斐芳が發行してゐる、危険な民主主義新聞「現象報」は、わづかに二千かそこそこの出版部數しか持たないのであるが、これはいつでもめつけ次第に、南京蟲のやうに捻り潰して來た。

——かう考へて見ると、獸のやうな破浪漢と、水兵あがりと、博奕打と、退職軍人と、三百代言との雑多な集團であるホンコン市民達にとつては、水も洩らさぬ支配制度によつて、堅尼地域から灣仔の貧民窟にいたるまで、支那人といふ支那人は、セメントの壁へ封じた石ころのやうに、完全に七百フィート以下に詰め込まれてしまつたやうに思はれないでもなかつたが……そこに、まだ何となく不安な何かがあるやうな氣懸りが潜むのである。それは、單なる侵略者の被侵略者に對する猜疑心であらうか？ 謎のやうな廻轉性を持つ東洋人の無道德に對する、西洋人の國家觀念の戸惑ひであらうか？——いや、いや、もつとほかにある。何かある。

食ふことと、金を惜しむことと、手鼻をかむことをしか知らない貪慾な支那人に、どうして廣東政府の急激な建て直しが出来たらう？ 英國人の金で編成した陳炯明の軍隊を破つたのは何の力だらう？ あの黄埔軍官學校の組織的な編成はどうして生れた？ 溝泥にころがつて眠むる苦力さへも、小生意氣に三民主義などと論じ立てるのは誰が教育するのか？ むやみに勞役に對する報酬だけをやかましく云ひ立てるコツクを見ろ、アマを見ろ、下級事務員を！ 英本國の優良な勞働者でさへも最近の支那人の

やうにボイコットの、ストライキのと、勝算のない争議は起こさないぢやないか？ 英貨排斥、日貨排斥、取銷不平等條約——その裏には、何が策動してゐるのか？ 各國が怪しい、わけても、ロシアが！

かう思つてゐる矢先に、ホンコン市民の眼の前には、意外な一つの現象が突發した。それは、一頭の牛が赤い物に驚いて駆け出すと、數千、數萬の牛が、とどろと土を蹴つて動き出す様な、無数の支那人苦力、労働者、事務員、船員達の放心的な、實に不合理極まるホンコン脱出であつた。——
最初の船が、灰色な五百人を積んで九龍へ行くと、次の汽船は千人を満載して廣東デルタ地方へ出航した。次第に中央魚菜市場附近に物賣りの影がうすれたと思ふうちに、皇后大道の支那家屋には、瀕死の病人と、娘の子の赤ん坊だけが取り残されて。家は大半からあきになつてしまつた。南北行やウエスト・ポイントの古風な支那人の店舗には、いつもの爆竹の音も、婚禮の馬鹿騒ぎもなくなつて、がらんどろになつた店先に老人達がだらりと水煙袋を膝へ置いて口を開いてゐた。あらゆる海の畸型兒を聚めてゐるやうな支那碼頭にも、いつとはなしに、その一艘つつがどこかへ漕ぎ去つて、古靴を脱ぎ捨てた演説會場のやうであつた場所は、青い、海面を湛へてゐた。たしかに、そこは絨緞を敷いた室内のやうに静かになつた。何の理由もなしに、ばたばた仕事を疊んで行つてしまふ労働者のために、大概の工場では山火事のあとのやうに煙筒だけが聳えて見えた。……日頃のんきな支那人が、あたふたと急いで行くときの後姿ほど忙しさを感ぜしめるものはない。

ホンコンの市民は、何かの兇變を感じた。これは、眼に見えない饑饉が迫つて来たのではないか？ 恐ろしい洪水か、戦争でも？ この急變な脱走は、人間の造つた都會から、今にも人間をすつかり拭ひ去るのではないか？

果して労働者群の動向の彼方から、ホンコンといふ階級的な大きい梯子段をゆるがすやうな報告が来た。——五・三十事件！

つづいて、もう一度、梯子の全階段が巨きい震動でひどく揺すぶられた。沙面事件！

そして三萬人からの支那人をからにしたホンコンの市街の空虚には、すべての英國人を戦慄させる合言葉が、颱風の豫告のやうに見る見るひろがって行つた。
『ソヴェート・ロシア！』

支 那
一瞬間、このホンコンの市街を、李刀達は、ホテルの窓のスクリーンから恐ろしいものに思つて瞭おろした。
窓のすぐ上には、朝霧の西洋婦人のやうにエールされたウイクトリア・ピークの連丘が聳え、その下には、片側だけ日光に向いた建物の壁が、うつろなポルテコオを睜つて、並木の後から伸び上るやうに

して四角な頭を揃へてゐた。
いつもの朝の賑ひは、瘦せ落ちたやうになつてゐた。妙な秋が来たやうなものだ。
撒水夫に見捨てられた、そろそろ照り返しのはげしくなる舗道の上には、ひよろ長い影を投げながら、印度兵と英國の下士官が、傳單を蹴りながら歩いて行つた。街路掃除人でさへも、もう廣東へ引上げてゐた。

しばらく無言で英字新聞の朝刊をがさつかせてゐた王英先生は、室のソープアから太枠の老眼鏡を擧げると、も一度李刀達の注意を促がした。

「——で、その怪しな男といふのは、どちらの方面へ行つたかな？」
李刀達は、窓から眼を離すと、重苦しい氣持を振り切つて答へた。

「——碼頭のところ、私は振りかへつたのです。やはりさうでした。誰が貴方、猫の仔のやうに丸くなつて眠つてゐる料理屋のボーイなどに、何が出来ませう。やはり、この私に肩すかしを食はせやがつたのですよ。……で、船を彼奴が降りた。私はちよつと電柱の下で、大勢にまじつて、海の方を向いて、小便をしたのです。生憎と私の後ろに、山の蔭あたりの漁師らしい大男がゐたので、彼奴、私の姿を見失つたらしかつたですな。云ひわけばかりの手荷物を抱へて、港灣局の横丁を、きよるきよるしながら、たうとうラダー・ストリートの方へ鼠みたいに隠れてしまひました。今度は、私の番だ。あん畜生、いい加減に俺を救しやがつた、と思つて、あとを尾けようと思ひましたが、やはり先生のところへ伺

つてみないと、まだ誰か私を見成つてゐるやうな氣がしたので……そのままになつた次第です。」

「ほう、ラダー・ストリートか？ あれは急な坂町だ。……」

「誰か住んでるんですか？」

「さア、いろいろな人物が住んどるが、」

「茶館の手代をやつたなんて——ちえツ、人を馬鹿にしていますよ。ですが、一體、何の廻はし者でせう？」

王英先生は、今度は、自分で立つて窓から瞰おろした。

支那人を、體格の上から二つに大別すると、先生は肥つた方の人物で、それも脂肪肥りといふよりは、逞ましい筋肉の發達によつて白麻の洋服が、フットボールのやうに張りきつて見えたのであつた。眉毛と眼と鼻と頬とが、額と頸の重たるさでくちやくちやといつしよに寄つたやうなところに先生の特徴があつた。そのまんなかだけ緊縮した顔を、黒い太枠の眼鏡がまかに二等分しようとして、二等分しきれない恨みを、部厚い下唇が不平を云はうとしてゐるらしく突出してゐる。總じて、學者肌らしい、口で云ふよりも五倍も物を考へてゐると云つた風の老紳士であつた。李刀達には、昨夜、紹介の書簡を出してから、いつまでも親しめる人らしくこの老人が見えた。

港の方から、鋭い汽笛が壁と壁の間にまぎれ込んだ。
何かを訪ねようとして、振り向いた李刀達の方へ、老人は猫背をくると向けると、澁いやうな笑ひ



を見せた。

「あれを見よ。」

二階であるその窓からは、磨き立てた眞向ひの洋館のガラスに、鮮かに影を曳いて、一頭の白い馬が通つた。馬の背には、ぎらぎらした鞍の上に横乗りすんなりと掛けた、一人の女が西洋人らしい乗馬服に身を固めて、ゆるやかに馬の動きと共に上半身の調子を取つてゐる。

黒の山高帽に、黒の裳、赤革の長靴に、線のやうに細いスイツチ、飽くまで眞つ白な動物と、乗手の姿はくつきりとコントラストを描いて、見てゐる眼がまぶしいくらゐであつた。

「あツ、ありや支那人ですね？」

李刀達の驚きに、老人は、柄にもなささうな喉聲で笑つた。

「ホンコンの名物だよ。彼女は！」

「へーえ、誰ですか、一體？ 大膽きはまるね、この毛唐の街に！」

「別嬪だらう？——曲者さ。恐らくあんなあばずれ女は、中國ひろしと雖も、たつた一人しかゐないだらうよ。あれが商賣なんだ。」

「すると、何か、曲馬團にでも——？」

老人は、その言葉に、両手をちぎれるまで振つて笑つた。

「曲馬團か、これは妙だ。何、人の姿さ。ああやつて、毎朝遠乗りに出るんだ。——それ、お前が昨

夜、怪しい男を見失つたと云ふラツダー・ストリートに住んどの王資平といふ金持の妾だ。……あッ、これは、ひよつとしたら——」

それきり老人は、窓から顔を引込めて、もとのソーフアへ重さうな弾機の音を聞かせて掛けた。李刀達にはまだ、腕を伏せるやうな蹄の音が耳に残つてゐた。谿谷のやうに曲つたビルディングの袖に、馬上の女も、馬の影も白い幻影と消えてゐた。彼は眼の裏が、ちかちかと疼むやうな気がした。

「おい、李刀達、かうしちや居られない！」

對手は、もう一度弾機の音を聞かして、樽のやうに室のまん中へ飛び出した。

「しかし、待て。……あの女が歸へるんだから、今は——」

彼は懐中時計を出して見て、しきりに口の中で何か呟いてゐたが、しまひに、

「よし、間に合ふだらう！」と云つて、別室の帽子掛のバナマ帽をめぐめて歩を運んだ。

「ついでにお出で、——お前は、今日からわしの従者といふことに。」

李刀達は、何が何やら一向に要領を得ないうちに、王英先生によつて、扉の鍵はおろされて、宏莊なキング・エドワード・ホテルの油を流したやうな廊下に立つてゐる自分を見出した。

幸ひと、朝起きしなに、老人によつて手渡された洋服は、前に働いてゐたといふボーイに背丈がしつくり合つてゐるので、昨日以来の汚らしい服装を脱ぎ捨てることが出来たのであつた。

ストライキがはじまつてから、リフトが、支那人ボーイ達にすつかり投げ放しにされたので、客はぶ

つぶつ云ひながら、正面の階段を、昇つたり降りたりしてゐた。それらの一人一人が、悉く英國人だつたので、李刀達は忌まひげに唾を吐いて歩を歩いた。

老人は、大きいボールのやうに、階段を、丸く駈け降りた。

「あッ、自動車がない！」

表へ出ると、老人は氣短かにさう呟いて、またもとの帳場へ取つて返へして、何かをマネーチャイらしい英國人と談し出した。

間もなく、二人の支那人は、横柄な外國人の運轉手に頼んでしやくられながら、音もなく滑つて来たロリス・ロイスに朝の風を切つてゐた。

市街は、どこを見ても英國の軍人の姿のないところはなく、銀行や役所々々には、きらびやかなバンドを締めた兵隊が、ぎらぎらする銃剣をつけた小銃を構へて、審かしそりに通行人を睨めてゐた。

「どうなさるんですか——何處へ？」

「いや、面白いことに出遇はすかも知れんぞ。まア、黙つて見とれ。お前、王資平を知らんな？——」

「口をきくんぢやないぞ。」

はじめて、眞剣らしい顔をして、王英先生は眼鏡の奥から、じつと李刀達の顔を熟視した。

「毛髮屋の二階——不思議な老人——ホンコン——王先生——馬上の女——時計——」と考へてみて、

李刀達にはその悉くが、今にも非常な苦痛を伴つて、大きい切疵のやうに覺める夢であるやうな気が

した。神祕と、冒険と、芝居氣の好きな彼でも、ここまでは運んで來られたくなかつた。

「いつたい俺は何をして居るんだらう？……何處へこの自動車は走らうとするのか？……俺だけが正氣で、ほかの人間は皆沙面の事件で氣が狂つてしまつたのかしら？……」

何かの病氣の場合のやうに、しきりに鈍い苦しみを感じて居ながらも頭だけは硝子のやうに牙えて來るのを彼は感した。そして、銳利な頭腦の働きは、自分の現在營んでゐる行動とすれすれになりながらも、水の上に影を落す飛行機のやうに、それを遙かに下の方に眺めて一直線に、夫自身の進路を走つて居た。ただこの際、李刀達の一つの信頼は、あの二重壁の部屋で妙な老人に言はれた、

「王先生は、謂はば儂の片腕とも云ふべき人でのう。革命の爲めにはずるぶん功勞のある仁ぢや。」といふはつきりした音吐の記憶だけである。

自動車は、ラダー・ストリートへ切れる皇后大道の角で止められた。

黙々として、賃銀を拂つて、人差し指を元來の方へさした老人の無表情な顔には、極端に英國人を鼻であしらつたやうなところがあつたので、李刀達は心ひそかに威張りちらした運轉手をあざわらつた。

横町の小路が西と東へ別れるのを、二人は傍目もふらずに坂路を上つた。

と、そこへもう一度朗らかな馬蹄の音がして、先ほどの女が二人を超越して上へのぼつて行つた。何かの拍子に、自動車の方が彼女を途中で超越したのを、李刀達は見そびれたのにちがひなかつた。たくみに組み合せたセメントの勾配が、一段二段と桁を増して行くと、さすがにあと足で障害物を越

えやうとする時のやうに馬が突つ立つので、鞍の上が不安に見えたらしく、女は馬を止めると手綱を引

きながら、軽く長靴の皮をしなはせて上つて行つた。

「良い馬だな。」

老人は、とつて附けたやうな讃詞を浴びせた。

「良い女だな。」

しぶい口調で、前の文句を訂正するやうにかう云つた言葉は、かうした狭い屋敷町で、眞顔な老人の口から出るものとは思はれぬほど見當ちがひな氣がした。

最後に思ひ切つてせゝら笑ふやうな口吻で、老人は前を行く女に留めを刺した。

「——あんな馬は、二匹と支那にはないんだ。」

恰度その時、女と馬とは、建物ならばもの三階も高からうと思はれるところで、ぐるりと向きを代へると、女が手にしたスイッチを水車のやうに振り廻しながら、何やら聲高に叫んだと思ふと、横手のいかめしい石造りの門の中へ、馬諸共に姿を消してしまつた。

さすがに王英先生は太り肉だけあつて、せいせい息をはずましてゐた。女の這入つて行つた邸の前まで來ると、彼は鼻で息を吸ひながら、追ひ纏るやうに李刀達のコートを引いた。その頑丈な鐵扉を

持つた石門は、狂ひのない曳出しのやうにびつたり締つてゐた。

老人はしきりに、小首を傾けながら、門柱の何處かに呼鈴を探がしてゐた。

「こゝは呼鈴なんかないんでせう？」
から李刀達に注意されると、老人は始めて長い間の謎を解いたやうに、密集した眉毛と眼と鼻の間をひろげてにやりと笑つた。

「さうだ——おい、開けて下さい。わしは、キング・エドワード・ホテルに居るドクトル王英ぢやが、至急御主人にお目に懸りたい！ 急用ぢや！」

噎れた彼れの大聲に對して、意外に眞近い所から誰かの應へる聲がして、半分ほど花模様鐵柵になつた鐵扉の向うに、眼の險しい、まんぢゆうのやうに頬の張り切つた、若い支那人の警官が、背中にライフルの筒先をぎらつかせながら、ぬうと上半身を現はした。

「王英博士ですか？」

「急用ぢや。御主人はおいでかの？」

「さあ、伺つて見ませう。——貴方も知つてらつしやる通り、王資平氏はいつも何處へ泊まられるか、私共にはちつともわからないのでしてな。別荘が四つあるんだから、なかなか泊り歩くにも骨でせうよ。」

この門番警官のあいまいな口吻に老人は殊のほか立腹したらしく、せき込んで扉を叩きながらかう云つた。

「第三夫人燕氏が乗馬から歸つて来たんだからきつとゐるにちがひない。——嘘を云つたら承知せん

この權幕に忍れて、警官は鏡をがちやがちや云はせながら、伏目勝ちに扉を開いて、白手套の手で老人に擧手の禮をした。

開かれた扉の向うには、何かの花をつけた古木が立ちはだかつてゐて、その氣ちがひじみた陰影のしなだれかかつたところに、眼の冴えるほどの大理石の洋館が、深々と青と白の立竊の日覆ひを下ろして、涼しそりに建つてゐた。道は細かいダイアモンドの屑を敷き詰めたやうに、歩く者の眼を無數の反射でちかちか射した。それが、老木の前後二た股に絞れるところで、先刻の馬の蹄の跡は、邸とは反對の、西洋人だけが工夫する複雑な、屋根のない石の建物らしい方へ消えて行つた。

二人の這入つて来た表門が、もう一度鏡前を下ろされると、邸内のどこかに蟬の鳴く聲がした。

表玄關まで行きつかぬうち、正面の大扉がいつの間にか開いてゐて、青桐の上衣を着た支那の青年が象牙のやうな額を見せて、二人の前に敬禮してゐた。

廻轉椅子のスマイルノフは珍らしく廻轉椅子から離れた。

彼は、その不恰好な巨軀を、財政廳のビルディングに向つて運んだ。正面の石段を昇りきると、そこに不動の姿勢を守つてゐる番兵に、上衣の裏側をまくつて見せた。裏側には、赤いリボンに彼の名が書

いてさがつてゐた。番兵は、寒さに筋肉が硬直したやうな表情で、魚の鱗のやうに擧手の禮をした。スミルノフは、さほど香りの良くないパイプの煙草をその邊に吐き散らしながら、忙しさに開いたり閉ぢたりするドアの間を縫つて、ゆつたりした足どりで二階、三階へとたどりついた。三階の中ほどのドアを、熊のやうな拳で叩くと、中から一人の士官候補生が現はれて、無言で彼を通した。

天井を高く取つた會議室には、水のやうに光る長いテーブルを差挟んで、七人の人間が、小さく、何かに壓迫されるやうに、前向きになつて相對してゐた。中ほどに煙草の煙が漂つて、灰皿を共通してゐることが解つた。高い壁のどこかには、その煙の絲があるかないかの縞を織つて漂つた。明かに彼の這入つて来たドアからの煽りが、静かな煙の層を掻き亂したにちがひない。

それと同様に、一室の視線もスミルノフの方へちよつと轉じられたが、彼の大きいパイプとヘルメツト帽とを見、その帽子の下の大きい顔が筋肉を弛めてにこつくと、彼等は安心したやうにもとの方へむき直つた。

スミルノフは、遠慮をするやうに、一同から稍遠ざかつて、一脚の椅子をぎゆうぎゆう云はせながら腰かけた。

「では、第一に決議機關、第二には執行機關、第三——これは先刻も議論のあつたところだが、獨立機關といふことにして、これで組織の大綱が出来たわけだね。——決議機關には罷工人大會があり、それ

に法政局が附屬する。この法政局は、臨時首席團五人が代表する。執行機關は罷工委員會の手に在るのだが——その細目は、まだ準備委員會の方で確定した案を寄越してゐないが、おそくも今晚までは大體のところ起草されるらしい。それから獨立機關だが、これは労働學校と醫者、それがまあ直接ではなないが罷工團の組織の一部に参加する。——大體この經濟絶交は今までの排外運動のやうな自然發生的なものではないかん、どうしてもこの際帝國主義打倒の國際的運動にまで結び付くべきものである。といふのが一般戦略であつて、現在の戦術としては今云つたやうなもので闘争を開始することとなるのだ。」

かう云ひ終つた一人は、ポルトフォリオを疊んで新しい煙草に火を附けた。
「執行機關の職能は、僕の考へではかなり複雑な活動範圍にまで互るだらうと思ふが、準備委員會の方では、よくその性質を研究してゐるだらうかしら?——たとへば、スキヤツプに對する裁判だとか、ピケツテングの配置方法だとか?」

反對の方の、窓の光を背負つた、海坊主のやうにぼんやりした姿の男が、餅をちぎるやうにねばつこい口調で質問した。

「そりあ、勿論さ! この際武力に訴へてもわれ／＼はホンコン封鎖を裏切る工賊を排撃せんならん……出来るなら、この際軍事委員會から加勢して貰ふ方がいゝと思ふ。」
これはわりに若やいだ、肺の力に任せて發音した言葉であつた。
そこで、この非公式な相談會にちよつと議論の分岐點が起つたらしい。スミルノフには、これ等の支

那語は一言も解らなかつたのであるが、數人の人間が一度に持説を主張するとなると、勢ひ彼の注意を惹かないわけには行かなかつた。彼は眼を細めて、熱心に細い腕を振り廻してゐる工部部長の廖仲愷の黒い横顔を見成つた。相變らずこの男の前には大きい鞆が載つてゐた。

しまひにかん高な支那語の粒々が砂糖のやうに沈黙の中に溶け込んで、ひとしきり皆が煙草を喫ひかけた時に、支那服を着たその一人が、拳の腕時計を捲くり上げて、兩肩に力を入れて起ち上つた。

「僕はこれから二つばかり會合があるので、これで失敬します。大體今の御説明ではつきりしてゐるやうだが、すべては基金の問題だ。それには、この際各國の華僑團體に打電して寄附金を募ることだ。

——何しろホンコンから三萬人も來てゐるし、それにこの廣州地方の勞働者全部が参加すれば、なまやさしい軍團の給料どころの騒ぎぢやあないからな。ざつと昨日勘定したゞけでも、總數十萬人からの罷工参加人員になるぞ。それを賄つて行くには、この借金だらけな廣東政府では明日からでも破産だ。僕は元來樂天的な方だが、今度ばかりはちよつと前途のことが見透せないね。……まあ、僕の希望は、今日のところその位にして置いて、あとは一つじっくりと會議にかけて練り上げようぢやあないか。民衆大會やその他の諸團體の決議を執上げるのもよからうが、何よりも先に戰爭は金だ。しかも、この戰爭がいつまで續くかは、經濟戰の常として、輕々に豫測は出來ない。——やるなら、今度こそは、負けたくはないからな！」

彈力のある言葉でかう述べた支那服の男は、一同に會釋して、戸口の士官候補生からバナマ帽を受取

ると出て行つた。この男は、昔辛亥革命當時、一介の青年でありながら、爆彈を抱へて清朝の攝政王をねらつたので有名である。スマイルノフは、腫を大きく睜いて、どこかしら滑かな餘韻を曳く支那語の發音者である汪精衛を見送つた。

しまひに、席上の誰彼も、各自に時計を出して見て、二三の雜談を交はしたのち、椅子を立ちかけたので、スマイルノフも足元の痰壺へパイプの灰を落とすと、椅子から腰を上げた。

「ちよつと、廖仲愷さん——少しお話があるの、」
大きな男は、稍氣恥しげに小さな男に向つて動いた。

「スマイルノフさん、私個人にですか？」
廖仲愷は、演説する時のやうに椅子を片手につま立てした。

「少し内密です。急ぎますか？」
「いや、御用ならば……」

「誰も居ない所がよろしい。——この人達もう歸るのでせう？」

「對手がその返事をするまでもなく、役人達はめい／＼に急からだの重みがふえたやうな足どり、黙り勝ちに室内を出て行つた。廖仲愷は、ふりかへると、扉口に立つてゐる蒼白い士官候補生へ暫時遠慮するやうにと命じた。

「広い室内は、この大男と小さい役人との異様な二人きりのものになつた。スマイルノフは對手を窓ぎは

へ誘つてちよつとの間しげくと顔を打成つた。

「廖仲愷さん、貴方、氣を付けるとよろしいな。——誰か、貴方を尾けねらつてゐる者がありませんか？……つまり、貴方の敵か、味方か？ 心當りはありませんか？——實は一昨日からどうにかしてお知らせしようと思つてゐたんだが、電話でも都合が悪いし、と云つて、貴方はこの通り事務所にはちつともお出でにならんし、」

かう云はれた廖仲愷は、濃いまばらな口髭を二三度指先でこすりながら、始めて英語でも習ふ人間のやうに暫く相手の言葉を考へてゐた。最後に勢ひよくその口髭を引つ張ると、俄然として彼は頭を眞つ直にした。

「有り難う——萬謝です！ しかし、もし私が、自分の死に對する恐怖から、もしやと思つた人間の名を、たとひ半分でも口にしたとすれば、それはわれ／＼の革命工作とは相容れない臆病の仕打にちがひない。——有り難う！」

この最後の言葉に力を籠めた工入部長は、あまり大きくない黄色な手を差伸べて、ロシア人の白つ茶けた拳を握つた。

「ほかの同志達、皆忙しいです。私一人この通り遊び人です。だから御注意します——この間貴方が同志ボロージンとお會見になつた直ぐあとで、私何気なく窓の下を見ると、二人の人間が、勿論支那人です。貴方の自動車のあとを見てゐました。一人は紳士か、商人といふ身装、首の太い男でした。もう一

人は、苦力です。をかしいぢやありませんか、この全く關係なさうな二人が、何か手眞似で貴方の自動車の行つたあとで話合つてゐるのです。……ほんの一秒時間のことで、それは好奇心から出た見物人とはちがふ機敏さを以つて交はされた暗號です。同志ボロージンのおもわくでは、多分貴方が少し頻繁に亞洲酒店に入しなされるからだらうといふことです。——どうも、われわれロシア人には、支那の同志の混み入つた昔からの關係が解りません。」

廖仲愷は、嬉しさと悲しみに同時に打たれたやうなちぐはぐな表情をして幾度も頷いて見せた。しまひに、相手の言葉が途切れると、彼は両手を翼のやうにひろげて見せて、急に快活に笑つた。その片手には大きい鞆が子供がぶらんこへ乗つたときのやうに震れてゐた。

「殺られたら、私の妻が居りますよ。……あの女には、たいていの男が敵ひませんからな！」

「何香凝さんですか？——いや、貴方は中々のユーモリストです。」

思はず釣り込まれてスマイルノフもいつしよに笑つた。しかし、この突發的な笑ひ聲には何かしら東洋人流な不可解——不自然なものが感じられた。孫文の高弟であるこの小さい活動家にも、人に知られぬ憎みがあるのだと、スマイルノフは皺の深い東洋人の顔を見て、しみじみと感じた。

二人はもう一度握手して別れた。

スマイルノフの本性は、自分も動きながら他の動いてゐるものを見ることを要求した。さういふ意味から、現在の廣東市をぶらぶら歩いて行くことは、彼の觀察を豊富にする絶好の機會で

あつたとも云へる。

多数の労働者が、新聞社の前に集つて、腰を踏めながら、張り出された新聞を讀んでゐる。その或る者は、他人の頭が邪魔になるのでからだを古い釘のやうに曲げて、頭だけ突つ込んで活字に眼を曝してゐる。讀み終つた二三は、熱心に手を振り動かしながら何かを論議してゐる。そこには何の不自然なものもない。支那の新しい革命的な動きに彼等は熱狂してゐるのだ。大衆がこゝまで動いてゐれば、それをリードする國民政府は非常に樂だと謂はねばならない。しかし、あまり容易に支那の大衆が雷同するための指導者側の安易な氣持が、かへつて思はぬ誤謬を招きはせぬか？ ベラ・クーンのハンガリア革命に於ける、ボロージンのトルコに於ける、それぞれの失敗の原因はどこにあつたらうか？——スミルノフは、煙草の煙と共にかういふ考へ方を空中に分散して歩くのである。

それだけでなくとも人口の密集した廣東は、今はホンコンからの罷工者や、九龍やデルタ方面の労働者をくはへたので、狭い舊城内の街々は、凄まじい人間の洪水が渦巻いてゐて、その元氣な、闘争的な騒々しさは、殆んどどんな國のカーニヴァルにも想像し得ないぐらゐである。

かういふ群集の都會に溢れきることは、何處の國でも十年に一度とはないことだ。この複雑な群集には、いろいろな個々の要求や、希望や、生活を通じて、海中の魚が一色に見えるやうに、唯一つの強い力が溢れてゐるのである。すべてを綜合した無産階級民全般の烈しい反抗意識が、今何かの方法を通じて、具體化しようとしてゐるのである。數十年も前から失敗を重ねた彼等は、唯一つの實行方法として

組織を持たうとしてゐるのだ。組織の要求に應じて、組織を計畫する頭腦がその役を果さうとしてゐる。

スミルノフは大股に群集の間を拾つて歩きながら、長い陰鬱な曇天のあとで、久しぶりでからりと晴れた夕立を持つたやうな快さを感じた。なるほど支那の大衆もロシアの大衆も、その本質には變りはないものだ。それを變つたものとして差別化し、劣等視し、半植民地視するのは、たしかにブルジョアの見方である。ブルジョアジの奸策である。

とある街角にさしかゝつた。急いで通り抜けようとして、ふと彼の眼に止まつた一團の労働者の煤ぼけた酒店で、半裸體になりながら大きい圓卓を圍んで話してゐるのに出遇はすと、ちよつと立ち止まつて見る氣になつた。一人の黒布を腕へ巻いた労働者は、箸を取り上げると、樂師がペトオンを揮り上げるやうな調子で、咽喉いつばいの聲に何かを叫び出した。少しは酔つてゐるのかも知れないが、その男の瘦せた咽喉首に膨脹して動く頸動脈をひと眼見ると、スミルノフは直感的に、

「時は來た！」
と感じた。

やがて、一團の労働者は鈍い重苦しさうな動作で、一齊にその男の叫んだことを繰り返した。煤ぼけた酒店の壁から、今にも凄じい何かが飛び出して來そうな反響が起つた。思はず、外に立つてゐたスミルノフも、手を叩いた。一分間の後には、彼は完全に半裸體の労働者に包圍されて、唯にやにや笑ひな

がら彼等の突き出すブリキ罐の盃に、水とも酒ともつかぬ物音を立てゝゐる液體を拒むことに全力を注がねばならなかつた。

彼等は口々に勝手なことを喚き立てた。しかし、それは皆この不思議な赤髭を尖がらしたスラヴ人に對する好意から出てゐるものであることは、敏感なその表情でよく解つた。

何も云ふことがなかつたので、スミルノフは、試みに、

「廖仲愷」

と呼んで見た。

すると、酒店の壁が崩れ落ちるほどの響で、その友人の名前が無数の小銃のやうに彼の前で爆發した。

「孫文」

これは前にも増して、喚呼の聲が高かつた。或る者は、箸や手を叩いて、その名を繰返した。二度も三度も、同じ名が群集の間を行互つた。

スミルノフは、子供のやうに興に乗じた。思はず知らず、彼は「李大釗」と叫ぼうとして、これだけは口を噤むだ。李は黨員だからである。

「陳炯明」

勞働者達の表情は、最初外國人の云ひがちだらうと疑ふ風であつたが、スミルノフの輕蔑したやう

な唇を見ると、一齊に横を向いたり、足を投げ出したり、拳を握つたりして不氣味な土人形のやうな顔を見せた。

「蔣介石」

これには、賛否半々ぐらゐで、最初音頭を取つてゐた男の如きは、白い齒を剝いて齧の間から、蛇のやうな物音を吐いた。

スミルノフは、ロシア流に手を舉げて、のつそりとその酒店を出た。

富豪王資平の邸宅は、奥へ通れば通るほど間敷が多くなり、人間の數も殖えて行くのであつた。これは、普通の洋館ではない。

桐青の上衣のボーイは、鴨の翅のやうに兩手をひろげ、指先で空氣を切りながらさつさとひろい石廊を先に立つた。

かうなると、客といふものは窮屈なもので、他人の家へ来て、途中で無遠慮に、おい、おい、俺達はどこへ通されるんだい？——とも訊ねるわけに行かず、結局先方の案内どほりに、運び入れられるところまで歩行を冒險せねばならない。李刀達は、再三踏み留まつて、廊下のまはりの部屋部屋を油斷なく見まはした。一つの部屋には、淺葱の服に金釦をつけた樂隊が、脚を中央へ投げ出して、室をシガレツ

トの煙でいつばいにしてゐた。これは、葬式や婚禮の行列に常備になる、市内にありふれた樂隊である。富豪の邸宅はどこかちがつてゐる。こんなものにまで休憩室をあたへるといふのは、どうしたものか？ もう一つの部屋では、泣き男と泣き女とが、麻の上衣を脱いで、汗を拭きながら熱い茶を飲つてゐた。廊下が二つ曲つて、曲り目に突きあたつたホールには、鼠色の衣を踵まで引摺つた坊主どもが、雲南軍の捕虜のやうにうろろしてゐた。これらの、あきらかに、喪に聚まつたらしい群集は、いつもは、意地汚なくがやがや騒ぎまはつてゐる連中なのだ、この家では、ひっそりとして、まるで祈禱にでも熱中してゐるとしか受取れなかつた。ほんたうに死を哀しむてゐるやうなのが、かへつて怪しい。

「——どうも、變ですわね、先生。」

猫背になつて先を急いだ王英老人にすがりつくと、彼は、持前の猜疑的な表情を顔にあらはした。

「まア、誰かの葬式だらうよ。この家には、妾手かけがうようよしてゐるんだから。」

老人は、醫者が患者の脈をみたあとのやうに、快活な聲で答へた。

三人は、一つ建物を、來るところまで來ると、支那風な外廊でつなされたもう一つの建物へ出てしまつた。本來、支那建の邸を、外側だけ洋館にして繼いだものらしい。頭上には、梧桐の葉すれがした。

「ここまで來ると、道がに、老人も不審になつたらしく、

「おい、君、二階を忘れはしないかね？」

とくしゃくしゃの顔を手布でぐるりと撫でた。

「二階——には、第四、第五、第六の三人のお妾が居ります。只今、階下の第二夫人の喪で、皆いそがしいのです。すべて、この混雜の際、縁者以外の御客様は、第三夫人の別宅の方へ御通しすることにして居りますので。」

ボーイは、象牙のやうな額に、青い眉毛をびくつかせながら、やや氣色ばむて答へた。

「第二夫人の葬式かね、」

老人は、折衷式な家の門官へ足を踏み入れながら、呟いた。

「可笑しいな？……」

中庭があつて、硝子天井の下に、水族館のやうな巖や海藻のやうな芭蕉が、どこかにひそひそと、囁く水のけはひとともに、屋内ながら、こころよく汗を撥ねた。書院を通つて、客廳に招ぜられると、二人ははじめて、客席らしい物に腰をおろすことが出来たわけである。ボーイは一揖して去つた。

いろいろな聯句が壁に下げてある。ひとわたりそれらを見まはしたのち、王英は、わざとらしくあたり構はずかう大聲で話し出した。

「この燕飛芳といふ女は、有名な淫婦だよ。わしの考へぢや、どうも、混血兒らしいが、當人でさへ、どこで生れてどんな親を持つてゐるか知らんといふ代物ぢや。大概の金持で、一度はこの女の手にかからん奴はないのさ。無論、西洋人も。あの恰好ぢやろ、あれで飛行機へも乗るし、貧民窟へ時折千や二千の金をボンと投つて行く。おまけに、云ふことが揮つてゐる。——孫文は社會主義者だが、わたしは富

の平均分配を實行する革命家だつてさ。富んだ者から奪ひ還へして、貧しい者へ與へる、鄭毓秀女史でさへわたしのやつてゐることは出来ませんまいと、さ！ 笑ふなよ。近代支那の生んだ啖血鬼だね、いや、女魔だよ。云ふことはちくはくだが、腕は凄しい。上海から南方支那へかけての大莫蓮ものだな！……何權ふことはあるもんか、わしは、眞實のことをしやべつてゐるんだ。いや、誰が聴いてゐようが、燕飛芳そのものが聴いてゐようが一向にこちらは困りやしない。——しかし、あんな馬鹿女のことだから、わしの云ふことなんか、とても耳が痛くて聴いてゐるわけにア行かんだらて。」

李刀達は、話半ばで、誰かが入口のカーテンの向うへ、靴の爪先だけをあらはしたのに氣づいて、老人の肘を小突いたり、居すまひをなほしてみたりしたが、さうすればするほど、老人は聲を張り上げてがやがや嘔鳴り出すので、冷や冷やしなながらも、これには何か魂膽のあるものと見て取つて、カーテンの下の靴と、老人の南瓜のやうな横顔を半々に見成つてゐた。

靴の爪先は三遍ほど苛立たしげにダンスのステツプを踏んだが、にうつと鞆皮の全身をあらはすと、氣取つた女優のやうに齒で誰かが笑ひ出した。そつと押分けられたカーテンの奥から、二つの黒い瞳が笑ひとは關係のないほど鋭い光で一瞬間、室内の模様を寫眞機のやうに取り入れた。

「随分ね……あたし、これちや這入らうつたつて、這入れあしないわ！」

瞳の持主はそのまま西洋婦人のやうに瀟歩して来ると、二人の前へ挑戰的な嘲笑を投げた。まだ先刻からの乗馬服のままであつた女は、そのお俵な身振りや動作から、氷の表面でもあるかのやうに、爽や

かな何かの花の薫りを發散した。

「ほほう、聴いとつたか！ 結構、結構ぢや。聴かれて悪るいやうなことは云はぬ筈だからな。——時に、御主人はどこに居るか？ わしは、あんたのやうなろくでなしに會ひに来たのぢやアないでな——。」

王英老人は、眉間の皺一つ動かさずに、斜へに將几へ腰を托した女を、まじまじと見成つた。李刀達は、急に眼の眩らむ物にぶつつかつたやうに、視線をそちこちへ轉じて、やつとのことで燕夫人の方へ顔だけは向けてみても、その實、彼女のどこをも見てゐるではなかつた。

「今日のお對手は、あたしよ！——相憎と主人は、シンガポールへ參りましたの。」

「嘘をつけ！ 昨日の朝、高等法院の廊下で會つてゐる。こちらは、急用ぢや！」

老人はにべもなく弾ねつけた。

そこへ、先刻のボーイが茶菓を運んで来た。しづかは靜かであつたが、邸内のどこかは、絶えず何かのざわめきが溢れてゐるやうに思はれた。そろそろと摺り足で大勢の人間の歩き廻はつてゐるやうな。ボーイが退くと、夫人はタイプライターでも敲くやうな指先で、レースの手巾を卓へ捨てた。

「——あたしの御對手では、物足りませんか？」

「困つたな。困つた。しかし、この葬式は……一體、何の騒ぎかね？ 新聞にだつて、第二夫人の葬式のこと載つてゐなかつたか？」

老人は、ちよつと内懐のポケットをもちもちさせながら、二三度同じ手を出したり引込めたりした。

「お弔ひ？ でも、これは、既の昔に亡くなられた艶夫人のですわ。一と月前ですの。あのまま、ずうつと納棺してあつたんですが。——博士、もう貴老お忘れなのね？ その頃、『デリー・プレス』に大きく出てゐたぢやなかつたの？ まあ嫌ですこと、お年齢は召したくないものですわね。」

「それを、どうして、今日に限つて葬式を出すなんて？」

「まあ、なんて、呆れるわね！——他人の邸へお出になつて、その葬式の混雑の最中に、何故その日に葬式を出すかなんて、訊ねる方がよほどどうかしてゐはしないの？ でも、ね、貴老のことですから云つてあげますわ、人夫がないの！ この間からホンコンでは、もう満足な葬式一つ出せないぢやありませんか！ 随分防腐劑を施してあるんですけれど、この瘟氣でせう、とても邸内へ置いとくわけに行きませんの。ですから主人も出發前にちやんと廣東から電報で人夫だけは呼寄せて行つたんです。……あんな西洋人かぶれのした人でも、やはり支那人ですわ。ちやんと墓地だけは白雲山の麓の先祖代からの土地にきめてあるのですよ。」

李刀達には、輪船でいつしよになつた、俄かづくりのスパイのやうな男の謎がここで解けたやうに思はれた。この時、邸内のどこかで樂隊の物音がしはじめた。老人は、その音に耳を貸してゐたが、やがて、

「——ふむ、些か腑に落ちぬ所もあるが、折角あなたがさう云ふからには、その邊で話は打切るとする。偕て、王資平さんは、何の用でシンガポールへ出向かれたのかな？ いづれ、急用にちがひあるま

いが——？」

と、せき込んで訊ねた。

「わかりませんわ、主人の用件なんぞ。あたし達女どもには！」

「……でも、大概、王資平さんは、この春から寵愛のあなたといつしよでなけりや、どこへも旅行はせぬことになつとるやうだがの。——今朝も、あなたが、わしのホテルの下を通るんで、ははア先生まだ在宅だな、と思つて急いでやつて来た始末だ。——どうぢや、ほんとのところ、そのカーテンの背後にでも、やはり立聴しとるんぢやないか？ 王英の奴、法律家の稱號を肩に着て、何か金でも強請に來たんぢやろ、位に考へて！ はッ、はッハ……。」

およそ客として、他人の家へ來て、しかもその主人の愛妾を掴まへて、これほど無頼にがみがみ云ふ老人もあるまい。一體、この富豪と王英先生とはどんな關係に置かれてゐるのか、かう考へてみると、李刀達には、目の前の二人が何か利害關係から途方もない騙し合ひの競争をしてゐるかのやうにしか思はれなかつた。

「諄いね。——お歸へんなさい！」

女の手巾を取り上げた、きやしやな拳は、はずみで、とんと大理石の表面を敲いた。

「歸へらない。わしの直感では、確かに王資平は、在宅の筈ぢや、主人がここへ出るまで、從者とわしとは、ここで待つとる！」

燕夫人は、うるさいもののやうに、漆黒の切髪をひと振り振ると、唇を閉ちて、きつく老人を睨めたが、その石のやうな表情を、見事な急回轉てやはらかな笑顔に挫すと、朗らかな、銀の樂器のやうな聲を立てた。

「——幾何欲しいの？」

ほとんど女の紅をさした唇が、老人の鼻先を掠める近さまで接してゐた。

「五千萬弗！」

もう一度老人の細り狼のやうな拳が、ポケットに這入る。

「何、ポイコットの基金？」

「いや、これから大ストライキになるんだ！」

ポケットからは、やゝ皺ばむだ一封の手紙が出る。意外にも、それは、不思議な廣東の老人が、李刀達を紹介して寄越した封書であつた。

「お待ちなさい——」

女はすうつと手を伸ばして、壁の釘を押した。織い指が、あわたゞしげに、その釘を三度ほど押しだ。席へ戻つたときには、女の残忍なうすら笑ひが、客の頭上に閃めいてゐた。

「お前、第一夫人は——？」

同じボーイが、音もなく這入つて來ると、夫人は短かく言葉を切つた。

「つい先刻、御葬式に御出掛けになりました。」

「もう、行列は出て——？」

燕夫人は、自分の腕首へ眼を投げた。そこには小型の白金の時計が蝶のやうに留まつてゐた。

「はい、十五分ほど前に。」

「よろしい。別に變つたことはないね？ 用があつたら、呼びます。」

と、追ひ返へしたボーイの後姿に眼を遣つたと思ふと、彼女は、再びあわてゝそれを、呼び留めた。

「あの、別室へ晏晝の支度をして！ 御客さまがお二人と、あたし。それでよろしい。」

王英先生は、つと立ち上りざま、部厚い唇を夫人の方へ突出した。その唇が、炭酸の罐をあけたやうに、何かの言葉を漲らせかけると、もう一度、夫人の手巾からのすがすがしい香水の匂ひが彼を満面に押擲つた。

「五千萬弗は、もう遅いのよ、博士！——あたしが、すこしお先に失禮してるの。今は葬列が、碼頭から出發してる頃よ！ お仁良の妾が四人。棺は、あたしの友人の馬伯堯と呂雲郷、陳景山の三人が、九龍から汽車で——どこかへ運んで行つてますわ。まあ、おゆるりと、黙心でも済ましていらつしや

い！」

夫人の手巾は、婉曲な線を描いて、しきりに老人の顔を煽つた。

「——ふむ、さては、お前は、廣東から南へかけて近頃のさばり出した人攫ひ團の手引だつたのか？」

「いゝえ、あたしはね、王英先生、笑つちや駄目よ。近代支那の生んだ吸血鬼、女魔よ、淫婦！ 云ふことはちぐはぐだが、腕は、これでも凄いですつてさ！ おほほほ、ホ……。」
老人は、機械體操に疲れた人間のやうに、がつくり將几へ上半身を戻した。
「偉らい、たしかに。やりやがつた！ 畜生ツ！ わしは、お前を、たゞの莫蓮女たどしか思つてゐなかつた。——でも唯一つ聴きたいことがある。お前も悪黨なら、打明けろ。——王資平はどうしたか？ どこへ持つて行つたんだ、彼奴を？……あの革命の仇敵を？」

「まあ、まあ、王英博士、それで貴老は、二十年前にケンブリッジを出た法學者だなんて仰白るの？ ——早くホテルへお歸へんなさい。もうそろそろあたし達も引上げる時分よ。審へ押籠めてあるこの家の下僕達が、大聲で喚き出したら、英國のお巡りに氣づかれなれないと限らないわ。——ちや、ほんのちよつぱり、お土産に云つて聴かして上げるわ。人質王資平は、あの棺の中に魔酔劑で正體なくなつてゐるのさ。お金は、この家の太太が拂ふんだよ、老董！」
云ひ終ると、一步飛び退さつた燕飛芳は、後ろ手で呼鈴の鉤を邪険にくぐいと押しこくつた。李刀達はざらりと爛る女賊の腫を、口をあけてあつけらかんと打成つた。
影のやうに、竹布の長衫を着た二人の大男が、カーテンの向うから、長い袖口の両手を合はせて、音もなく室内へ迫つて來た。客廳の入口にも、同じ恰好の二人が、うつそりといつの間にか立ち塞がつてゐた。その袖口の下には兇器が潜んでゐるにちがひない。——その一人は、たしかに、昨夜の輪船

で、李刀達を擁抱つた、手の白い労働者であるのを、彼はたしかめた。
「お客様さまのお歸りだよ。——粗忽のないやうに——お送りして！」
燕飛芳は、男のやうに、乗馬ズボンへ両手を突込むと軽皮を鳴らしながら大股に床の上を歩きはじめた。
「では——」王英先生は、手紙をポケットへ收めながら、饅頭のやうな鼻を聳やかして云つた。
「一言だけ、わしも土産に云ひのこして置いてやらう。——いゝかの、燕飛芳、貴様、火をやたらに玩弄しちやいかん。危いよ。手を焼くぞ。支那の民衆運動は、烈々燃えて熄まざる火ぢやよ！ 四億の民が——完全に自由を獲得するまで、燃えつゞける火ぢや！ わかつたかの！ 李刀達、戻らう！」
かう云つて、女の斷髪の下に、かすかにダイヤのペンダントの顫へるのを見て取つた老人は、壯漢達を押し除けながら、空惚けた顔をして、中庭へ降り立つた。

廣九鐵路の火車頭を出ると、葬式の全線が、その練つて行く長堤の長さによつて證明された。
先頭の赤旗の緋の錦幢を立てた旗持の一團が、陽ほつりに、水底を潜る紅い魚のやうに遠く見え隠れした頃でも、まだ會葬者の一群は、火車頭の廣場で、列もつくらずに立話してゐた。すべての道具や樂器や人間や車輛が腰をあげて歩るき出すと、行列はほとんど二哩近くもあつた。

